

川柳塔

昭和六十二年九月二十五日印刷
昭和六十二年十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷七三七号



日川協加盟

No. 737

63年度 二賞発表

十月号

63年度 同人総会と

二賞表彰 本社10月旬会

日時 昭和63年10月2日（日）午後1時開場
会場 大阪市立労働会館

JR環状線又は地下鉄中央線「森ノ宮」下車す
ぐ（日生球場東側）

電話〇六（九四二）六三三二（代表）

▽同人総会 午後2時から

〔議事〕①会計報告②高杉鬼遊③事業経過報告④

辻白溪子⑤役員改選⑥質疑応答

▽二賞表彰旬会 〔詳細は最終頁をご覧ください〕

会場略図



兼題 「幸い」「走る」
「眼鏡」「話」

各題3句 締切6時30分

川柳塔社

KIRIN

21世紀へ乾杯

本格派。

旨さの辛口。

アルコール度数高め
キリツとしまるドライ。

キリンビール株式会社

キリンドライ

標準的な発泡量は普通のビールと同じです。未成年者の飲酒は法律で禁じられています。



川柳の出版

西尾 栗

「千万言」飛びかう時という題で、鶴見俊輔氏が珍しく川柳のことを書いてるので、一部転載してみる。

「川柳塔」五月号には、八木千代選の「茴香の花」という女性コーナーがあつて

懸命にわたしを遠くとおく置く

広本文子

選者によれば、これは川柳のいちばんの姿勢だそうだと書いている。そして時実新子の句

ああ人生男の靴が百並ぶ

新子

という句をあげて、百並ぶ靴をはいた五十人の男のうち、その方法を身につけた人は何人いるか、川柳に於ても男女対等の場ができたことは江戸時代と現在とを区別する。

坂本幸四郎「新興川柳の光芒」を見ると、まさに千万言のとびかう中にまぎれ

た時、川柳はかけがえのない役割を果たした。

満州事変から六年目の昭和十二年十一月の「川柳人」にのつた鶴彬の作、

万歳とあけて行つた手を大陸へおいて来た手と足をもいだ丸太にしてかへし

胎内の動きを知るころ骨がつき

高度成長への動きから二年たった昭和三十三年、「人民川柳」にのつた石原青竜刀の作。

マルクスもハシカも済んださあ銭だ

これらは、当時の新聞紙面をよく集約し批評し得ている、とほめている。

ドイツの週刊誌「ジムブリッツイスムス」に出たH・M・ブロックマン作のマンガだ、千万言の言葉がついやされた時にぬつとモノ自身が顔を出す気合は、漫画だけでなく川柳の出版でもある。要するに千万言の言葉よりも十七字の川柳の方が寸鉄人を刺すと言いたいのである。

然るに最後のくだりに、

川柳は俗事への関心から足を洗えない故に、俳句より一段下のものと見られて

いるらしい、「川柳瓦版」三月号の編集後記によると、「私が川柳を作ることをよく知っている某友、何かの集りで知人に私を紹介するような場合に、「俳句のちよつとつまい男です」という言い方をする。俳句と川柳の違いを知らぬわけではない、いやよく知っているからこそ「友人の名誉のために」そうしている気配がある」（柏原幻四郎「不幸な誤解」で結んでやる。

折角「千万言の言葉より」「男女対等」で川柳が浮上してきたのに、まだまだ俳句の、ちよつとつまい男という言葉で、川柳を作っている名誉をカバーされることは洵に残念であるが、減多に川柳のことなど書かぬ鶴見俊輔氏が、あらゆる川柳雑誌の句を通読し、編集後記まで読んでおられるのには平身低頭である。心してこそ。

徳恩師路郎

清貧をつらぬく師父の詩心

落武者の逃げ水に遭う草いきれ

金メダル家に中風の父が待つ

栗

〃

座右の句

天と地のはざまにふわり生かされて (緑之助)

私の句

守られて心音ひと日恙なく

久谷 まこと

川柳塔 十月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

川柳の出番

西尾 栞 (1)

素晴らしい句会―やれば出来る

西田柳宏子 (2)

川柳塔 (同人吟)

西尾 栞選 (4)

自選集

東野 大八 (34)

■川柳太平記 (125) 川柳の群像 柿沼考人

東野 大八 (34)

■連載 誹風柳多留廿六篇研究 (三十八丁)

阿達 義雄 (38)

江戸川柳富籤志 (5)

阿達 義雄 (38)

63年度路郎賞・川柳塔賞決る

阿達 義雄 (38)

栄ある二賞の足あと

阿達 義雄 (38)

水煙抄

黒川 紫香選 (46)

秀句鑑賞

同人吟

新家 完司 (33)

水煙抄

吐田 公一 (67)

素晴らしい句会…やれば出来る

西田柳宏子

私は今まで各地の大会や他柳社の句会に顔を出し、騒々しい句会、気持のよい句会をいろいろ実見し、体験して来た。

気持のよい句会ではやはり句も佳い句が多く感じられ、騒々しい雑然とした句会では折角の句まで精彩を欠いてしまふ。どちらにも句会を運営する裏方や世話役が居り、司会者がとり仕切っているのは大小差はあるが同じである。大会の場合は参加者も多様であるが大会気分でも多少のざわめきはあっても、会場設備、役員の腕達者揃いもあり、まあまあと言えようが、柳社単位或は小集句会になると稍もすると騒々しい雑然とした句会になることが多い。他社はさておき川柳塔社の句会を省みると、他柳社の方々も増え賑やかな句会になっていることは喜ばしいことであるが句会の雰囲気については近年お世辞にも自慢出来るような褒められる句会ではなかったと思う。勿論、世話方は早くから準備もし、司会も巧みにリードしているが、今一つ盛り上がりがない。熱気が感じられない。私はたま

愛染帖

＜女性コーナー＞ 茴香の花

橘高薫風選

(64)

句評リレー

濱野奇童・江原とみお・高田博泉・高杉鬼遊

八木千代選

(68)

第3回川柳塔勉強会

堀端三男・春城年代

(70)

ふれ合いの記

渥美弧秀

(75)

袈裟と盛遠

布施幸子

(76)

嗚呼！脇田米朝さん

遠山可住

(84)

初歩教室

阿萬萬的

(78)

「計算」

松高秀峰選

(80)

一路集「働く」

井上柳五郎選

(80)

「遠い」

齊藤 荔選

(81)

柳界展望

(82)

本社九月句会

(85)

各地柳壇（佳句地10選／中川滋雀）

(89)

■ 10月各地句会案内 103

■ 編集後記 105

座右の句

雲の峯歩けば歩くほど一人

（不朽）

私の句

一本の草にも宿る露があり

岩本笑子

りかねて九月一日の常任理事会で猛反省を促す発言をした。即ち場内のざわつきは私語、それも後方の我々常任理事がかかっていることが多い、これを絶対に止めよう。

次に「おはなし」或は選句の途中も平然と句会案内や句報を配布しているのは講師或は選者に失礼極まることであり、句会の進行無視だから止めよう。の二つであった。

参加者の大部分は句会を愉しみに来られた方々であり、おはなしを聞こう、披露を楽しもうとしている方々である。一部のついうっかりの心ない私語や、親切(?)からのピラ等の配布が、ともすれば雑然とした雰囲気になり、連鎖反応を越しヒソヒソ話が増え句会が雑然としたものになり、他社からの折角のお客様にも不快な印象を与えることにもなる。

さて九月五日の本社句会、ピラや句報の配布は出句／＼切前までに済まして下さいとお願ひしたことも功を奏して、静かな句会になった。お話もよく聞こえ、披露もよく通る、呼名も元氣よく句会を盛り上げるようだ。入選句に対する感動や、軽い笑いも伝わって本当によい句会になったと思う。

自分一人位、小声で話しても……でなく、自分も句会を盛り上げる一人だ……の心構えて川柳塔本社句会を素晴らしい愉しめる句会に育てようではありませんか。



西尾 葉選

守口市 結城君子

ひまわりの力が欲しい昼下り

鈴蘭にそっと呼ばれてのぞく鉢

新婚へいじ悪したい夏薊

ゼスチャーのそれは上手な驚草よ

蠅取草神もいたずらなさること

浜木綿も機銃掃射の記憶もつ

八尾市 高杉鬼遊

幽霊を狂わす寒い夏だった

涅槃ではないがごろりと夏を寝る

テレホンカード余計なことを喋りすぎ

病人も看護も疲れはてて秋

鴉一羽ここに棲んで愛うとし

恋をするネクタイ欲しい秋となり

羽曳野市 塩満 敏

車間距離あけて熟年の恋探る

迂回する恋もあります工事中

交叉点二人の恋はどちら向く

人妻と一旦停止の愛にする

赤信号出して私は人妻よ

熟女から反則切符渡される

松原市 谷垣史好

母のおなかで聞いた気がする浪花節

ひとことならず眼鏡汚れている男

おんな運ひとつ消えたらみな消えた

ほんの立話で元気出ることも

クラリネットはときどき粋な嘘をつき

秋の暮 森繁久弥昆布を煮る

岡山県 嘉数 兆代賀

握り拳開いて閉じて女とや

もたれる樹が欲しい北風みなみ風

三叉路で思い直しはまだ出来る

雲は流れる人はドラマをくり返す
盆灯籠ほのかな罪を照らし合う

ソロバンが下手でみんなに親しまれ

堺市 高橋 千万子

迎え火に先頭で来た新仏

人生に平等があり齢をとる

採用の言葉を少し急ぎすぎ

無智だった自分再会して悟る

夏休みネジがゆるんだままの日々

短編で終った恋の夏帽子

和歌山市 牛尾 緑 良

白旗の高さを潔しとする

世渡りになれると御辞儀ばかりする

酔うことで今日一日が甘く済む

合鍵が出来てあなたが広くなる

しなやかな指もお金を数えてる

料理番組丹念に見るひとり者

下関市 石川 侃流洞

負けて勝つそんなゆとりは持っていない

敗者復活時期を失したなと思う

左路線歩くに主流反主流

靖国論母は神様疑わぬ

ドライ旋風酒もおこぼれ躊躇せず

中途半端よばれて不覚梯子酒

桜井市 岩本 雀踊子

ふり向いた過去の私にあった虹

まっすぐに生きる真夏の影法師
南窓開けて今日を信じたい

思い出したように亡母がなつかしい

男らしい男でうたった一行詩

洗面器扶養家族が五人いた

大阪市 西出 楓 楽

退屈な漫才続く夫婦です

青春の自画像画布におさまらぬ

よそゆきの顔と声とを持っている

胴長短足きつといい人なのだろう

嘘少し書くと本当らしくなる

ひかえ目はめんどろくさいだけのこと

寝屋川市 稲葉 冬 葉

五木だんごを食べに行く死にみやげ

美味しいと言わせて見せる塩こしょう

ほんとうは巷の声に病んでいる

愛の究極コーヒーの三杯目

やんわりと独立宣言した息子

終点で教えてくれた洗濯ネーム

松原市 玉置 重 人

集印帳いらいら順番待っている

マンションのゴミの日知っている仕事

盛り場の死角に美人占い師

コーヒーの味にうるさい無職なり

アレルギー大事なとこで出たクシャミ

博覧会早く終ってほしい鹿

和歌山市 西山 幸

立秋や喜劇はじまる鏡掛
魂胆のある秋茄子に手は出さぬ
タバコやめました短気になりました
貧相をかくす仮面も貧相で
モチーフはまだ繋がらずちろ聞く
出なおしへ黍団子など作ろうか

和歌山市 福本英子

レールなど敷くから子供外れたがる
一泊を許さぬ菊の成長期
美しい思い出ばかりお迎え火
近道があるよと脳の片隅で
刃こぼれのナイフが私の護身用
石油ショックを知らぬちり紙交換車

弘前市 波多野五楽庵

ドンキホーテやがては妻も許すだら
美しい波が神話を繰り返す
拔擢のライバルに選る男文字
初対面一つの林檎を分かち合う
糸切り歯糸の形に減りはじめ
又飽きてしまったらしい糠スープ

京都市 松川杜的

コーヒ半分残して妻の洗濯機
紙一枚何さ吉も凶もない
恍惚の眼にも五重の塔のシルエット
弟子連れて尼さんデパートをうろちよろし

仏さんごめんネ今日はそうめんよ
木魚一つ母のリズムは真似られぬ

呉市 林野甦光

萬のつく鯉でも彩の好き嫌い
陰口を半眼で聞く不動尊
マス目の中に反抗の文字を溜め
道祖神のおもしろい話村にある
火消壺まだ温もりを溜めている
浜風のハミングわたしは無帽主義

岡山県 土居耕花

信玄のテレビを見たかカブト虫
マイマイ虫オリンピックで滑らそう
曲線がお前も好きかカタツムリ
ナンキンの花にはブスな団子蜂
休耕の田は見ぬように揚雲雀
地藏さん眼を開けなさいもういいよ

大阪市 津守柳伸

花火師の技大空をキャンバスに
空手形となりの花が眼に沁みる
非行癖ポケットベルを持つ少女
哲学の道で修正する軌道
馴れそめは八月だった俄雨
窮鳥を送り届けて仰ぐ空

西宮市 奥田みつ子

風船が割れて結論ひとつ出ず
ポーカーフェイス紅茶静かに飲んでいる

三面鏡素顔を磨くことにする
羽根ペンで脅迫文を書いている

女とは又男とは源氏読む
ハンドバッグ嘘がポロポロこぼれ落ち

平田市 久家 代仕男

蟬螂は虫の仲間の麒麟だよ
糸トンボヘリ操縦の練達者

ＬＳがひとつ残って妻に買う
嗜むにしてはすごした酒の量

夫婦酒爛はぬるめの方がいい
遠雷が響き弾けた鳳仙花

美禰市 安平次 弘 道

砂時計あすを約束してくれぬ
冷房が効きすぎますい冷やつこ

二枚目の舌だけ伸びる進化論
三代目の無能を嘆く鬼瓦

性善説信じて捺した保証印
悪平等がとても悲しいヤジロベ

子離れをやっとしましたイヤリング
松江市 恒松 町 紅

青春を潰した憎いカーキ色
老人会まだ隅っこにいる若さ

姑には出勤します夏期休暇
子宝の筈が窮鼠となる世相

夫婦仲とりもっている一行詩

竹原市 森井 菁 居

旧道の風と語らい孤に慣れる

夏が好きだから夏咲く鹿の子百合
複製画集め愚かな日を重ね

トップ守る厳しき自作自演劇
未来図を描くのが好きな移植ごて

ネジを巻く日をサルビアも燃えていて
和歌山市 堀端 三 男

旅行者が来るまで楽園だった秘湯
手のうちが読めているから口出さぬ

淋しさに負けて口笛強く吹く
振り上げた拳で万歳してしまう

いの豚のレースで過疎の村起こし
自分史に転機を呉れた師の言葉

短距離のタクシーつり銭ひまが要り
枚方市 宮川 珠 笑

逆吊りにされてズボン は明日を待ち
二人で決めといて娘をください

職場で駄弁り通勤車で眠る
散歩リハビリ老人医療の薬づけ

出棺へローン督促電話鳴る
尼崎市 春城 武庫坊

鏡の中で顔を製造しています
受付の顔は人工加工品

素顔になるとブラックコーヒー欲しくなる
顔が無いから今晩はよく眠る

夕焼けを次々運ぶ赤蜻蛉

教会の鐘が素直になつて秋

尼崎市 春城年代

海女老いてひねもす海を見ていたり

剃りあとの青い代理の盆の僧

洗濯機夫が先に使い馴れ

青春に逢いたくてゆくうどんめし

蚊取香漂う亡母の里匂う

かたくなに姑がゆずらぬしまい風呂

弘前市 真喜内 實

ありがたい年金坂はゆるぎない

冬シャツがじやじや馬梅雨に引き出され

顎引けば街の緑の風味方

シャワーにも合掌したくなつた首尾

講演の趣旨と仲良く興奮し

ヨーガ予行ほんに楽しい鶴夫婦

熊本市 永田俊子

蜘蛛の網で蟬がもぐ昼寝の時間

趣味に生きる夫婦に不可侵約がある

ふり返らねば他人だったあなた

ばらの雨に許してやろう待ちぼうけ

息ぎれがしたように鉦が落ちる

御仏の視線の先の蟻地獄

倉敷市 野田素身郎

雑談を中座株価が気にかかり

戻り梅雨喫茶店まで暇にする

ある時はすっかり頭空にする

約束の場所を街宣車に取られ
一周忌あの日と同じ蟬時雨

竹原市 小島蘭幸

白髪の祖父のやさしさしか知らぬ

上にぎりひとりで食べるからうまい

遠い雷推理小説読んでいる

甲子園を見ている岩のごとくいる

妻の水着タイムトンネルから抜ける

兵庫県 遠山可住

ふり向けば他人ばかりの負けいくさ

儲かって来て結束の輪がゆるみ

悲しいことだけ憶えてる城の月

長生きを宣告されるのも困り

白い杖の先に昨日の街がない

富田林市 板尾岳人

にぎり飯ダブルベッドで寝てしまふ

サムライの妻が欲しがるにぎり飯

仲悪いときがありますにぎり飯

アイサツがとても上手なにぎり飯

晩秋を悲しく想うにぎり飯

八尾市 宮西弥生

時代が変つたことにゴキブリも知っている

大切な休日豊かな花の中

秋咲きを好きな男と待っている

冷静な月の出待っているいくさ

気楽でいいなあと思う日のコロッケ

米子市 石垣花子

ロビーまで送られている袋帯
表札に無いけど猫も家族です
竹光は抜かぬ抜いたら笑われる
握り飯握るリズムはまだだし
酒哀し喝采の無い芝居する

米子市 小西雄々

銀行へ目立たぬ鞆提げていく
きれいな事ばかり他人に見せ歩き
刃こぼれの男へなつく猫もいる
折鶴の折り届ける窓をあけ
善人が隣に住んでややこしい

堺市 中川滋雀

壺一つ喋る先祖が置いてある
不協和音なだめすかしてきた夫婦
合槌を打って騙されやすくなる
芯のある男が握る空財布
付合いの長さ水虫には勝てぬ

倉敷市 稲田豊作

内需拡大どうするのやと長屋衆
「頑張る」と二浪らしい紙を貼る
嫁懷妊四人目ちんちん是非欲しい
大言葉わかれは悲しい話かも
香水を嗅ぐと男は弱くなる

島根県 小砂白汀

何とかなるさ何とか成るさで生きてきた

雨しとどお地藏さんのよだれかけ
なぞなぞを捜しにいった流れ星
冷飯を食わされ続けて生き字引
泣くものでないと思えてサキソホン

米子市 林 荒介

落書きがなかなか消えぬたなごころ
裏方に葬儀屋さんが居てくれる
一枚の葉書は海を渡り切る
土くれを焼いて仏にしよう
回帰線ご飯が炊けて来る匂い

米子市 林 瑞枝

墓洗う地下三尺の照り返し
一本杉を何処までのぼる蟬の子よ
辻褄がとてもおかしなとこで合う
均等法おとも化粧し始める
長所だけ見えるハッピーな駅に付つ

伊丹市 檜谷寿馬

今日中に了えねばならぬことはない
物売りの指とは知らずインターホン
診察の帰りの酒を妻に乞う
戦友会の誘い黙って渡される
十年の溝をハガキが埋めて来る

島根県 西村早苗

ムードよし雨が二人をそのかす
内職の返事は聞いてないらしい
お隣はすき焼きうちはサンマ焼く

顔と顔よせて私の事のように
つめえりとおさげの恋がある記憶

東大阪市

森 下 愛 論

プラモデル最後はこっちへ廻つて来
ひとり居の朝は喫茶のモーニング
本心は酒が知つてゐるくだをまき

亡妻の初盆迎えて(二句)

和尚さんの短いお経に物足らず
仏壇へよく来たなあと扇風機

兵庫県

辻 文 平

晩酌の二合で捨ててしまふ自我
淋しくてそれでも三度飯は食う

実年の峠で軋む縄電車

地団駄を踏んで重たい妬心の矢
やんわりと妻が握っている吹き矢

倉吉市

奥 谷 弘 朗

拳骨を知らぬ子供で骨がない
正論を吐いてもあと味引つかり

どっちにもつかぬ男で嫌になり

民衆の中で生れた手工芸

資本家に雑草の意地見せてやる

富田林市

藤 田 泰 子

せめて髪切ったきのうを忘れよう

足元に秋が来ている盆踊り

一周忌実家は近くて遠い処

銭の音平常心を乱れさす

口止めをされた話が胃にたまる

奈良市

宮 口 笛 生

損な役ばかりかかえ込んでいる

カラオケが上手で得な男です

煙草を止めた偉いなと言われ

くわがたもかぶとも取れる故郷がある

騒音のもやもやに在る潮戸の海

高槻市

辻 白 溪 子

ストレスを溜めてるらしい電話口

崖の上自殺のポーズで佇つて見る

職安へ行けと教えている無職

善人は騙しにくいと言っておんな

友達をととても大事にした弔詞

島根県

堀 江 正 朗

どんな日も笑顔捨てまい白杖よ

顔洗うたびにのひら皺を読む

こんなとき噴き出しそうな総入れ歯

盲人を迷わす風も雨も友

僕という話相手の床柱

島根県

堀 江 芳 子

移りゆく庭に灯籠妥協する

転がったみかん話の輪に入り

夫の掌にへのへのもへじ涙拭く

白杖もはずむ音して祭り笛

乾しあげて畳むしあわせ妻のもの

京都市

都 倉 求 芽

段違い平行棒の夫婦愛

巻貝の愚鈍を嗤う二枚貝

ドレスアップてのひらのマメ如何せん

とらばーゆ履歴書手輕に持ち歩き

神様の能力宮司が決めている

笠岡市 松本忠三

言いまわしがどうであろうと駄目でした

感覚のずれと息子が取り合わぬ

女房が待ってると人様には言えぬ

踏台にされても友は憎めない

聞き捨てにならん人事でもね

倉吉市 渡辺独歩

天皇の帽子に那須の蟬が降る

父の帽子にいつも凹み癖がある

ラジウムの三朝でキューリー夫人に逢う

始球式五万を唸らすワンバウンド

大臣の失言アツケラカンのカー

柳井市 弘津柳慶

おおそうだ今日は家内の命日だ

お父ちゃんお酒はいいがタバコやめなはれ

無愛想な娘が意外席ゆずり

親はもういないので夜爪を切る

虫籠の虫はデパートの育ちです

岡山市 時末一灯

バンザイも二回目からはやらせだな

光らせた靴先にある週末よ

難破船抱かれる入江あつてねる

ホテルから見る街の灯の物語

途中下車地下街の流れを泳ぐ

今治市 越智一水

休むとき休みなさいと虹が立ち

半歩さがって歩く女の美しさ

下駄履いてマメが出来たと夏の恋

大胆に髪型変えて恋も変え

花の裏眺めて仏さん微笑

大阪市 黒田真砂

もう後がないと解って居た油断

口達者になつて娘の均等法

まだまだと縦には振らぬ老いの首

風の果迄追いかけて秋やんま

嫁ぐ日にきびしい母の一しずく

和歌山市 松原寿子

逢えるのねわたしは毯で跳ねてゆく

不意に秋いちまいずつの夢たたむ

愛は憂し紅溶く指も哭いている

電話口あなたへ贈るひとりごと

むらさきを探ねいとしき人想う

大阪市 西森花村

政治屋にすれば僅かな千の嘘

ありがとうとなむあみだぶの言える舌

給料日境に嘘もはずんでる

給料日頭も使い胃も使い

残業をさされる胃の腑給料日

松江市 柳 楽 鶴 丸

怒っても笑っても地球回っている

貧乏県にも素晴らしい大夕映

骨壺と箸は自分でつくっておく

半開きの女の口にある魅力

朝三暮四所得税減税消費税

松江市 舟 木 与根一

B面との差をなくしている落ち目

棒読みの一人芝居は妻の作

不意打ちの爪跡深い戻り梅雨

真相は閻魔の前でと決めている

竹光を研ぐ裏方も手は抜かぬ

藤井寺市 吉 岡 美 房

戦争にこだわりつづけ夏の天

忘れない忘れられない戦中派

負けてからしみじみ聞いた虫の声

夏負けはしないゴッホの絵が好きで

彼岸花亡妻に聞きたいことばかり

鳥取県 川 崎 秋 女

亡父の声亡母の声きく墓掃除

八月の雲が動く怖くなる

船からの無線に覚める午前二時

痒いとこ搔ける幸せだつてある

合歓の木の微動だにせぬ昼下り

京都市 山 本 規不風

若嫁が香る隣の金木屋

ヤジロペーお前は思想など論ずるな

信心をしてるのに灯明の火で火事になる

塩撒いた効果は見ない事にする

五分五分で勝負は風の運まかせ

大阪市 江 城 修 史

訣れきて語尾のない私語り返す

無為無策妻へ気がねの靴を履く

離れ住む子は子の暮し日銭追う

視野乏し苦吟の父の詩貧し

生きすぎた気もする古希の坂を行く

奈良市 天 正 千 梢

無人島夫と二人の暮らしなら

南十字星ロマンをくれてありがとう

南半球空のおおさはきわまれり

西部劇の中の一人になりすまし

目かくしをされた羊のあわれさよ

守口市 羽 原 静 歩

幼稚園(二句)

運動会ビデオの腰がおちつかず

スカタンの来賓さんに笑いこけ

蒸発もスリも集うてロビーの灯

別れない別れたくない有夫恋

松山紀行(一句)

坊っちゃんも風来坊も湯気の中

松原市 小 池 しげお

入道雲親父の癖を想い出し

改心の手紙記念切手が貼ってある

雨宿りこっそり覗く門構え

神主に子供がいけない宮詣り

こだわりをきっぱり捨て捨てる夏帽子

大阪市 古川 美津枝

敗戦の日にも朝顔さいていた

水音を小さくちいさく夜濯ぐ

お土産のアワビ隣でよく喋り

一人居に並ぶふみ台大中小

人妻の名残りをとどむ好きな指

寝屋川市 平松 かすみ

こちよい槌音やんで棟上る

なるようになるさローンのきく若さ

ひまわりが流行るゴッホのその後から

B面でいつも満足してる妻

親か子か私と歩く影法師

広島県 田村 新造

草いきれ戦の終り北で聞き

草枕北斗仰いだ逃亡記

ゴミ捨てに出たお隣も定年者

父の墓建てよう海の見える丘

リリーフカーで颯爽と出て叩かれる

大阪市 中西 兼治郎

靴音が男かと思えば女

腰痛がないのか蟻の細い腰

ボーフラの時から嫌われている蚊

神様を父と呼んでるクリスチャン

うずを巻き鳴戸の波はよく稼ぎ

西宮市 西口 いわゑ

頑固とは無縁のようなデスマスク

叱られていながらホツとする笑くば

もう一つの顔と対面夜の底

野の花を活けて仏間を和らげる

白旗を振りつ振られつ夫婦なり

鳥取県 松下 たつみ

疑えばきりなし夜が長すぎる

世渡りの下手な男の羽音きく

完璧に生きて温みは捨てている

人の血がにぎり道しるべが消える

半分は私も悪い自己批判

鳥取県 土橋 螢

落日に合掌一寸先は闇

父よりも上手に酒を呑んでいる

父と子の死角に母の愛がある

月が出て迎えるの女現われる

天知る地知るわたしは嘘をいう

高知県 赤川 菊野

輪の中に居ても何かに飢えている

流灯が寄り添うように後や先

産声のこぶしが握る二十一世紀

はちばちと歩こうゴールが見えたから

究極のグルメは老母の煮ころがし

出雲市

園山多賀子

多宝塔真夏の雲の去来かな（根来寺）

月末に小銭が残る冷や奴

真相は三面鏡に折り畳む

一言居士よもや踵は返すまい

濡れ衣が乾かぬままに秋が来る

鳥取県

新家完司

抱きしめる女だんだん肥えてゆく

焼け死ぬも溺れ死ぬのもごめんです

手の傷に気付いてくれぬおともだち

客筋が悪いわたしの好きな店

値段表ぶら下げているかぶとむし

静岡市

渥美弧秀

程の妙忘れ暮らしにある悩み

一步引くゆとりに神のみ声聴く

晩年は詩と音楽に老いの照り

詩に楽にひたむきとなる今日の顔

アポロ以後兎は月に見離され

箕面市

坪田紅葉

思っただけ言えぬいらだち四畳半

かくされずつい口になしおごるはめ

気位が高いばかりで淋しがり

通り過ぎ又後もどりする焼芋屋

病院の窓から見てる山の月

八尾市

宮崎シマ子

美しい恋は平行線のまま

赤とんぼ恋の相手はいるのかな

これ以上もやせば火傷する想い

くすぶりをいくらか残し夏終る

一匹の蠅エンジンよりも音高し

今治市

矢野佳雲

立ち話だけでは済まぬ人に会い

色っぽい挿絵のとこを先に読み

化けるまで粘る狸の檻の前

雑兵の席は逃げよいとこへ取り

怖いもの見たさのように見る裸

大阪市

北勝美

潔く今日一日を沙羅の花

真下では高さが見えぬツインベル

総務課長杓子定規へ輪をかける

背伸びしてもやっぱりひばはひば

明け渡す書齋へ喜びと淋しさと

島根県

榊原秀子

誤解まだとけないままに戻り梅雨

境遇が同じ結び目とかぬ距離

予定表持たぬ夫婦に夏休み

物持ちのいいのをいつも娘が笑う

よしとすることの一つも見付けよう

唐津市

浜本義美

新しい夢がみたくて髪染める

臥ていてもくらしの笛は妻が吹く

秋立てり梅雨はいつまで居据る氣
浮岳の雲從えてしかと夏
年金の夫婦で通院が日課

西条市 片上明水

玄人の帯は夏でも涼しそう
過ちを犯した服も土用干し
入道雲どれも意地悪そうに見え
ビール一杯八階までも上りきる
その訳は知らぬが地藏多いまち

鳥取県 江原とみお

浮力溜め好みの風を待っている
母の業そっくり継いで花遍路
親の光私の影をうすくする
臍繰りをびっくり箱にいれておく
一つ離れた漁火は父だろう

岸和田市 古野ひで

母が娘を娘が母憶う日本晴れ
闘病に約束事が多過ぎる
美しい顔ですらすら嘘を言い
弟の嫁が優しい事を言う
ふるさとの山河恋しい夏休み

和歌山市 福井桂香

折々の心を繋ぐ花の苗
朝顔の咲き終える頃恋おわる
洗濯機不信の渦がひろがって
妥協してると無理心中をしてしまふ

祈らねばサタンの爪が長くなる

和歌山市 木本朱夏

太陽に恋したトマト赤く熟れ
デイオールステテコはいているゆとり
もうかってますなと名刺見直され
ロマンスカー隣が夫でなかったら
ひきだしに秘密が溜る会者定離

吹田市 園田文子

今来たのにもう帰り仕度の母でした
キャリアウーマンいらちにさせるひとりもの
やせる本百冊よんでる夢の中
それなりにトンボ眼鏡が味方する
仲間たちロバは売られて日は暮れる

寝屋川市 岸野あやめ

缶ジュース天下国家は論じない
盃の底に沈めた謀

我儘な乳母日傘のなれの果て

菜種梅雨入院長き練香水

運鈍根鈍はたつぷり持ってます

男波女波テトラポットは恋の邪魔
寝屋川市 宮尾あいき

佐渡の旅(四句)

観光へ日本海もないで見せ

佐渡おけさい笠脱がせて顔みたや

金山の人形演じる佐渡地獄

逢いにゆく人もないのにたらい舟

祇園祭娘にゆずる博多帯

松原市 佐藤 藤子

威勢よく飛び込んでくる夏祭

夏菊の思わぬひとの計のしらせ

帰省の子湘南焼にプール焼

徴兵が無くてよかったねお父さん

米子市 政岡 日枝子

晩年の小野小町を知っている

ラストストーリーそれは猫でもしゃべらない

うろ覚えだから矢印信じきる

父を囲んで逃げ出すことは考えぬ

捨て石で肝はとくに座ってる

唐津市 田口 虹汀

抜け道があるから息が詰らない

抜け道を六法全書も知っていた

鉢に住む金魚にまでもボスがいる

軒毎に提灯が出る盆の月

中年に付いて行くのは気分だけ

唐津市 久保 正敏

手毬唄流人の島に古りし恋

銃眼を潰した城に鳩と住む

割烹着翔びそこなった皺の数

肩書を無事に帰して女将酔い

古きよき昔むかしと老いて行く

唐津市 仁部 四郎

御主人に似たか律儀な扇風機

学歴のヒレは持たぬが長水路
オモチャ屋の社長不倫にあこがれず
満月の浜辺に埋めた合わせ貝
撮りたてを出す栄転の顔写真

唐津市 山口 高明

目ん玉を真先食べて魚好き

痛風という退職金もありました

門番の髭面怖い菓子会社

粕漬で酔いますあなたを口説きます

メニユー見て揉めぬふたりはまだ他人

富田林市 田形 美緒

病葉切る起死回生の裁鋏

記憶喪失嫌な絆を切りました

盆栽に人間臭い生い立ちも

盆踊り果てて私に戻る刻

初盆の母に詫びたいあれやこれ

米子市 菅井 とも子

カタログの通りの家で息づまる

踊り場で次のドラマを待っている

合鍵を持つと時間が気にならぬ

壺割れて父の容態気にかかり

CTの結果見たから酒にする

羽曳野市 榎本 吐来

結論を明日へ流す酒を汲む

私憤公憤日ごとに募る年重ね

じゃじゃ降りの雨で固まる折もなし

一徹にされ真中で飲んでゐる
誘われた心が読めぬ宵の月

神戸市 山口 美穂

ことわりの電話の嘘を知っている
ユーモアが通じぬ母の老いとし
アメリカへちよつと行きます受話機から
間違ひ電話のむこうの人柄よくわかり
明日の朝目が覚めるとはかぎらない

豊中市 田中正坊

ピンとキリ イブモンタンと同年
スランプを天候不順のせいにする
かたつむり一筋の道遠くとも
寂しくて一〇番をかけてみる
幽霊が五万人いた京の町

大阪市 藤田 頂留子

なじまない店にも入る盆やすみ
着て入り抜いで出て行くビルは夏
八月のさんげに和したせみ時雨
切り替えの早さを誇る波がしら
何もかも飲みこみ顔でしゃべる菊

宝塚市 丸山 よし津

三面鏡ドレッサーに替え祖母達者
横泳ぎ習った海も消えている
人のエゴ渦巻いている瀬戸の海
脱ぎ捨てた過去は悔いずに三十路行く
さよならは駅のポストへ入れて発つ

和歌山市 神平 狂虎

走り続けていた頃の事雨の事
陽が落ちる前に絵の具を買い足そう
独り発つ夏の匂いの遺る駅
自分の影を確かめたくて海に出る
波の彩はもう秋だったほつれ髪

寝屋川市 江口 度

胸張って歩こう朝の空財布
お手盛りの予算で専務アメリカへ
しぶちんの庭にたわわに実る柿
一周忌軒のすだれは朽ちたまま
外べりの娘の靴が気にかかり

大阪市 神夏磯 典子

都市砂漠身の置所など思う
即答のなかったことに望みもち
かたばみの可憐さ都会の隅で咲く
少々のもつれはほぐす祖母の知恵
あいの手のうまい夫へのせられる

大阪市 本間 満津子

遠泳の目標大きく見えてきた
ラストへビーにかける力を整える
仕合せな人のたよりが遠くなり
熱帯夜昼寝時差呆けしてしまい
おもちゃ屋へ軽い財布で来てしまい

和泉市 西岡 洛醉
お茶漬さらさら日本人という夜明け

うそ・ほんま引いて足りてる流行語

木偶で良し還暦といういい軒

通院と職場我が家とマイベース

壮行会悪魔一匹酔うている

和歌山市

若宮武雄

邪馬台国論争ならば決裂祈ります

大袈裟な怪我はさっさと癒えちゃった

夏ばてに終止符うつたいい報せ

出血サービス又また又は腑に落ちぬ

やめ暮らしに馴れないまんま三回忌

寝屋川市

堀江光子

過疎で逢う改札口の人情味

山登るうちに無心にひびく水

わが身より抜け出た影が逢いにゆく

直接にお話しするという覚悟

今の世を西鶴ならば何と書く

(前月分)

大阪市

大塚節子

死ぬ覚悟あれは戦争中のこと

じゅんさいな梅雨もどりと等と気象庁

検診の異常なし梅雨明ける

かりそめの言葉がだんだん重くなり

人嫌いになれず人好きになれず

大田市

藤田軒太楼

今日も無事人形ハンドルへ揺れる

漂白のいささか過ぎて価値が失せ

人情にふれて涙もろくなり

鼻あかすどころか逆に掏われる

岸和田市

福浦勝晴

約束をすっぱかされて吸うタバコ

同僚の栄転横眼で意識する

夏祭りパンチパーマのサングラス

キューツと一パイ税金をひっかける

浜田市

中川幸一

歳時記に逆う癖のある気象

玉手箱開けた覚えもなくて喜寿

アメリカの豆が化けてる冷ややつこ

枕頭の遺言無駄にした快気

出雲市

板垣夢酔

モズの声義理を果せず身を責める

流れゆく蟻を助ける阿弥陀の手

太陽はどこの国にも所属せぬ

喧嘩でもせねば夫婦にカビが生え

茨木市

井上森生

喧噪の世に汝らの蟬時雨

嘴で殻を破った初仕事

切磋琢磨ドライビールがうまくなる

己が身の力の限り滝の音

西宮市

瀬尾六郎太

是が非でも德育科目必修に

善意とて迷惑千万なこともあり

コンチキチン近くに居ながら観に行けず

ひとりでに大きくなったと錯覚し

岡山県 岩道 博友

手伝えば女は途中でさか恨み
遠慮する話へまだまだ波を立て
口惜しさの牙は黙って磨いでおく
退屈な一日株価も下げ続け

高槻市 河瀬 芳子

余生です遊びどころも許されん
奇蹟ばかり願ってカード切っている
一枚の紙の重さよ嗚呼夫婦
こんなにも冷たきものと知る涙

姫路市 丁坪 サワ子

玉音に泣いた少女も鬢に霜
真黒になつて遊べぬ塾の壁
欲あればこそ生きられる此の浮世
玉碎の地を観光にする神経

姫路市 大原 葉香

古稀迎え思慕は過去形許り追う
露天風呂女同士にあるいくさ
苦髪樂爪なる程爪がよくのびる
夏の陽も海の広さをもてあまし

和歌山市 桜井 千秀

ときめきを忘れた頃から立ちくらみ
居所が悪いか虫がおさまらず
どっちへもええ顔どっちも軽くみる
喜んで済ます嘘から出た誠

弘前市 斉藤 島

ねぶたねぶた笛ふえ笛ばくの津軽

花束が今朝も置かれてカーブ道

青田売の話雀の寝る刻に

金賞の薔薇も散る日は皆同じ

弘前市 田中 叶

空ビンに空缶夫婦かくもあり
ガマガエル俺はガンだと決めている
ゴミ箱の上で我輩は猫である
知る人ぞ知る店がある裏通り

岸和田市 芳地 狸村

ひと言が足りず隣と雨模様
目玉焼ぐらい焼きたい妻の留守
仏壇へ帰りましたと妻退院
特訓の子供へ渡すにぎりめし

加賀市 細呂木 魯木

父の座は正面と限らぬ家もあり
予期もせぬ反対一人目星つけ
独り児をベットにしている門構え
お隣とイランイラクに見られてる

羽曳野市 田中 隆二

ヒロシマの夏へ夾竹桃が炎え
父の忌を忘れていない赤トンボ
禅寺の無念無想へ蟬しぐれ
逢うて来た余韻へ部屋灯はつけず

遠廻りしても雲の峰を見つめて
弘前市 人見 翠記

善人の老後の不幸腑に落ちぬ

番組はひねもす野球に占領され
生き仏お下がりで大る孟蘭盆会

河内長野市

井上喜醉

避暑へ行く友と喪服で巡り逢い

洪滞にはまり動けぬ靈柩車

腹巻が無いとへそくり落ち着かず

暗闇で手足が動く油虫

米子市

青戸田鶴

いさぎよい話が好きな夏椿

見たいとこ聞きたい事も食欲に

岬廻ると波のうねりは日本海

旧師の前では昔も今も変わらない

堺市

柿花紀美女

路地裏の人寄せ付けぬ夏鮎

孫連れて来た娘も一緒に昼寝する

年寄りのくらしに朝顔朝の彩

娘の嫁荷へ入れた喪服にある別離

羽曳野市

佐野白水

梅雨と潜艦間違ったとは言わず

老農のせめて案山子は若作り

息すれば酸素消費税取られそう

森林浴すればオゾン消費税

名古屋市

越村枯梢

また外れ美人売場の宝くじ

兄死んで上等兵になったとさ

ブルマンを奢るデートのコーヒ館

お堀端アヒルの妬心水しぶき

松山市

谷信夫

喋ってるのは週刊誌愛読者

白旗じゃないよ越中よく乾き

花いっぱい嘘いっぱいこの世かな

八十歳かなわぬ事は思うまい

岡山市

荻野鯨虎狼

無位無冠やつと家庭に迎えられ

健康が取り得と隣の子をほめる

税金の中で揺れてる鬼瓦

冷酒が女房の留守にはよく似合い

有田市

松井かなめ

いざ喧嘩置いていた台詞出て来ない

戦争の勲章なくて罪軽い

日帰りも一里離れりや旅の空

守銭奴と言われた老後趣味に生き

和歌山市

山川克子

大ジョッキ乗りに乗ったね久し振り

生きている限り男とや女とや

コップ酒いつも単刀直入で

昼と夜私も顔は二つある

岡山市

小林妻子

メイクの影で息づいている若さ

目出度い日降り込みという痩せ我慢

やけくそで唄ってみた日のある

合掌へ背中汗が引いていく

高槻市

川島 諷云児

檜山へ行く覚悟なら出来ている

人生も半ば車線を変えてみる

飽食のツケをカメラに覗かれる

栄転が噂の風に乗ってくる

神戸市

仲 どんたく

大部屋の砂金を拾う箆に漏れ

御老体多忙 両国 甲子園

ビードロが軒先で呼ぶ夏の陣

踊りの輪先祖のロマンは知らぬまま

倉吉市

野 中 御 前

お喋りの雀に今朝もおこされる

逢うことにきめてアクセル強くふむ

メロドラマに夢中不倫適齢期

泣き叫ぶ海をみている喉仏

米子市

田 中 亜 弥

保育器の中で小町の候補生

瓜二つの声と言われて亡母想う

極楽でまたも三三九度かわす

凡人だからうしろ指には悩みます

富田林市

松 本 今日子

尻押しをされて切られているメロン

さとられてならぬ事あり爪を切る

肝心な所で切れているテープ

おしょうゆもソースものせるお盆です

出雲市

吉岡 きみえ

茶吞みばなしうちわ片手に星の下

ミイラとりミイラになって久しけり

純潔なおんなが宝物を抱く

傷心に一枚の絵も未だ書けぬ

大阪市

寺井 東 雲

天命を自分にかけて大きく眠る

旦那さん笑顔数だけ幸せよ

泣き笑い女の遺産重くなる

縦縞も魚が着ると横縞に

岸和田市

清野 こう

雨男法要雨のあじさい忌(石原裕次郎一周忌)

一人住む友へ折りおり運ぶ食

待ち合せ友を待つ間のかき氷

夫から笑顔が消えて幾久し

大阪市

河井 庸 佑

親であるそのむずかしさしかと知る

正論を寄ってたかつてまるめる気

過疎の町学校ひとつまた消える

子は親を選べぬことを胸にとめ

諫早市

原田メイ シュン

久し振り逢えば娘のこと孫のこと

わが家の匂いになって来た畳

居留守いの技も覚えて世帯じみ

思給の暮しになれて上を見ず

唐津市

浜本 ちよ

減反も値下げも知らぬ青田風

看護婦の名残り深爪ばかりする

憧れた椅子の居心地良くはなし

川柳のあい間にちよつと家事をする

和歌山市

垂井 千寿子

日のあたるとこしか知らぬ不幸せ

一枚の絵から噴水ほとばしる

自由化の波を乗り切るみかん船

飽食の世も立志伝の好きな孫

寝屋川市

柴田 英壬子

夏休み気分を抜いて原稿紙

パンプスの差す手が見せた盆踊り

花芙蓉気配しずかな塀の家

花びらを食べるムササビ目が可愛い

高知県

中内 朱坊

捨てられた男の愚痴を聞くノレン

勇壮な絵巻も消えた鯨船

ぼつぼつと伴侶が欲しい脛かじり

政局が大きく揺れる秘書のメモ

七尾市

松高 秀峰

意気投合話が弾む嫁姑

さじで食うメロンに姑のもの足りず

今朝からは秋風となり能登の旅

責任の無さが優しい言葉吐く

和歌山市

後藤 正子

ひまわりも好きコスモスも好きおんな

フルートもチェロも一人を離さない

心捉われて流れて行こう溺れよう

眉太くして九月を覗くひとりごと

高槻市

竹内 花代子

体重が又太った戻り梅雨

盆電話何処もかしこも留守にする

口開けた財布があきれた盆の花

夏の首嫌われているネックレス

大和高田市

岸本 豊平次

孝行を義務教育では教えない

もどり梅雨電車の冷房ききすぎる

雨の日は雨に仕事の貧乏性

レジャーランドの故障がトッパに載る平和

大阪府

坂口 公子

いけにえに舌なめずりなどきのこ雲

愚図る子のように胃の辺無理を言う

鰻井ねている虫を起すでない

切羽詰って無神論者が掌を合わす

岸和田市

原 さよ子

星の降るネオンがさらうビルの空

ひとときの幸せ書道展示場

財テクのこつを息子と対座する

簡単にした約束へ残る悔い

藤井寺市

福元 みのる

畳一帖廻りは本と紙の城

窓明けてあるな冷房車でないな

窓口が明るくなつてから黒字
霊柩車だけは衝突事故がない

大阪市

大塚節子

女です見栄も奢りも捨てられず

倒錯の世界へ引込む玉三郎

人生の方角違いは戻られぬ

儲からぬ商売ベンツで三代目

米子市

沢田千春

せせらぎの音が私を強くする

杉林に囲まれ天がなお高い

ときめきの印象そつと箱に入れ

始発駅にコスモスの花咲き乱れ

東大阪市

崎山美子

待ちぼうけの娘が気にかかる花時計

定年の父の時計がおくれだす

禁酒する誓いを破るのも自分

影のある女の青いアイシャドウ

静岡市

永倉僕川

合格の通知に咽ぶ車椅子

灰皿の汚れやっぱりいるらしい

寝心地はやはり婆やといえる安堵

似た顔が思い出せないまま二人

大阪市

吐田公一

いのち待つ日々へ怖さと嬉しさと

聖域の深いみどりに導かれ

左遷させたい奴へ支店のない会社

定退の辞令左遷地まで届き

大阪市

塩田新一郎

考えてみると象のしっぽに似た私

梅雨明け宣言当らなければ戻り梅雨

日照権臍も主張を試みてみた

秘境にも自販機デンと坐つてゐる

島根県

藤原鈴江

濁流の一本橋を渡りきる

海に浮く灯り孤島も楽しから

有終をかざる挽歌が女郎花

萩の露あれば歓喜の滴りか

島根県

石田清泉

宥すことやつと七十にして摺み

消しゴムで拭いきれないきのこ雲

生涯の挑戦ならむ書に向う

十五センチ下つて師の影を踏み

島根県

北川民子

原爆忌夾竹桃の火の泪

浜木綿も宿も波音聞いている

一期一会合わせ鏡は伏せておく

空けられた一升壺がじやまになり

島根県

松本はるみ

あの人の誘いが来ないままに秋

言い訳を聞いたばかりに共犯者

抜け道がわかり空しさも残り

旅に出る一期一会の散文詩

町田市 竹内紫鏑

軟式野球の唸り忘れず
電話の脇で感嘆の語彙
美しく古いサンブラの功
筆跡見せぬ上司と幾年

仙台市 川村映輝

李下に冠直さず袖の下
八十で天寿私は八十四
楢山を老人ホームと名を変える
いい話だった中味は忘れてる

竹原市 信本博子

友達が欲しい狸が里に出る
どんぐりの一つに秘めてある命
人里を離れて出会う赤とんぼ
ウイスキーボンボン夢よも一度椿姫

松原市 北野久子

酒好きの兄弟揃う盆が来る
喪服吊るしたら病人持ち直す
重い日も軽い日もあり子守唄
怖いこと母のふところ当てにする

八尾市 鷺見章

降雨率五〇へ持たす折り畳み
漢方を内緒で飲んで医に通い
皿砕く試行錯誤の登り窯
葬いの路地に迂闊な焼芋屋

広島県 藤解静風

究極のグルメに夏の冷奴
人さまの不幸へなんと和むもの
燃えやすい血は父からも母からも
螢火が燃える人妻との距離へ

鳥取県 林露杖

朝顔の白紺色が引き立たせ
すり大根からさも辛し夏の膳
老残に挑む体操呼吸法
古傷を独りでそつと舐めて臥る

鳥取県 金川満春

距離置いて見詰めて居ます老いの恋
コンテスト娘に少し箔が付き
プロポジション是は名器だなと想う
喜寿過ぎて余白は丸く渡り度し

米子市 寺沢みど里

ぶらんこに乗る心得を風に聞く
低温の夏へ弾まぬ蟬しぐれ
湯の華をすこし多目に旅気取り
この町の城を自慢に生きている

和歌山県 寺田裕美

当然を偶然らしい顔で逢い
つけ届け効かないうちにくちやられ
最下位の居心地返すホームラン
孫抱きに行く助手席の風涼し

和歌山県 細川稚代

初盆へ亡夫還る日の薄化粧

子離れが出来ず神経失調症
完璧の母で過保護と気がつかず
腹芸が出来ず損な星廻り

鳥取県 中原 汲 香

われいとし君いとし花みたいとし
精霊を迎える家の裏おもて
傘さして絵になる影を考える
かなぐり捨てて無になることの幸福よ

福岡県 横 地 雅 風

帰省子にタイム合わせた電気餅
俄雨見上げる妻の市場籠
小花火に養老院の顔が生き
借りる金銀行であぐらかいて居る

倉吉市 田 辺 灸 六

泣き顔は見せぬと潜るカイツムリ
顔見れば言葉は要らぬ親子駒
血の絆母からもう酸素源
透きとおる指から手話が転び出る

宇部市 平 田 実 男

不眠症時計と起きてる午前二時
賞められた手相と苦勞してみよう
老い先を考えている喉仏

貝塚市 行 天 千 代

戻り梅雨などと天気のままもの
もう八十私は死ぬの忘れてた

薄ものを着こなし素足美しい

岡山県 直 原 七 面 山

先ず長女から背き

皺の数ほど祖父は頑固で

叩かれる宿命ですと木魚鳴る

岡山県 井 上 柳 五 郎

悠々自適とんでもないよ酷使され
肩書にしてみた誇りもつけて辞め

徒長枝の主張剪られるさだめかも

大阪府 渡 部 さ と 美

すれ違う匂い酒よりたばこ好き

一病を知って鎧をぬいだ父

言いに来て笑うて帰る負け惜しみ

吹田市 茂 見 よ 志 子

ファイバースコープ古墳にあらす夫の腸

愚痴吐いて他愛無くなる妻と知り

澄んだ瞳へ童話が佳境に入ってくる

和歌山市 青 枝 鉄 治

釣り人の命救えぬ自衛隊

ブランドのバッグの中で病む財布

芸ごとを積んだ女の遠い縁

吹田市 栗 谷 春 子

麦茶さえ能書きのある肩のこり

束の間のうたたねなどに惜しい夢

厄介な客で一番うれしい客

大阪市 町田 達子

孟蘭盆会心供える過去の疵
天上も地上も五山の灯に揺れる
年なりの自信も少し浴衣着る

豊中市 一瀬 福一

農魂と言った言葉が消えかかる
カルメンは笑いも見せず春シヨール
新しい事をいやがる母明治

姫路市 中塚 遊峰

頂点の椅子は孤独な社長室
篆刻の道具揃えて彫りきれず
せめてバラ多目に活けて親友を待つ

東京都 吉川 一郎

終ったぞ住宅ローン終ったぞ
喧噪の街恋も情けも軽くなる
地下街の花屋の花の息使い

鳥取県 羽津川 公乃

雑菌の免疫うけて自立する
絵日記の蟬取り今日はエキストラ
丈夫な歯母の確かな贈りもの

海南省 三宅 保

覆水を盆に戻して酔えますか
やめたいと思う煙草がうますぎる
引火点持って女は自重する

米子市 金山 夕子

なまぬるい氷が欲しい金魚鉢
怪しげな小町が二人いるわが家
さよならはどこで言っても同じです

高知県 曾我部 裕

苦でない処で人に逢う恐さ
軍隊があつたらなあと思う群れ
土地売って買ったベンツを見せにくる

箕面市 椎江 清芳

夏祭り夫婦にすしが食べ残る
叱るのに立てば子供と同じ丈
北浜は身振り手振りの泣き笑い

岡山県 矢内 寿恵子

星流れ何時まで続く想夫恋
帰らない筈がたまる雲の峰
ペンペン草は旧い話をためて伸び

出雲市 石倉 芙佐子

身を護る笛一管を秘めている
あや取りの橋なら私も渡れそう
勝戦ばかり聞かせる秋の月

黒石市 相馬 一花

定年を過ぎてなお咲くシクラメン
ニワトリに嬬あり俺は独り者
無人駅駅長みたいな花が咲く

大阪市 板東 倫子

贅沢へ昔話がしたくなる

邪心妬心野仏さまは聞いてくれ
盗びとの猛々しさよ自衛艦

豊中市 上田 登志実

夏休み会社つとめがよいと愚痴
盆踊りここでも女性上位たり
瞑想の老婆は語る原爆忌

姫路市 都里 遊光

茄子の花絆かなしく偶ぶ盆
計算高い女が乗った泥の舟
泣きに帰れぬ嫁の実家は北の果て

岡山県 二宗 吟平

とつくりを寝かせてからが生きてくる
合槌に淋しくなった喋り過ぎ
にこやかな顔をするから切り出せぬ

守口市 森 まさお

お見舞いに名前を知らぬ花を呉れ
病院に来て鰻の値段をこぼすなり
やっと梅雨明けたが水月の多い海

川西市 松本 ただし

平凡の見本のような朝のパン
性善説財布は軽い方がよい
下積の庶民が掴む貧乏くじ

高知県 北川 竹萌

年金が足らぬと騙され易くなる
培うて庭に書かせる花日記

万歩計早栗の実が落ちていた

大阪市 松尾 柳右子

予定表狂わす雨とじんましん
波風は立てぬ女将の二重顎
カモ鍋を囲みカルガモ話題にし

羽咋市 三宅 ろ亭

文化都市が泣くぞ再開発という破壊
旧盆の対局末っ子が腕をあげ
炎天の注水トマト胡瓜茄子

河内長野市 植村 喜代

手術の日父がオモチャを買って来る
一人住む老女退院考えず
土用丑鰻も出ます病院食

出雲市 小玉 満江

来る人も待つ人もなく日曜日
JRあの手この手で旅急かす
鐘の音に菩薩はうすく目を開く

米子市 光井 玲子

一本だけ真つ赤な傘を持っている
大正のロマンあつさり引込めぬ
釣りあげて魚の涙みてしまう

岡山市 花田 たけ志

恥を捨て切った啖呵に救われる
ご自慢のサラダでケチがつけられず
ボロボロを纏えば似合う所作がある

和歌山市

山田 高夫

稚氣抜けずまだ人見知りする六十路

砂風呂で生首晒すフルムーン

本尊に尻向けていてハイチーズ

鳥取県

田村 きみ子

コスモス街道花の匂いに酔うすずめ

赤トンボもう生まれたの秋なのネ

愛一つ抱いてブランコ強く漕ぐ

高知県

小澤 幸 泉

終戦の家そのままに父母達者

一枚のハガキが母の形見とは

キャッチボールやつと少年の顔を見せ

竹原市

岩 本 笑 子

湯の町でとつても静かな朝である

母の字を忘れて今日の湯にひたる

旧友もうれし大きな目もうれし

富田林市

片岡 智恵子

大輪の花の揺れてるような女

村中が静かになつて盆あける

長つゆへ迷うた蟬の悔し鳴き

米子市

白 根 ふ み

ふうせんはおとぎの国を知っている

噴水の鯉に慈雨などわかるまい

里帰りまごの背丈をみやげにす

茨木市

堀 良 江

あれもこれも決め手とならぬことばかり
ほんとうのこと言いたくて言いたくて
考古学の俄学者がわが家にも

和泉市

岡 井 やすお

多数党たらいの中で波を立て

子報見て旅行やめれば急に晴れ

語学力買つても国語力問わず

鳥取県

さえき や え

仏さまごらん下さいこの孫を

地藏さま孫がとつても素直です

仏さまも人もだいにする孫です

鳥取市

広 本 文 子

駅裏にどんどんビルが建つ不安

敵がくれた言葉を芯にして生きる

一滴の血を交らせて重い河

鳥取県

谷 口 次 男

赤トンボ帽子に止まり思案する

イランでは鳥も案山子もヘルメット

人間の性格変えるサングラス

鳥取県

津 村 八重子

子に望む親はひたすら汗に生き

腹痛に富山のくすり老母信じ

城下町およく鯉さえ悠々と

羽曳野市

中 村 優

美しい語録が喜ぶ花言葉

この俺と意見があつた哲学書

おしゃべりの得意な友を乗せている

倉吉市

渡辺 菩 句

原爆忌僕も一分間黙禱す

帽子冠ると山本晋也そっくりさん

島根県

松本文子

義理果し帰る一人の影という

野菜の名ひとつ覚えて今日終る

奈良県

宮川 古都路

決断は女が決めるかくし金

水子塚増えるなやみの罪のかず

大阪市

横山 為子

星空に流した愚痴も二つ三つ

帰帆船エンジン軽く波を切る

鳥取県

乾 喜与志

遠耳に慣れて地獄が遠くなり

自画像に角を描かぬと嘘になる

米子市

小村 てい子

雨三日軽い話にしてくれぬ

散るまでを花に水やるひとり言

岡山県

山本 玉恵

幸せのひもがするする抜けてゆく

また逢える日へ泣いている衿ボクロ

鳥取県

土橋 はるお

湧き水の音の聞こえる丸木橋

ライバルの茶碗の底が見えている

豊中市

辻川 慶子

迎え火に藍の浴衣が娘に似合う

ばらの花もう来ぬ人と知っている

富田林市

新開 千代女

味けない独り暮しの夕ごはん

切れてから未練が残りあわててる

大阪市

北山 悟郎

老碌の言葉に隠れ金を貯め

信じ易い僕を息子が案じてる

岡山県

池田 半仙

散らずとも造花と解る色の褪せ

健忘症うやむやにする気ではない

出雲市

竹治 ちかし

口笛を吹いてる男が居る不安

汗かかぬ旨い話を嫌う父

弘前市

小寺 華峰

酒煙草好きで禁止のちかいたて

長かった二人に春のふきのとう

大阪市

宮下 とし

夜遊びを叱られないのも拍子抜け

光るものみんなはずしてりハビリー

大阪市

富岡 温子

一点で涙を呑んだ負けゲーム

薫風の爽やかさくれるおさげ髪

自選集

黒川 紫香

寸又峽勉強会で拾う

無煙炭だからSL窓開ける（大井川鉄道）
吊橋を渡りきれずに戻る女（夢の吊橋）
富士見峠で南アルプス眼の当り

米子への旅

蒜山へ来て牛乳を飲んだだけ
ひとりの夜皆生の海は荒れてくる

小林 由多香

不機嫌な上司へミスを言いそびれ
鮎哀し囀を追ってわなに落つ
ささやかなミスを暑さに怒鳴られる
億の土地野菜恐縮して伸びず
かぶりつき老優の息切れを聞く

工藤 甲吉

日教組大会ジュラルミンの中
パーマからまだ帰らんか帰らんか
幸せもやはり一寸先は闇
愚直とも言われ純粹とも言われ
忙しいときはゆっくり天邪鬼

本田 恵二朗

初フライト子燕たちよ元気でネ
ネエちゃんをお姉ちゃんにした太鼓結び
ど根性のほどを見込まれ惚れこまれ
一衣帯水が村創り町創り
ほほ笑みで包んだ人柄慕われる

大矢 十郎

待機する蚊へ八月も雨続き
深い目の呼吸で美女とすれ違い

ブランド売場僕はイミテーションでいい

写真ブック葬式写真を娘ら選ぶ

七家族我がファミリーの盆帰省

つまらぬ事を喋っている慙愧とも

無駄話の中に真実一つ見た

本論はいつそ省いてみることだ

原点に還りきれない浜の風

安らぎのある砂浜に寝る旅一途

お育てを戴き私はおろか者

後継に譲っていのちを考える

長生をした先輩の通夜かな

今日が吉日ケンなど信じない

薬にも毒にもなつて有夫恋

満潮のようにふる里盆の客

万年筆の方が感情にじむ文

三昧の音が止んで眠れぬ旅の宿

高原の夏は短いバスの旅

平和のひずみへ人災に事故多発

野村太茂津

山内静水

藤井明朗

水粉千翁

米澤暁明

八木千代

小出智子

励ましているなと妻をほめましょう

はかなさを知る人生のおもしろさ

指を折ることあり雲去り雲来たる

娘二人防風林でありしかと

墨の香や一気呵成の筆になる

奉加帳勢いこんだ額でなし

猛暑などひまわり知ったことでなし

ピクニックそんな速さの蟻の列

うるおいが欲しい計算機はいらぬ

じいちゃんの好み覚えている土産

花火師の手元から目をはなさない

そうめんを茹でたら花を買いにゆく

涼しげな眉で枕にくる仏

鉛筆を尖らす月を昇らせる

曼珠沙華 火になりきれぬ日は僅か

仮の世に生きているのをつい忘れ

已むを得ぬことだと書いてある日記

自分がかわいいと友達も言っている
洗濯機がもし無かったらどうしよう
悔いのないようにと母の爪を抓む

月 原 宵 明

母の癖どおりにちびた庭簀
子供みな昼寝をせよとあぶら蟬
腹減らぬのが怖いこと考える

代々の漁師で家は海を向き

軍人墓地いくさに負けたこと知らず

金 井 文 秋

ばたばたしなさんなと持病顔を出す

一生付き合うてくれと持病が言うている

油断するなと一病を授けられ

病気の根断ち切れぬのが歳と知る

超音波五臓の動き無事を見せ

有 働 芳 仙

財テクのどっぷり金につかる夢

踊りましょうへ神経痛の腰をあげ

グルメツアー家へ帰れば玉手箱

老残の鏡へ若い血を探す

ひよっとして俺は醜い家鴨の子

ひまわりの影うつむいて風も秋

同窓のまた一人減る秋の風

裏切りの背中に響く秋の風

コスモスの花の中なる町工場

ウインドーへ自分の猫背見て歩き

正 本 水 客

舞い狂う花の心は分らずに

片意地を通して輪の外にいる

やり通す心は母にもろている

税務署でつぶした暇は口にせず

暇を惜しんで数珠をつまぐる

児 島 与 呂 志

握り飯もうしばらくの登り坂

たとう紙女の着物は寝たまんま

あの頃は運と若さと無鉄砲

紀の川の水が写した秋の雲

おはぎ提げ亡き戦友に合う彼岸坂

藤 村 女

同人吟

秀句鑑賞

前月号から

新家完司

鯨一尾 貴公子然と売れ残り

谷垣史好

売れ残っても鰯には鰯の誇りがあります。
にんげんと雑魚のいのちを、同じ重さで見つ
める作者の目は鋭く、そしてやさしい。
洗濯機に首突っ込んでみたくなる

土居耕花

サボテンに裸で抱きついた男に、どうして
そんな馬鹿な事をしたのかと訊ねたら、「は
じめは良い考えだと思ったから」と答えた。
好奇心の強い男は面白い事を思いつく。
勝ってたらどうなったやら敗戦忌

吉岡美房

負けて少しは謙虚になったのかと思ってい
たら、最近の日本人の傲慢さ。「たら」を言
い出せばキリはないが、勝っていたらもっと
大きな悲劇が待っていたかも知れない。
大義に殉じた人々には申し訳ないが、負け
て良かったのではないだろうか。

前歯四本抜いてはははと笑いたり

福元みゐる

はははと笑うしか、しょうがない時がある。
前歯が一本抜けただけでも人相が変わるのに、
誰の責任でもない。このやるせない泣き笑い。
悲しみをふっと忘れる時もあり

西森花村

時が癒やしてくれない悲しみはない。どん
なに大きい悲しみでも、少しずつ忘れる時間
が長くなり、少しずつ生きてゆく力が湧いて
きます。忘れるということのありがたさ。
仏となる喘ぎの息をただ見つめ

北野久子

生きとし生けるもの、その命が消え去る瞬
間は苦しくて恐い。まして愛しい肉親の死を
目前にして、何もしてやれない絶望感！
電話口夫婦喧嘩のあとらしい

奥田みつ子

この電話、タイムリングが良かったのか悪か
ったのか。洞察力の鋭い人にかかれれば、電話
線の後方の事が手にとるようになるにわかります。
シャンドリア素敵な面を皆かぶり

浜本ちよ

ハレの場所ではみんな「ええかつこしいの
ええこと言い」になって面白くない。普段着
で本音を語り合える時がいちばん楽しい。
ご自慢をたっぷり聞いて花もらう

江原とみお

うっかり花を替めたのが運のつき。自慢話
に相手を打つのもエチケット。花を作る人は
善人が多く、善人は自慢話をする人が多い。

ティールームいつもの席が空いている

坪田紅葉

落ち着いた内装、趣味の良い音楽、香り高
い珈琲、人柄の良いマスター。馴染みの店で
は黄金の時間が流れて行きます。

栄養満点のおばさんが来る道譲る

谷信夫

栄養満点のおばさんの迫力には戦車だつて
かなわない。戦後の復興を側面からガッチリ
支えてくれた、偉大なる日本のおかあちゃん。
車座になつても目だつ人がいる

三宅保

目だつ人にも「カワイゲ」のある人と無い
人がいるようです。可愛げのある人はリーダ
ーに、無い人は鼻つまみに。

雨の音夫婦それぞれ別のこと

藤解静風

小津安二郎の映画のシーンのようですね。
お互いに空気のようになつた夫婦、それを客
観的にながめている目は、大きくてぬくい。
金持ちの女美人にみえてくる

小澤幸泉

金は人に自信を与え、自信は人をいきいき
と輝やかす。美しく見えるのは「金持ち」と
いう先入感だけではなさそうです。

献血ももう許さぬ齢になり

中西兼治郎

自然の摂理とはいえ、齢をとるということ
はせつないもの。しかし不公平な事が多い世
の中で、みんな公平に齢をとる、ということ
だけはありがたい。

川柳太平記 (125)

川柳の群像

柿沼考人

東野 大八

「大正六、七年頃、柳樽寺川柳会同人の中に二組のベアの名前があるのに、当時八、九歳であった私は、興味を感じていました。一つは寺井尺一氏とその御子息の小尺一氏。もう一つは柿沼掬水子氏とその弟の小掬水氏です。尺一ベアの方は御風貌もさだかではありませんが、掬水子ベアは眉目正しい兄と、童顔の弟の面影を今日なお刻み残しております。大正中期の「大正川柳」には、この二組のベアの活躍が目立ちます。掬水子さんが赤坂一ツ木で和菓子屋を始められた頃ではないかと推察いたします。其後は地方に移られて活躍されていたようですが、昭和四年頃上京、白石維想楼氏等と「川柳人」の編集に参加し、当時の柳樽寺の句会にも氏の名前を散見する

ことが出来ます。この頃の方がかえって記憶に薄いのは、氏がもの静かな方だったからだろうと思うのです。

爾来幾十年、日川協第一回大会に参加し思いがけなくわが句が大賞を受賞した際、既にご高齢となられた柿沼考人氏（掬水子改め）と肩を抱き合って久闊を喜びあいました。（「川柳さいたま」No.322「柿沼考人氏を悼む」大石鶴子）

掬水子の頃の考人は実弟小掬水（のちの月歌）とともに大正9年頃発行の「大正川柳」「一家吟」には毎号十余句が並び、同誌半歳毎の「一家吟採点番組」では、掬水子（考人）はつねに横綱・大関を張り、三役クラスには田中五呂八、三浦太郎丸、小林不浪人らの名

があった。

考人の本名は柿沼幸八。明治27年9月12日栃木県足利市生れ。同郷の山安次郎（さいたま同人）とは久しいつきあいで、考人手づくりの川柳雑文誌「苗木」へは、せっせと各地句会めぐりを寄稿し、考人が死去するその日まで面倒をみたかけがえのない友人だった。考人は昭和60年7月24日老衰で死去した。享年92歳だった。

「考人の若い頃の身辺を探る困難さは、本人がなお生きていてその事を拒否しつづけているのではないかと錯覚する程です。大正のはじめは足利市にいて数人の仲間と常盤川柳会などをやっていた。その頃は和菓子屋をやり、これが四年頃までの職業だったようで、電気屋の手伝いもしていたとか。戦災に遭いその後も失火から居宅を全焼するなど、川柳の古い資料はすべて焼失していました」（山安次郎氏筆者宛書簡）

考人といえば川柳の句が一つもない川柳雑文章「苗木」で知られている。昭和40年11月創刊で、孔版自力印刷による隔月刊（毎号60頁）。最終刊は死去する年の春に出したNo.58号（これはタイで印刷）である。

昭和43年頃、筆者は「苗木」を推賞する一

文を書いたが、それをしおに彼との文通がはじまった。「苗木」の孔版は豆粒のような字でびっしり誌面を埋めていたが、その通りの手紙、ハガキが頻繁に届いたことである。

「川柳さいたま」No.313は考人特集号で、彼を知る人々が交々弔文を書き、十頁にわたっているが、その中からピックアップして、考人の人柄やその仕事を偲んでみよう。

「あの瘦身のどこにあんな情熱が秘められていたのかと思うほどだが、考人さんは二つの大きな仕事を後世に残された。雄山閣出版の「川柳年鑑」これは九年間にも及んだ企画編集であった。いま一つは川柳界にプロパー出でよーのキャッチフレーズに、自ら鉄筆を握って出されていた句のない柳誌「苗木」である。いずれも川柳界の隆昌を願うあまりの至情から出たものである。」(佐藤正敏)

「昭和36年「さいたま」の前身「あだち」15号に私は「何を詠うか」を書いたが、16号に考人氏は反論というより私の生意気をたしなめるように「やむにやまれずという宿命」を載せた。ところが17号に今度は山村祐氏が若い芽を摘むなという主旨の「伝統から遠く」を寄せられて大変恐縮した思出がある。

しかし後年の考人氏の軌跡を見ると立場が

逆転していることに祐氏は苦笑を禁じ得ないのではなからうか。私が次第に地域川柳にこだわるのと反対に、考人氏は「白帆」「人」など革新系へ接触、大いに理解あるところを示し、明治生れとは思えない意欲的な活躍を始めた。あるいは同年の清水美江氏への対抗意識があったのかも知れない。事実、二人は想像以上にライバル視していた。後に考人氏のライフワーク「苗木」創刊や「川柳年鑑」編集など、それがバネになっていったと思える。

「あだち」時代の長期連載「清水美江論」や「白帆」の同「三城信子論」や「川柳研究」の「川上三太郎論」など作家論に、手焼きせんべいのように丹念な筆致で、あたたかい眼差しを感じさせる、いわば考人節ともいうべきレトリックは至芸であった。句もさりながら文に情熱を注いだ柳人も少ない。貴重な存在だった。」(篠崎堅太郎)

「○道学者めき考人は干涸びる 正敏
披露を聴いた師のなんとも照れた顔が彷彿されてくる。正敏氏が衝いた土匪吟。けだし鋭い穿ちが面白い。」

「柳人は会った時から10年の知己。句箋で結ばれた友情こそ大切」

とは語録の一節。先生は雑文家を自認して

おられ「観光川柳」誌に長期間にわたったエッセイとともに、米粒のようにびっしりと書かれた私信に教えられること多大でした(松村育子)

「君のは川柳なんて言えるもんじゃやない。強いて謂うなら歌謡川柳と言うべきか……」

私の句をこんな風に酷評して楽しそうに笑う。郷里足利の市制60周年大会の文化祭へお供したのが地元を離れて遠出した最後になってしまった。栃木、埼玉、東京、神奈川、都三県のさして広くない世界を腰巾着のように付いて歩いた。懐しい人だ(山安次郎)

絶筆となった「苗木」No.58巻頭言より。

「柳誌が面白くないのは記事、読み物に金をかけないで句会人口をふやそうという方に熱を入れ新人よりも既成柳人を掬う方が手取り早いとするからであらう。(中略)理想をいえば作句者だけの柳誌でなく、川柳を愛好する読者を楽しませる柳誌でなければならぬ。結論は、柳誌づくりは必ずしも頁数で決まるものでなく一頁でも無駄なく生かす事だ」
抱き起す友あり杖はななくもがな 考人
適業につけば平凡すぎる日々

★次回「清水白柳」

俳風柳多留廿六篇研究 (三十八丁)

本多正範・石田成佳・大屋六郎
八木敬一・鈴木 黄・石田晋一
南 得二・小野真孝・多田 光

故岡田 甫

645 遠く遊ハすマ伯父から所望され

本多『「遠く遊ハす」は『論語』、「子曰、父母在、不遠遊、遊心有方」の文句取り。

句意は、魔所へも行かず、『論語』の教えそのままを實踐しているとも言えるようないい息子、近親から是非にと貰いがかかる。大屋『賛』

きん／＼たる初会言ふ事にこまり 傍一 46

こちらはドラ、同じく『詩経』の「関々タル雉鳩」の文句取り。

鈴木『賛』

遠く遊はず地ごくだのけいしやだの 三五 21

南『賛』

父母ハ子に遠く遊べと昼氣ざし

一〇五 12

多田『賛』

646 遊山湯に行ハ持たが病イ也

本多『「遊山湯」は気晴しに温泉場へ出掛けること。「持たが病イ」は、なまじもっているから、わざわざが生じる意の俚諺。

遊山湯に行くなどというのは、なまじ金があるからで、やがては遊びほうけて身もちくずすことになる前兆だ。

持たが病うなつても泣て見せ 一〇一 25

持ツたが病ひ又湯治く

五一 31

八木『この句の表の意味は礎の通りであらう。もう一つ、裏の解があるように思ふ。そつ見えるが(草津などの)山の湯に遊ぶのは、(梅毒などの)治りにくい持った病があるからである。

南『同右。「遊山」とありますから礎の説のようですが、「遊山湯」と行くなどといって出掛けたが内実はこれく／＼の病気を治療するためでね、というところか。

多田『私は礎解だけのようになら考えていましたが、八木説を加えた方がよさそうです。また「持った」の「持」を「痔」と結べば、男

色で痔になった者、あるいは普通の痔持か。

647 仲鷹ハもうこし団子にて月見

本多『「仲鷹」は安倍仲鷹。七二六年遣唐使として留学、居唐五十年で長安に没す。

あまの原ふりさけみれば春日なる

みかさの山にいでし月かも

と、明州の海辺で詠んだ歌で、主題句はこの故事を詠んだもの。

「もうこし団子」は蜀黍の粉で作った団子昔、中国のことを「もうこし」と呼んだが、それにもかけてあるか。

句意は、中秋の名月には米の団子を作って月見をするが、仲鷹は在唐中であつたから蜀黍団子で月見をしたであらうとの諧謔。

仲鷹が月ハもうこし団子なり 九七三七

もうこしで詠んだも百の内へ入れ

多田『賛。』

三七七

648 鷺の案内てひよ鳥をこへ給ひ

本多『義経のひより越えを詠んだ句。

「鷺」はひより越えにあたつて、義経を先導した鷺尾三郎義之。ひより越えの時はまだ十八歳の小冠者であつた。

主題句は、鷺とひよ鳥の縁語仕立て詠んだ句である。

ひよ鳥ハ鷺の尻尾に付て行き

三六13

ひよ鳥の道をハ鷺が能くおしへ

三八14

南『賛。』

サア鷺についてこされと御あんない

五五32

多田『賛。』

649 三会目あした愚札を呈す也

本多『「弁蒙通人講釈」に、

三会目ハ床花。あくる日ハ鼻紙入に文を添へ、それから八日ごとにまいる文

遊女からの愚札とは札文をさす。

三会目傾城流の文が来る 五三20

八木『賛。『柳花通誌』に記事がある。多少

の品物も添えたらしい。

南『主題句、「愚札」とありますが、「愚札」

ではありませんか。

小野『賛。愚札でないと意味が通じません。

多田『同。「愚札」です。

650 神慮に叶ふ飯をくふ伊勢や也

本多『「神慮に叶ふ」は神の御心になつてゐる意。

不拍子か神慮に叶ふ午祭

六八19

などと詠まれているが、ここに言う「神慮」は「神は正直」「神は見通し」などの諺をふまえての表現で、特に深い意味はない。

句意は、何事においても節儉をむねと伊勢屋は、飯を食うにも決しておごることなく、儉約を常としている。それがつもりつもって財をなす、まさに神は見通して、日頃の勤勉節約のたまものである。しかし、本句は伊勢屋の処世術を礼讃したのではなく、「神慮に叶ふ」(伊勢神宮を背景にして)と大上段に構えて、揶揄し皮肉つたのである。

南『よくわからない句。「神慮に叶ふ飯」とは、唯単に手ぬきされる粗末なる食膳の謂のみでなく、江戸時代の通念として具体的に何かを指すのか(例えば玄米食)よくわかりません。

多田『礎稿と南説のように質素な食事のことかと思われる。『浮世風呂』前編・巻之上に「あの御親父は伊勢から出て来て一代に仕上人さ、その代利勘だ。なんでも人は奢てはゆかぬね」とあり、そのあと儉約な食事を述べている。それと伊勢の神と結んだものであらう。

江戸川柳富籤志

(5)

阿達義雄

(六) 御咄^{おはなし}
御咄というのは、富突の当り籤番号を版にしたもので、富興行のある度毎に江戸街中を疾走しながら売り歩いたものである。初めは「富の出番」と言つて、売り歩いたのであつたが、其筋からは是を停止されて後は「おはなし」と叫んで売り歩くようになった。

『守貞漫稿』を見ると、
「最初は富の出番云々と売歩^{うり歩}行したが、是を停止せられて後は、於波奈志々々々と一の富の番号^{ばんぱう}許^{あて}を書付て売り駆^かりくこと市中縦横^{じちゆうじやうへい}數十人也。是は富の札^{ふのし}を買^かりたる者の為に非ず、第^{だい}付^づとて一の富の出番を当物して、裡店^{うちみせ}女房酒屋^{にようしやく}下見迄、掠^{かす}め錢を一銭二せん賭^かして当物^{あてもの}す。一文は八文にして取る割合故、大欲^{たいよく}の輩、大金を以て賭するもあり。」

即ち、これが大衆に非常に迎えられたのは、富札を買わないで、一の富の出番号によつて賭をすることが流行してゐたからであつた。

富札は、一分或は二米位の金——江戸庶民にとつては、可なり的大金——を投じなくては入手出来なかつたので、正式の富を付けるだけの負担能力のない下層階級の者等は、今回の一の富の番号は偶数が奇数かという事を当て合つたり、又、其の数が何千台であるかの賭けをしたりして、大小の財力に應じて、私かに間接的の富突を行なつてゐた。この類の隠れ富は影富と言われ、僅かな錢で賭けをし、それも庶民の間に広く行なわれていた。

お咄^{おはなし}と言つて、一の富の出番が、本當に富をつけていない大衆からも熱狂的に問題にされたのは、それによつて各人が思い思いの賭けをやつてゐたからであつた。

一番槍をお咄で御注進

九六・15

——一番槍は一の富の番号

あわただし何事だ富の出番

一〇七・39

お咄を片酢をのんで待つてゐる

九六・18

とめるなといふ身でのお咄お咄

一五五・4

——いずれも慌しい疾走ぶり

おはなしで手間のとれぬは出番売

一三〇・11

槍先の手柄四文の御墨付

一三九・1

——一の富の出番号を記した紙片は四文

お咄しのやうに番付持つてかけ

一一・23

——この番付は江戸歌舞伎三座の新番付で、開場毎に市中に呼売してゐた。お咄売のように駆けながら売つてゐた。

お咄しも間魔堂から足疾鬼

一〇四・九

——浅草の間魔堂にも富突が行なわれた。足疾鬼は羅殺の族で、釈迦の舍利を掠めて逃げ、韋駄天の為に捕えられた。ここでは足が疾いことを言つてゐるだけ。

運のない事を咄にならぬ鉢

九九・93

おはなしはかぶつたやつが売り歩き

一〇五・20

——富突でさんざん目についた者が、お咄売りをしている。かぶるはしくじること。

下女聞きちがへお茶菓子が四文だと

一〇二・11

——「お咄し四文を」お茶菓子四文と聞き違へる。神行戴保が売つて来るお咄し一二八・3

—神行太保が正しい。神行太保戴宗というのは水滸伝に出てくる人物で、双の腿に四つの甲馬を括りつけて、一日に八百里の路を行く奇妙な神行法という道術を行なって神行太保と綽號された。

ゆんべの夢樂お咄を聞いてホイー〇一・10

—お咄を聞いた瞬間、昨夜の吉夢もオジャン。

夢樂は文化文政頃の落語家、夢樂はお咄にかけただけのもの。

追々に早打の来る一の富 一二四・111

—右も矢張りお咄売りを詠んだものであろう。

藤八は五文お咄四文なり 九六・22

文政八年頃、蛇の目の紋所の印のある薬箱を背負い、必ず二人連れで、両側に分け、一人が「藤八」と呼ぶと、他の一人が「五文」と応じ、次に二人が向い合って「奇妙」と合唱する薬売があり、この二人が売る薬は藤八五文薬と言われ、この風俗が中村座で松本幸四郎の扮装で出演され評判になった。この藤八五文薬とお咄四文を併せて詠んだのが「藤八は五文お咄四文なり」の句である。

次に掲げた挿絵は明治22年11月26日発行の『江戸会誌』第一巻第四号の64頁に示されているものである。

この藤八五文薬について、西原柳雨の『川柳江戸名物』に、

「是亦江戸時代売薬行商の著名なるものに

て、蛇の目の紋所の印ある薬箱を背負ひ、藤八五文と高く触れながら来る。

江戸商標集に掲げある看板によれば、本家は長崎の綿屋藤八にて、売捌所は駿府のやうであるが、江戸に来たのは文政八年の夏以来にて、二人の男が両側に分け、一人が藤八と呼ばば一人が五文と応じ、次に両

人相面して奇妙と合唱す。

価は一粒五文にて万病に効あり、同年七月、中村座にて松本幸四郎これに扮し一層の評判となれり云々」とある。





アトリエのみかん ころんだものでない

岸和田市 高橋操子

高橋操子 柳歴

昭和6年 柳誌「むろまち」(今村良之祐主幹)の会員となる

昭和8年 番傘、新聞等へ投句

昭和24年 岸和田川柳会創立

昭和27年 「川柳雑誌」に入門。29年 不朽洞会員

昭和51年 岸和田市久米田寺に句碑建立

昭和53年 句集「千亀利」発行

昭和62年 第二句集「万年青」発行

現在 川柳塔相談役、岸和田川柳会会長

路郎賞準優秀作第一席

空調の音がすかなり美術展

西宮市 奥田みつ子

路郎賞候補作品

正本水客

献血車 礼儀正しく動き出す 仁部 四郎

ボットの湯いっぱいにして友を待つ

車間距離きっちり守ってついて行く 本間満津子

退院の日の老妻がこそばゆし 福本 英子

気の利かぬ振りして急場切り抜ける 土居 耕花

考えてなお考えている振り子 河井 庸佑

高杉 鬼遊

灯を消して

ただそれだけの夫婦なり

羽曳野市 榎本吐来

肩車見せたいたものは見ておらず 有働 芳仙

〈準推薦句〉

家古く夫婦も古くなっている 宮口 笛生

あした咲く程は山茶花散っておく

〈推薦句〉

灯を消してただそれだけの夫婦なり

石垣 花子

榎本 吐来

野村 太茂津

几帳面すぎて貴女は絵にならぬ 久家代仕男

振り向こうまだ手応えのあるうちに

坊さんの車は少しボロがいい 松原 寿子

土居 耕花

銃眼からのぞくと人は敵に見え
潮ときは今だと思ふ弓の弦
値崩れがしそつて年は言わぬこと

林 荒介

化粧ボーチすこし不倫にあこがれる

牛尾 緑良

失うもの無いから怖いものがない

西口いわゑ

腰低い男足技かける気か

藤田 泰子

〈推薦句〉

濡れ衣がいつか馴染んでよく似合う

西山 幸

黒川紫香

手紙さえくれば母さん安堵する
にんにくを効かせ歯医者へ仇討に

福井 桂香

間違ひは最初のボタンのかけ違い

藤田 泰子

新しい夢を見ようと枕買う

菅井とも子

お月様今宵は連れがありますの
加害者で巻尺の端持たされる

田形 美緒
田中 叶

青畳 椿一輪極まれり

西口いわゑ

〈準推薦句〉

新しい顔で出て来る陽が好きだ
音痴でも唄えば孫が寝てくれる

田中 亜弥
島崎富志子

〈推薦句〉

空調の音かかなり美術展

奥田みつ子

西田柳宏子

エイエイオー畑一面のネギ坊主
どつぷりと和の中にいて和が見えず

堀端 三男

十本の指で英語をしゃべつて来
しあわせは妻と喧嘩の出来る日々

遠山 可住

よつもつた夫婦茶碗を拭いている

松本 忠三

うぬばれてうぬばれて今日を生きる

吉岡 美房

ふるさとは鬼も仏もあたたかい

林 荒介

〈準推薦句〉

無駄口は決してきかぬ力釘

玉置 重人

真白な下着に今日も生きている

西岡 洛酔

〈推薦句〉

股のぞきして大空を好きになる

田中 亜弥

橘高薫風

尺取虫の歩き疲れて枝になり

久家代仕男

家中の空気が動く探しもの

高橋千万里

坊さんの車は少しボロがいい
花吹雪避けて通れぬ霊柩車

土居 耕花
若宮 武雄

高橋操子

こんな立派な賞をいただいて感激のほか
はございません。

これからも川柳のために、微力を尽くし
たいと思います。
ありがとうございました。

梅干しが酸いので安心していきます

玉置 重人

職持たぬうしろ姿は隙だらけ

松下たつみ

六十の浮気は色でなかりけり

板東 倫子

病窓に若草山が芽ぶく色

宮口 笛生

珈琲よ輩は揺れてる方がよい

小島 蘭幸

〈推薦句〉

アトリエのみかんころんだものでない

高橋 操子

推薦のことは

アトリエの机にみかんが無雑作に置かれて
いる。無雑作なようである。それは数と位置
とがなさりではないのである。厳しい内容を、
こんなに平易に表現出来るのは、作者の
キャリアのたまものにはかならない。

63年度川柳塔賞

土居ひでの柳歴

昭和57年 大原川柳社加入
昭和61年 川柳塔誌友



思いきり眠ってみたいねむり草

岡山県 土居ひでの

川柳塔賞準優秀作第一席

追伸がずつしり重いしだれ梅

今治市 野村京子

川柳塔賞準優秀作第二席

今に見て居れと雑巾掛けをする

尼崎市 児玉歌子

川柳塔賞候補作品

小出智子

稲光り師の伝言を聞きもらす 岸桂子
考えている間にバラが咲きました

そのうちに分ると父は気にしてす 岩本笑子

袖口の綻び妻よ心せよ 上田柳影

美しいまま標本になっている 寺中三枝子
よその時計が鳴っているよその幸せ 小林一夫

友達は働きすぎてつまらない 永田俊子
一人身となつて他人の多いこと 椎尾公子
井上すみれ

受け流すことも覚えてみかんむく

〈推薦句〉

今に見て居れと雑巾掛けをする 児玉歌子

高杉鬼遊

世の中をさかさまに見るナマケモノ

相合傘とつくに雨は止んでます 片上英一
象の鼻長いと象は思わない 伏見すみれ

矢印の切れた所でほつとする 大西文次

鶴と亀としも知らずに生きている 田中輝子

ニワトリに言うてはならぬ卵の値 森川抜智
最初から悪妻だった訳でない 江口万亀子
秋元てる

友だちのうしろでお辞儀して帰る

流 奈美子

〈準推薦句〉

蟻と蟻内緒話をしてわかれ

柗本 路見

〈推薦句〉

ふと夜半目覚めて音のなかりけり

森 茜

河内天笑

ニワトリに言つてはならぬ卵の値

江口万亀子

一人しか要らぬ伴侶が見つからぬ

津村八重子

母さんが女になってダンスする

高野 宵草

一賞雑感

西尾 栞

昨年は路郎賞を準優秀作を含め男性軍が独占、気を吐いたと思うたら、今年は、また女性軍にしてやられる結果となった。

路郎賞の高橋操子さんについては、今さら申し上げるまでもない大ベテラン。川柳眼のたしかさはさすがである。

川柳塔賞の土居ひでのさんは、耕花さんの一族と聞き及ぶが、よき環境の中受賞を機に一層のご研鑽を期待してやまない。

マイペースなどと不精がひどくなる

宇野 昭代

野の草に我が生きざまを問われけり

藤井 高子

自画像に省略出来ぬほころなり

楠 昭子

年金を十二で割った暮らし向き

東浦 砥代

ねじ少しゆるめなさいと春の風

永田 俊子

〈準推薦句〉

今に見て居れと雑巾掛けをする

児玉 歌子

〈推薦句〉

祈りつかれ鶴折り馴れて冬の草

吉川 寿美

蒸し暑うて財布に銭がはいらない

新聞で鼻をかんでる米寿かな

土橋はるお

パチンコのキャラメルですが仏様

相馬 英三

鷹の輪にすっぱり入る町に住む

宇野 昭代

中耳炎洞窟にいる冒険者

蘭田 猿沓

蝶ふたつひらひら舞って好きと書く

新井 朋子

ストレスを溜めております松のコブ

山根 八重

岩田 三和

友達のうしろでお辞儀して帰る

流 奈美子

人間も布团も裏を干すがいい

乾 隆風

〈推薦句〉

思いきり眠ってみたいねむり草

土居ひでの

喜びの言葉 土居 ひでの

この度思ってもみなかった川柳塔賞受賞のお知らせを戴き唯々驚きと感激で胸がいばいです。諸先生方をはじめ先輩の皆様を支えられ今日まで続けられ柳歴も浅い私に、これ程大きな賞を戴くことは身に余る光栄と感謝致しております。これからどうぞ御指導よろしくお願い致します。本当にありがとうございます。

板尾 岳人

福寿草対でしほんでゆく嫉妬

もう別れ話をしている夏帽子

有耶無耶な返事が返るいわし雲

よく喋る女を論す山椒の実

ぬれ衣を黙って受けている時計

面倒見のよさが取り柄の握り飯

〈準推薦句〉

祈りつかれ鶴折り馴れて冬の草

野の草に我が生きざまを問われけり

墨を濃くふくませて書く愛と書く

〈推薦句〉

追伸がずっしり重いしだれ梅

野村 京子

栄ある二賞の足あと

路郎賞

満開の花に誘われ修羅出土

香川 酔々

昭和54年度
ペンシルの芯は脇道など知らぬ

松原 寿子

昭和55年度
女と妻のあいだで好きな彩を着る

小出 智子

昭和47年度
眼閉す耐える苦痛が洩れぬよう

堀江 正朗

昭和41年度
内職に藤色があるたのしさよ

内藤ささ子

昭和48年度
揚つても揚つても雲雀に空がある

小浜 牧人

昭和42年度

身よりなき老婆いくさのことにふれ

森田 布堂

昭和49年度
楢山へ背負うて呉れる子もおらず

藤井 春日

昭和43年度

似て居ない父に足音だけが似る

木山 遠二

昭和50年度

悔のない汗千金の夢追わず

林 瑞枝

昭和44年度

足跡を残そう砂のある限り

本田恵二朗

昭和51年度

染め替えて羽織は過去を喋らない

岩田 美代

昭和45年度

握手した手が離れないまま坐り

浜田久米雄

昭和52年度

生き方の違いを敵のように言う

森井 菁居

昭和46年度

灯台の夕陽神話を抱きよせる

尼 緑之助

昭和53年度

昭和61年度

春ざわざわ一級河川まだ眠り

谷垣 史好

聞かせとこ九官鳥が喋るから

高橋 千万子

飾り壺一枝さされた事もなし

谷岡 芳枝

昭和55年度

該当作品なし

昭和62年度

この夫に草書のかすがちと欲しい

松川 杜的

めでた めでたでひとり娘をもつてかれ

堀江 芳子

昭和56年度

この街の機械の音を受す父

西村 美佐女

川柳塔賞

昭和42年度

雲の峰あるけばあるくほどひとり

三宅 不朽

昭和49年度

小出しする愛円周をかけている

小谷 葉子

昭和57年度

太陽の笑顔を独り占めにする

奥山 美智子

昭和58年度

渡し舟みんないい顔して渡る

澤田 千春

昭和43年度

消えるから雪は刹那を淨く舞い

高杉 鬼遊

昭和51年度

お早ようと豚が正しくささやいた

安達 潮音

昭和59年度

不器用な夫婦で植える柿の種

吉川 寿美

昭和44年度

宝石の悲哀永住権がなし

王 紫

昭和52年度

咲いて散るただそれだけの世に疲れ

西山 幸

昭和60年度

順番に咲いて散るなら事もなし

赤木 和子

昭和45年度

倅せな女にふだん着が似合う

小出 智子

昭和53年度

デッサンのままで成長して女

古谷 節夫

昭和61年度

鶴の瞑想或は人より深からん

永田 俊子

昭和46年度

モナリザの笑いへ私も笑うてみる

生信 笑子

昭和54年度

一匹がはねればみんな跳ねる魚竜

岩田 三和

昭和62年度

裁かれているのだろうか寒すぎる

河瀬 芳子

昭和47年度

水煙抄

黒川紫香選

今治市 野村京子

忘却の森でおろかに生きる恋
恋ひとつ終り伏せ字が読めてくる
イヤリング揺れるグラスの中の嘘
ポケットのほころび愛がひとつ逃げ
保護色にあきた女が殻を出る

鳥取県 小谷美千

少年が夢を見すぎた夏の夜
ひとりいて確かに秋の音を聞く
秋の女が斜めに構え生きている
ポケットで君とつないだ手がぬくい
コスモスも風に逆らう時がある

名古屋市長古屋市 藤井高子

しゃぼん玉はせてふんざり呉れました
戯画抜けた亀と兎がむつまじい
身は五尺なんぼ背のびをしてみても
手堅さは父の路線を守りぬく
とうろりとろり無冠の酒がしみわたる

富山市 舟渡杏花

途中から小さいつづらに替えてみる
ライバルの影がわたしを愚弄する
帰したくないひとを送る萩の道
酸欠の街で目覚めた凡夫婦
耳を塞いで財布のネジを固くする

熊本県 大川幸子

出船入り船港は温い母の胸
苦労した分だけ女深くなる
牙のない優しい男に飼育され
後悔をしてる数日後の値下げ
チチンブイ孫によく効くおまじない

長岡京市 木本如洲

余程よい電話か笑顔が美しい
味噌汁の味に確かな朝がある
約束の虹は海から現われる
誘ったのは貴船川床に妻といふ
龍安寺しぐれに石は語り出す

金箔の浮ぶお酒をお相伴

八尾市 高杉千歩

頼杖をつけばうつつにわらべ唄

凡夫婦月に一度の縄のれん

旅だよりさんさ時雨のひと節と

出張を鈍行にして墓参り

熊本市 宇野昭代

お喋りが過ぎてヒントを盗まれる

女なぜ女の年を聞きたがる

生真面目が取り残されたかくれんぼ

ハイハイと叱言は頭上をすべらせる

家計簿は赤字へそくりちゃんと貯め

広島市 流奈美子

故郷の渚で潮の香にむせる

星空を仰げば亡母の声が降る

生きるとやかくも多くの恥を積む

弁解がしたい気弱な喉仏

大人になれず一途に生きている

佐賀県 寺中三枝子

レジャーブラン嫁の若さに負けました

そして秋水鉄砲の忘れ物

ひと言と長い祝辞も秋ならで

反骨の画布になじまぬ赤い色

ふくみ笑いたのは敵のイヤリング

高槻市 笠嶋恵美子

まっ白を着てもこころが晴れない日

「愛してる」何度聞いてもいいひびき
一言の重さ軽さよ母と姑

身の内の鬼をなだめているお酒

美しい死顔亡父に救われる（父死去）

尼崎市 森安夢之助

愚痴を聞く耳が疲れて欠伸する

満月へ投げキッスして雨戸引く

一本杉で祭り太鼓を聞くカラス

ちよいちよい妻の投げ込む誘い玉

五年目に会った女の厚化粧

静岡市 藺田 獏 沓

夏が来て広島からのメッセージ

失敗は覆面バトを追い越した

ジョギングへ話の連れに歩かされ

風上でサイレン無情に聞き流す

病む妻に匙で訊ねる塩加減

静岡市 沢田 さん

他愛ない悩みを告げる日記帳

欲ばって何時か読む気の本を積み

焼餅を焼いた胃袋ふくれ出し

なぐさめて欲しくて背を向けてみる

只今へ嫁が差し出す茶がうまい

大阪市 上田 柳 影

モンタージュ僕そっくりで寒くなる

バラソルを開く決断ついたらし

残照が赤あか窓を離れない

九十点の妻で少うし息が抜け
文学の道に坂あり青葉影

東予市 小山 悠 泉

宅配へ土産頼んで旅気楽

赤とんぼ秋の気配を連れて来る

鮮やかに面が決まっていた気合

髪切つて祈る一途へ運が向き

高座から笑いを配る万才師

滋賀県 久 保 和 友

中国へ旅（四句）

雪蓮を崑崙山の旅で買う

落日の下に巨大な塩水湖

なぜ旅するのかと新疆の人が問う

思い出が僕には苦い兵站部

原爆忌手話はすむ子ら平和説く

久留米市 鶴 久 百万両

秋の画布は晶子の恋を燃えさせる

魔女の恋みごとあやつる風の騎士

ワインよりあなたの好きな酎にする

俺は男痴漢の顔も見てみたい

血圧があがる恋ならやめ給え

京都市 木 村 たけし

八月の夫婦揃うて鶴を折る

虫しぐれ余生の日々はあたたかし

器用な言葉につい騙される鼻の汗

思慕を抱く絵の一枚が冷えてゆく

妥協するランクが廻り椅子にある

静岡市 小 木 久 子

神かけて誓うなどとは大げさな

何もかも腹におさめてこの余裕

友達も行くから僕も英語塾

茶所に育ち手摘みの腕自慢

目隠しをされてる事にふと気づき

待ちぼうけちよつぱり愛を確かめる 静岡市 片 平 静 代

下心あつて女の無理を聞く

英語塾通っていると子の自慢

しゃべれない秘密を聞いて胃が痛む

燃えてはいないのに煙出て困る

吹田市 井 上 照 子

朝顔のみんな萎れるティータム

パーティーの仲よし互いに酔いつぶれ

ファッションを飾った犬の土知らず

悔しさを落とす石けん溶けすぎる

改札口でポケット全部たしかめる

兵庫県 森 脇 和 子

字余りを風に乗せたい老いの詩

易の灯へ未練残して嫁きおくれ

青い鳥の囁きイヤリングが揺れる

五分五分の言い分折れて懐手

酒もよい団子もいよいよと仲が良

和歌山市 森 茜

清貧へ笑う娘がいとおしい

シャガールの絵のような朝の沈黙

高尚な話題にしてはこのマナー

黙るしかない身勝手へさらされる

岡山県 伏見 すみれ

気休めの言葉に癒える日を信じ

大卒といううぬぼれで職がない

千代紙の箱に少女の夢をつめ

そして雨母の手紙を読みかえす

米子市 新 正子

約束をひとり信じる月見草

ここまでは薬と酒に目印を

欲が出て花の香りにだまされる

鍋の中秋にぎやかにしやべり出す

西宮市 松本 一郎

お裾分けもつたいぶられ茂木の枇杷

詮ないが過去がしきりに悔まれる

人生に忘却と言うその救い

ひと言の妻の助言に救われる

和歌山市 田中 みね

うなぎ上りの出世で孤独を強いられる

打ち身捻挫すり傷火傷と妻多忙

お肉大好き困った夫の皮下脂肪

化けたわね今朝も鏡に冷やかされ

ちよつと来て別れ話をしてかえる
尼崎市 的場 十四郎

右左人の歩巾もまた違い

退屈の膝は仔猫も知つてのる

うすものの胸のふくらみ眩しすぎ

尼崎市 山田 保蔵

古井戸がこわい話を伝えてる

歌舞伎座で別れた女と逢う幕間

婆さんと猫が退屈しています

姑に掃除まかして食べに行く

鳥取県 横山 為子

村一とはめて仲人写真出し

竹トンボ高くとんだよゆめ乗せて

ぶらんこの余韻を残し子等は去り

三世代揃い食事が若がえる

和歌山市 田中 輝子

京都もいいね秋がいいねと女です

振り向けば私が負ける振り向かぬ

飴玉の一つの中の薄荷入り

とうとう降って来ましたそちらからの雨

出雲市 金村 青湖

姉がいたそうな四十三年目の夏に

一人子がキャッチボールの距離にいる

水害の復旧せかす蟬しぐれ

宝石の高価をさりげなく渡し

藤井寺市 高田 美代子

老父の帆はまだ真直ぐに風を斬る
サヨナラを言うワープロの置手紙

三枚におろせば男に形がない
そして秋しばらく休戦する気配

羽曳野市 吉川寿美

生きてゆくための御辞儀だ厭うまい
ユーモアさても不出来な目玉焼
はな無花果熟れて柳友の身を案じ

夫の手術近づく

それからの病夫の時計は狂いがち

岐阜市 渡辺杏村

運動会ビデオの主役ビリで来る

精算を迫られている夏の恋

奥様と呼ばれ小さい返事する

半袖でゴルフしてきた那覇の旅

尼崎市 鈴木良征

浮浪者の街で迷子になる私

木登りが下手で逆立ちする小猿

七人の敵と乾杯するゆとり

八月の雨は亡戦友への手向水

熊本市 黒田緑

真中にいくと限らぬ投げた球

見て呉れはよくても所詮ハウスのもの

川柳の眼鏡越しなる世は多彩

日替りの一齣そつと幕が降り

熊本市 北川一進

バイパスの裏はのんびり牛の群れ

サイズには弱いと女苦笑い
初めての旅行荷物の多いこと
真ん中に坐り言い分聞く構え

熊本県 高野宵草

カラオケに今日のうっ憤ぶちまける
翔び立った蚊が掃除機に吸いこまれ
尾をつけて僕の噂が迷うて来
定退の我が家毎日暑いこと

滋賀県 安田志津

待合室先ず待つ事を教えられ
偶然をうたがいませんお月様
一つ消え一つ生れる迷い雲
たかられて困り無視されるのは尚困る

熊本県 岩切康子

迷う気をがらりと変えるご来客
一つずつ荷を降して今日の日
鈍行を降りて逢う人温い
積る癪捨て場は海と決めて出る

鳥取県 黒田くに子

君が代も風化平和な日がつづく
外の世界のぞいて見たい蛙の子
さわやかなあと味少女席ゆるする
ふる里のぬくみ忘れぬ鮭かえる

鳥取市 西村黙光

天声人語明日の鏡疑わぬ

自分史に秘蔵の絵具濃く塗る
矢面へひよつとこの面用意する
深酒が過ぎると墓に叱られる

堺市 近藤 豊子

ローカル線窓いっぱい海となる
地下鉄の闇に写っている疲れ
叱られたこと懐かしく子に語る
すすり泣く声を残して幕となる

和歌山市 堀 畑 靖子

一步先譲った人にしてやられ
爽快な夕立に会うかざら橋
群衆の中の孤独が好きな靴
寝る時間惜しみ会いたい月見草

静岡市 杉 山 やす

田植唄聞こえもせずにもう青田
雨上り植木にもある息遣い
集会で拾って帰る知恵袋
梅雨空にあじさいばかり派手に咲き

守口市 森 川 春子

父と子で作った砂場の山崩す
お手本のどれを書こうか墨をする
遠い耳で孫の読む本聞いてやり
ハンカチで作るねずみも気味悪し

相生市 中 塚 礎 石

針穴へ通そうとする夫婦仲

嘘でない口が動いた腹話術
老いらくの恋ステップを踏み違え
言いわけの分だけ重い不足金

尼崎市 尾 宮 弘 治

気丈さが涙を誘う白い杖
気楽には飲んで居ませんコップ酒
青信号一気に山車を走らせる
責任を果して下を向く乳房

兵庫県 東 浦 砥 代

いつからか嫁を味方にかごめの輪
秒針に追われて朝が駆け抜ける
着替えても昨日の嘘は隠されぬ
筋道を通して速い縄電車

鳥取県 太 田 幸 枝

ユーモアが取りもつ縁の夫婦です
朝市で無料コーヒーだけを飲み
煎餅を買ってろそばに鹿が添い
ユーモアの通じないのが一人居て

香川県 上 藤 多 織

無口から出た正論に座がしまる
弱点を描けば自画像らしくなる
昨日より澄んだ眼鏡に秋貰う
正面を見る人形で傾けぬ

静岡市 安 本 孝 平

転寝の耳にささやく簾風

影だけが素直に写る失意の日
片隅で生涯地味な杭を打つ
老いてゆく空しさ埋めるペンの友

西宮市 秋元 てる

かがり火の底にゆらめく能衣装
七夕へ何にも書かぬ短冊を
玄関にカバンこどもはもう居ない
坊さんが御布施忘れていく暑さ

尼崎市 木下 義嗣

掃除だけ夫にたのみ市場籠
別れても風の噂を気にかける
よく笑う孫のえくぼを押して見る
湯上りの老妻なにか塗っている

尼崎市 野瀬 昌子

後ろから押され踊りの輪に入る
逃げ口を残してしかる親の愛
電柱に土地買いますと貼ってある
台風がそれで糞虫ほっとする

伊丹市 小熊 江美

空港で出て来る靴待つ不安
味方にも計算違いの敵がいた
呪いの様に毎日飲む薬
姑さんと小さなルール守ってる

寝屋川市 河合 時弘
面倒を妻にまかせる愛もある

薄化粧いくつになってもまだ女
欲のあるひとに吊り球よくきまる
面接に新人類の好演技

八尾市 椎尾 公子

裏切った仲間がだんだん昇進し
赤のれんから出て仲間われにけり
陶枕備えられたる木曾の宿
旅枕のんびり雑魚寝も又たのし

堺市 桜沢 あかり

弱音吐く心のネジを締め直す
馬頭観音に初秋の風は素直なり
いつか来た道で自信を取り戻し
新聞を積んで日めくり瘦せていく

貝塚市 池田 寿美子

やりくりも欲しいものには苦にならず
扇風機泳ぐ金魚はりボンです
清水の舞台ためらう遠花火
夜明けからたたかれている蟬しぐれ

兵庫県 奥野 テル

来年へ縫い直してる祖母達者
最低の顔で控えている知患者
口数の少ない父の目の光り
藍好む素朴な母の草木染め

雨の午後女が電話かけている
尼崎市 吉永 伊三郎

半分をきれいに見せて月の恋
種明かし紐は二つに切れたまま
異な縁で少し揺れてるヤジロペー

唐津市 中村順子

垣に咲く南瓜の花を受胎せり
真夜中の停電に逢うお手洗い
一円を笑い一円に泣かされる
百日紅木槿朝顔庭競う

尼崎市 明壁敏之

腹の虫押えていつも隅に居る
一人旅駅弁の味かみしめる
妻もまた孫に花火を買ってくる
へば将棋王様守ること忘れ

大阪市 榊本落児

神様も女好きですギャル神輿
女房は我が家の永久欠番だ
混浴の隅で女房の背な流す
風船を飛ばす合図を待っている

島根県 加本義良

雑草もそれなりの自我主張する
流れ星凡夫の欲の小さすぎ
秀才で通し歯車合わぬ人
修羅場をいくつか越して無精髭

大阪市 吐田純子

神様の答がほしい百度石

恋をした答がうつる三面鏡
水平線眺めて遠い娘を思う

和歌山市 前田美子

戻り梅雨古い傷まで痛みます
由緒など知らずギャルたち寺めぐり
ドラマからもらい泣きする泣きボクロ

鳥取県 鈴木芙美

幸せは市場で今日のメニューみる
文学集少女の夢をふくらます
妥協線少しゆるして平和です

鳥取県 山根八重

花火にもライバルがいる夏祭り
父さんのでかいくしやみもたより甲斐
風鈴と涼しい風がよくしゃべる

静岡県 久保きぬ

赤札に品質保証付いている
母の日は一日だけの親孝行
言訳に包帯見せて避ける友

大阪市 亀井円女

リクルートの儲け話も桁違い
独りの夜ワインのうまさ知りました
孫育ち誰に似たのか口達者

熊本県 増田一乗

大粒の夕立今夜はねむれそう
禁酒とは知らず中元またビール

「忘れえぬ満鐵」の本子に貰う

岡山県 土居 ひでの

逝った児は知らずブランコ風に揺れ
軍艦マーチ夫婦の絆が揺れている
ワンテンポ遅れる影と戯れる

大阪市 稲本 凡子

言い返す言葉は沢山持っている
言い勝ったこの空しさのひとり酒

台風予報それて一人の冷蔵庫

愛媛県 石手 武

夏休みローカル線が活気付く

風鈴が鳴り止み麦茶ばかり飲む

逃げ足の早さに叱る気が失せる

西宮市 上嶋 ふさ子

送り火が消えてやすらぐ盆供養

満ち足りて今朝の茶漬の茄子の彩

父と子の湯舟で対話つなく愛

寝屋川市 井上 すみれ

コーヒー玉露それぞれ自慢の友がいる

エレベーター正和に似た人駆け込んで

長電話今日の献立狂わせる

和歌山市 丸岩 晏

終戦日の追憶

消燈ラッパも鳴らず敗戦の夜

戦止みよろこぶ祖母の鼻めがね

敗戦日一瞬間も鳴き止みぬ

高石市 宮田 純一

旅の宿も一人産みましよと妻の言う

流れ星二度もみました露天風呂

混浴の相手は愚妻それでよし

広島県 森川 抜智

医者曰くよくも悪くもなりません

終戦記念日に

捨てた命 今年七十六になりました

軍服を脱いだ匂いがまだ消えぬ

旭川市 朝倉 大柏

叱る気で呼んだのに子飛んで来る

眼に見えぬ線やほりある無礼講

お人好しという烙印が邪魔になる

枚方市 森本 節子

傷ついた船にはためく万国旗

付添って痛み目に入る外科病棟

五分粥になった明日を待ち兼ねる

大和高田市 寺脇 三倉

自分史の国防色に封をする

ゲキ辛のカレーに夏の彩を見る

過ちの事実認めた目がきれい

藤井寺市 中島 志洋

披露宴美辞と麗句を聞き飽きる

二人には今宵の月が明るすぎ

ダイエツトするには辛い秋となり

尼崎市 中澤 向西

孫が来て親の言う事皆しゃべり

古里が恋しくなつて墓まいり

退屈で吸つたタバコが輪を描く

堺市 神原 文

我が定めこうとは知らず鮎下る

謙遜をし過ぎて自信顔を出す

立ち話三人目が来繰り返し

出雲市 金森 知恵子

ひまわりの想いが届く夏の雲

かみ合わぬ主張に揺らぐイヤリング

ある日ふと疑問生じた井の蛙

米子市 小塩 智加恵

娘だと姑最初に言つたっけ

ただでさえ暑い日眼鏡がなお暑い

なにもかもゆるした妻のいびき聞く

豊中市 村上 とく子

いさかいのあと味嫌で負けておく

コンタクト落しうれしい人の輪が

イヤリングはずしながらの生返事

豊中市 三宅 つえ子

人形よ貴女はどこに汗をかく

激辛のカレーです汗に光る顔

ひと言が次から次へ風にのる

病む鳩に優しい言葉かけてやる

犬を友ビルの谷間の自由人

墨染のヘルメットに逢う盆の風

京都市 小林 英子

舟端へ昼顔ひとつ乗っている

偉大なる凡人惜しむあじさい忌(七月十七日裕次郎忌)

一日の暑さラジオ体操が始まりぬ

寝屋川市 宮崎 菜月

あめ細工明治の手から生みだされ

道草をした子で虫を良くおぼえ

肩張つて退めたが未練うずを巻く

尼崎市 佐藤 美代子

笑顔よしズッコケの嫁客にもて

キャンドルの愛のあかしを信じよう

ワープロのキー心地よい余生の譜

高槻市 芦田 静江

どんな夢みて眠るのかカタツムリ

くやしきも怒りもビールで眠る日々

ケロイドの戦友は平和の旗をふり

唐津市 入江 喜久夫

風鈴もわたしもひる寝夏の午後

夏が遅くて暑中見舞やと書く

事故多発やっぱり日本せまい海

島根県 今川 三津江

泉佐野市 真崎 浪速子

しつべ返し女の意地の点と線
孫が来てとんだ約束させられる
アルバムの見習士官色褪せて

寝屋川市 太田 藍子

夏休みバートの母が見送られ
子をほめた先生急に好きになり
頑固者で通した父の医者嫌い

酒田市 永沢 裕子

古里も義理のみやげが手に重い
鳩時計罪な話も聞いている
孫のこと言えはなやぐ老い二人

河内長野市 大西 文次

ハネムーンとフルムーンとが乗り合わせ
バーゲンへみんなが走るから走る
発想の転換ビールを酒にする

米子市 服部 朗子

約束をとんと忘れた長話
君が代を唱ってみたくなる平和
じつと堪えた証の花が開きます

奈良県 田中 紀美代

倅せが過ぎて独りになりたがり
寂しさに慣れてしまった影法師
花ならば少し過保護に育てよう

鳥取県 西浦 小鹿

ぬいぐるみかぶって今日は象になる

とうさんのつかみ所のない恐さ
たそがれるその手をかざし愛を知る

徳島市 宮武 まつ女

自慢にも恥にもならぬ縄をなう
傷心を抱いて夕日を背に受ける
生涯へ抱いて果てしのない対話

和歌山市 山口 三千代

頃合いになればトンビが降りてくる
知らず知らず母の足跡たどってる
子は素直に育ってほっとする世相

大阪市 今西 静子

飽食の中で幸せ見失う
外人の画が雑踏の中で売れ
眉のない女に出会う旅の朝

静岡市 小幡 芳男

父と子の内助あつての共稼ぎ
同居人猫の名前も書いてある
長寿国カルチャー勉強花ざかり

佐賀市 江口 万亀子

バザー品を出すため買いに行く親子
チャイムを押し押しし衿元ととのえる
船の旅思わぬ方に陽がしずむ

弘前市 登嶋 健治

釣り人は気長ですねと暇な人
鮎がありたで酢と美酒と美女があり

不可の無い男そんなにもてもせず

岡山県 杉本 伊久栄

言訳をしてからはめるイヤリング
降るような夜空の星に亡母を恋い
切られても意地端然とバラは咲き

豊中市 玉井 房子

タイミング外してから言う滑り台
連絡船思い出残し消えてゆき

豊中市 滝北 博史

大船に乗ったつもりを投げ出され
無理をせず一生会社の歩で終る

豊中市 滝北 博史

出世しない男魚の目つぶしてる
雨の日を孫の長靴待っている

岡山県 後安 ふさえ

惜別の肩を並べて星明り

美辞麗句ほめる言葉がはなにつく

佐賀市 古川 一徳

タクシーも昼寝している過疎の駅

保険屋が涼しい顔で寿命説く

美しく死にたい金は貯めてある

亡母の齢越せそう万歩計の私語

岡山県 土居 みさえ

コバルトに輝く海に娘と泳ぐ(沖縄旅行)

ふる里の絵には必ず母が居る

ヒョットコとオカメでいつも戯れる

鳴門市 八木 芳水

妻ついに嫌煙権を発動す
補聴器を外し世間と距離をおく
前見ても後ろを見ても独りぼち

大阪狭山市 桜井 莊次

げんまんの指から洩れている秘密
きっかけが転がっていた回り道
屋上へ先に届いていた噂

八尾市 向井 しづ子

あの世この世悲しい人が月と飛ぶ
身を揉んで菊の植替えする狂女
ばちの音合わす河内の盆の風

富田林市 大澤 三四子

切れそうで切れない姉の夫婦仲
お盆ほどまるくないけど孫の顔
西瓜には別れ話は似合わない

十和田市 阿部 進

逢ってきた眼の輝きはかくせない
情報を仕入れる先は縄のれん

馬鹿でない私は時々風邪をひく

和泉市 中川 楓

東北旅行

足元に十和田湖がありエメラルド(十和田湖)

すずやかに風鈴がなる南部鉄(南部鉄)

最上川下る景色もとんでゆき(最上川下り)

あじさいの葉陰にそつと雨蛙
山菜の味でおかわり三杯目
台風のように孫達来て帰り

静岡市 西村 千代

白髪ふえ禿げるよりましと言いきかす
おしゃべりが門の外までまだつづき
詩吟してお腹の空気を入れ替える

岡山県 牧野 秀香

紅一点呼ばれた頃がなつかしい
電話にて幸せを売るおせっかい
ドリンクも強精剤大流行

静岡市 諏訪 志げ

久方の友と出逢いの涙ふく
父を越す背丈はるかに子は育ち
気をつけて歩いていても又ころび

今治市 渡邊 伊津志

薔薇よりも寄り添う霞草が好き
顎紐を締めて激しい風に佇つ
雨垂れに海の広さは分らない

富田林市 加藤 ミツエ

音頭に合せ揃いのユカタヤーアトセー
縁日で孫が兜虫買ってくる
休閑地キュウリ三度豆良くみのり

新潟県 高野 不二

母校出場から野球好きになり
一杯の酒であつさり妥協する
のぞき込む患者へむずかしそうに書き

大和郡山市 渡部 トキワ

配色の思案涼呼ぶゆかた帯
カラフルに盛り夏ばての防止をと
素晴らしい磨くセンスは老いて尚

羽曳野市 麻野 幽玄

孫に背を押されて入る踊りの輪
スナップヘキリン足だけ入ってる
禁煙のホームに煙草の販売機

唐津市 野田 旭恒

休刊日朝の日課がちと狂い
熱帯夜疲れ切ったかよく眠り
クーラーもつけず耐えてるマタニティー

鳥取県 乾 隆風

夫という煩惱の火を消しあぐむ
嫁ぐ日を覚悟のリングだと想う
リング狩り恋思いに誘われる

愛媛県 八塚 三五島

ペン先で憎いあなたをほうり投げ
体の力抜いておんなのさからわず
夫婦風呂妻のシャボンがよく滑る

鳥取県 西川 和子

検査結果問題無いという笑顔

老人会育てたコスモス咲き乱れ
前掛をはずして自分の時になる

兵庫県 酒井靖子

自画像にちよつぱり踊る線を引く

三日月に苦難求めた鹿之助
孫連れてファミリーランドで顎を出す
藤井寺市 武部敦子

楽しみがたつぷりとある野菜園
あだ花も咲かす女のシャボン玉

静岡県 青柳金吾

この命安かったな保険金

生真面目に見れば腹立つコマーシャル

紅一点何故か美人を想像し

岡山県 後安久江

ありがとうおまけしてます菊二本

箸置の椿が揺れる軽い酔い

何時の間にか母の歩いた径をゆく

寝屋川市 北岡波留吉

新しい母が見守る参観日

傷跡を教材にして平和説く

旅の朝見送る妻が美しい

岡山県 清水悠貴女

物があふれ巷の風がひからびる

ふと触れた温い心をふところに

年輪を重ねまあるくなる姿

檀原市 西本保夫

うやむやでともかく時間切れを待つ

マンションの最上階で風を入れ

軍隊に行っていました背を伸ばす

京都市 渡辺圭坊

三日月に苦難求めた鹿之助

孫連れてファミリーランドで顎を出す

藤井寺市 武部敦子

長い髪Gパンにあう新鮮さ

野良犬は野良犬どうし恋をする

米子市 大田みさと

失敗も可愛い演技保育園

絵日記の助太刀してるおばあさん

奈良市 井上大

恍惚と不安の二つりクルート

アジサイの花影にある水子仏

高槻市 木下越子

上の子を叱ったつもりが下に効き

聞き流す振りして矢玉に取っておく

大阪市 山北三三三

遊ばない子が遊んでる黄金虫

妻の嘘うまいと思う電話口

青森県 福士トキ

男には男の世界瓶の数

ざわめきの中に幸せみつけ出し

摂津市 もちづき遊美

夕立に会い夏カゼに出会いけり

放浪の余儀無き犬の哀しさよ

枚方市 中山 おさむ

数学の知恵も試しているヒント
花開くまでをりボンで結ぶ髪

江戸前のにぎり食つてゐる大阪弁
かたつむり新幹線を眺めてる

岡山県 大石 あすなろ

京都市 山脇 正之

淋しいから見舞いの客を止めている
アメンボが池で青空泳いでる

言い負けて軽いジョークではぐらかす
その先を読んで乗つてゐる口車

茨木市 藤井 正雄

取引に一枚上手の妻と知る
鏡から私の評価が返ってくる

藤井寺市 楠 昭子

昼食をせかすりユックの重さなり
ゆっくりとバスが来ました客一人

岡山市 中嶋 千恵子

久留米市 中垣 米之

妻のアンテナを軽く見すぎた脛の疵
軽く見た坂で思わず蹴つまずき

孫が来て祖父母の座る場所がない
悩みごと打明けに来て聞き役に

奈良市 米田 恭昌

陽を吸うた布団が待つてゐる帰省子を
振り向けば御恩の深い人多し

岡山県 福原 悦子

入社一年叱られ役も堂に入り
ファミコンを叱られながら子に習い

岸和田市 三輪 通彦

裏返しても裏出る孫のシャツ
アジサイ路亡夫と行きし摩耶の山

泉佐野市 大工 静子

蟬と子の声が耳突く夏休み
暴走族が生きいきとする熱帯夜

鳥取県 木下 芙葉

勧誘のうまさに負けて保険掛け
惚けてても銭に執着けちになり

静岡市 大石 たき

船旅に洞爺の姿しのびつつ
「すみません」裸を詫びる電話口

静岡市 三井 三津子

天瓜粉おまけに鼻をたたかれる
健康が少し気になる古稀となり

大阪市 島路 太郎

美しく咲いているのにボケの花
ローマ字を飛び越えて読む老眼鏡

静岡市 柳沢 たま

八尾市 片上 英一

竹竿屋声をからして呼んで売る

はいはいと返事すれども腰重し

藤井寺市

菊地繁男

点滴の管で命がつながれる

下駄箱でおしゃべりしている靴仲間

和歌山市

岩崎瑞穂

夏休み孫と遠出がしてみたい

夕涼み派手な浴衣の妻若し

奈良県

横井都姫子

掃除機がコロツと錠剤飲み込んだ

優勝の瞬間ねらうカメラアイ

伊丹市

猪原石莊

背の低い妻へ中継する祭り

梅鉢の紋も涼しい紹の羽織

兵庫県

倉垣恵美

甘い点もろて裏道ばかりいく

ぐらぐらと短気起こせばけつまずき

呉市

岡田寿美礼

うとうとと母の夢みて故郷へ

扇風機の風にも馴れて初夏となり

吹田市

西岡豊

路地裏のすててこひとつの別天地

一泊の旅に凝ってる隠し芸

鳥取県

伊吹富恵

春夏秋冬海それぞれに顔変える

夜明け前爽やかな朝信じよう

兵庫県

西脇富美

割勘で友の絆がつづいてる
昼寝した風鈴夜へ唄いだす

兵庫県

円増貞子

盆踊り更けてなじみの顔が寄る

吾が役を済ませて田圃に寝る案山子

大阪市

平山登代

里帰り束の間の好き勝手
墓詣り先に供花が入れられて

和歌山県

田中隆積

炎暑にも涼風の吹く過疎の里
欠かせない相互信頼過疎過密

羽曳野市

福田満洲子

青田刈涼しい顔の大企業
シーソーのように眩暈と胃の痛み

静岡市

三浦つね

献血をしたい時には断わられ
若い人組板無しで暮してる

豊中市

小林一夫

水槽の大魚動かぬ原爆忌
遠雷を気にする犬と棲む真昼

島根県

児玉幸子

夏休み孫の注文また増える
盆近く孫に着せたい浴衣縫う

大阪市

柏木八重子

カラオケでストレス解消しています
夏祭り親も喜ぶ子供獅子

島根県 松本聖子

夏休み勉強合宿とは酷い
退官の友を故郷が抱きよせる

唐津市 浜本治幸

ぐつぐつと妻といびきのうらやまし
妻臥して厨房の腕あげた夫

高知市 山崎一求

アジサイに送られて出る雨合羽
新靴が足に食いつく旅行先

川西市 田中喜俊

ひまわりが咲いたら孫のスケッチに
盆暮は宅配預かる家となり

出雲市 高橋きよし

遺産分け残る借金つけて分け
常連が欠けて淋しい縄のれん

静岡市 丹羽定次

宝くじ外れて平和みんな夢
妻がいる毎日替る肌着あり

前月分 高石市 宮田純一

天井をじっとみて旅の宿と知り
散髪屋デートでつかと笑って居

島根県 菅田かつ子

上役に気合かけられしょぼくれる

口あけてシジミ暑さに耐えており

寝屋川市 豊福路子

百円の気安さで佇つ露店
棚経のけじめ僧侶をまち侘びる

大阪市 平井露芳

雑草の刈られて空地らしくなり

瀬戸大橋

橋桁を眺めただけのJR

吹田市 大沢宙宙

入浴のタオルで飛んで出る電話
反省が明日への希望に意欲わく

大阪市 堀口欣一

若狭路のみめうるわしき頬冠り
眠られぬ夜は井上ひさし読む

泉南市 坂根流水

職安は失業の意義くどくどと
暑い夏核反対のデモつづく

大阪市 川原章久

大文字人出にボヤク京の橋
北叟笑むひまわりブームの仕掛人

東大阪市 大平太一郎

感謝する人の背を見て教えられ
役得の欲を絡めたりクルート

鳥取市 武田帆雀

菊さちが優雅な人と言われ出し

晴れるやら雨となるやら鎌を研ぐ

八戸市 島田昭治

アバラ家に居ても義理だけ堅くする
父の日に電話寄越さぬ子等思ふ

岡山県 江口有一朗

アルバイト本業にして卒業す
体験で流した汗が物を言い

大阪市 平山和多留

自衛艦波は切るがしらも切る
販売をやめよ構内禁煙中

大阪市 乾哲静

思惑の株も操る金バッジ
明日は明日今日一日を生き抜けり

流山市 神田治

頭から話にならぬ禁酒党
盆休暇我が家もやつと蟬の声

岡山県 平田たけよ

又一つ許して姑の座が丸い
蟬殻も探して孫の墓掃除

倉吉市 青砥菊枝

雨続き医者まで空のせいにする
おしやべりな口も全部は話せない

大阪市 喜多佐津乃

会う度に少し頂く知恵袋
結局は里の山川を見せたくて

窓の下で土笛ならす太郎さん
秘境へ大きなリュックたどりつく

島根県 岩田三和

遊びすぎ別のストレス溜めて来る
右足が引張って行く左足

岡山県 富坂志重

川にぐる流れ山里降ったらし
お茶時へ隣から声かけられる

島根県 高橋武衛

自分史の三分の二がドラマじみ
愚痴ためて吐いてしまった嗽水

島根県 喜島ノブ

花嫁にフラッシュ攻めの披露宴(娘の結婚式)
ダイエット土用うなぎも見て通る

島根県 山田川昭子

純白のペア月下美人咲き競い
熱帯夜月下美人にみとれ涼

豊中市 額田明吉

◆ジュニアの部

化粧して素顔なくしたピエロたち
鬼よりも怖い天下の内申書

尼崎市 新井朋子 (中三)

大阪と富山のちがいが大きいな
山の中学校だけがめだつてる

尼崎市 新井晶子 (小五)

愛染帖

橘高薫風選

青森市 工藤 甲吉
 広島の鐘は鳴る鳴るダイ・イン
 原爆の日はみちのくの果ても照り
 大阪市 小出 智子
 長いことかかって橋を架けている
 冷蔵庫疲れが出なければよいが
 米子市 林 荒介
 なんべんも橋を渡って充実す
 栓抜きよちちの夜景を漏らすなよ
 和歌山市 西山 幸
 愚を生きるかばちやの面を取りながら
 従いてくる影に小さくお辞儀する
 羽曳野市 吉川 寿美
 ひよつとすればひよつとしたらで老いにけり
 藤房の淡き想いのまま古りて
 尼崎市 春城 武庫坊
 忘れ物の鞆の中にある聖書
 伎芸天歩めば秋の風生まれ
 寝屋川市 岸 野あやめ
 まだ恋を知らないらしい正義漢
 うちの人などと娘の話するとき

西宮市 西口 いわゑ
 ライバルを意識しているまではよし
 心とは裏腹にベン走るなり
 鳥取市 広本文子
 恐ろしい速さで流れゆくわたし
 愛情をいっぱい積んだトラックと
 竹原市 信本 博子
 夜の道夢ボタボタと月見草
 析つてもイブの罪持つ女です
 島根県 榑原 秀子
 星をみることを忘れた父がいる
 さわやかにさよならいえて仰ぐ月
 岡山県 清水 悠貴女
 逢つて来た余韻さわやか雨上る
 傷口を曝して母港へ戻る船
 藤井寺市 福元 稔
 あの世での座席は自由席とする
 孝行は字引の中にちゃんとある
 茨木市 堀 良江
 鐘が鳴るあの日と同じ熱い風
 時差ぼけが背から畳へ抜けて出る
 唐津市 入江 喜久夫
 昼寝する上手な祖母に下手な祖父
 叱られた弟子が手を置く膝の上
 美面市 椎江 清芳
 僕の旅自問自答が始まった
 鳥取県 西浦 小鹿
 ふところに笛月の出を待っている
 米子市 八木 千代
 指の数だけの約束ならしよつ
 高槻市 川島 颯云児

和歌山市 古久保 和子
 戦争の嘆きに歪むピカソの絵
 兵庫県 吉田 明
 何げない言葉で溝がつまりそつ
 八尾市 向井 しづ子
 手の線は軍手洗うとよみがえり
 鳥取県 新家 完司
 寂しくはないが背中を掻いて欲し
 堺市 神原 文
 駅前の広さ身に沁む一人旅
 堺市 山本 半銭
 俄雨に噴水負けていられない
 米子市 田中 亜弥
 豊かです夫と一人の鍋をかけ
 富田林市 藤田 泰子
 先みえて来てから揺れる綱渡り
 島根県 小砂 白汀
 砂糖壺一ヶ師ほどの蟻を潰け
 寝屋川市 江口 度
 いつも保護色の背景になつている
 大阪市 神夏磯 典子
 出張の鞆に妻が入つて
 流山市 神田 治
 ニコニコ顔の奴には勝てぬ二日酔
 鳥取県 土橋 はるお
 信楽狸が挑戦状を持っている
 大阪府 亀井 円女
 花は白一重咲きを愛します
 尼崎市 春城 年代
 大文字炎えて素足のほてりしよ
 西宮市 奥田 みつ子

星まつり願いは何もないと言ひ

和歌山市

堀端靖子

諦めの色に変わってゆく晩夏

米子市

政岡日枝子

許しを乞うかたちで死んでいくんだね

鳥取県

土橋 螢

スケッチブックに極楽の風景画

寝屋川市

堀江光子

千鳥足躍いてゆけぬと影思ふ

大阪府

塩田新一郎

諦観の顔も混って干し鰯

茨木市

井上 森生

嘴で殻を破って出る勇氣

大和高田市

加藤 松次郎

待合室忘れぬ過去に似た人も

唐津市

中村 順子

のら猫もヘリコプターの空仰ぐ

唐津市

久保 正敏

命令が無いと溺れるのを見てる

和歌山市

後藤 正子

宥めるように九月へ雨は降りつづく

鳥取県

松下 たつみ

髭いっぱいはやして迷路から抜ける

高槻市

小松 良

有馬筆大人も欲しいものがある

大阪府

山北 三三三

この幸せ思い出なんか邪魔になる

大阪府

北 勝美

畦道を歩くと早い母の足

守口市

森川 まさお

職人が豪快に食う心太

護身術覚えて養虫揺れはじめ

米子市

茂理 高代

ライバルが大物だとは知っている

松原市

小池 しげお

泰山木の下で本心取りもどす

名古屋市中

藤井 高子

もうノラになることも無し三回忌

高槻市

河瀬 芳子

シャガールの少女の焼いた握り飯

米子市

林 瑞枝

自由の女神のお伴にタンポポ飛んでった

岡山県

山本 玉恵

政治家の秘書に化けてた錬金師

豊中市

田中正坊

聞き流す耳をお掃除しています

和歌山市

福本 英子

見送りを日傘の君は知らず過ぎ

羽曳野市

麻野 幽玄

わたしには過ぎたおひとと知っている

和歌山市

木本 朱夏

折り返し地点を過ぎた誕生日

大阪府

山田 妙子

焦げパンを噛みしめ遠き原爆忌

和歌山市

丸岩 晏

家中の愚痴を丸めて小さい母

倉吉市

野中 御前

夕ぐれてなお祈する亡母の鈴

米子市

光井 玲子

うたかたの浮きつ沈みつ母の詩

岡山県

矢内 寿恵子

火蛾いっぴき体の芯をはなれない

平田市

久家 代仕男

雨の夜は星を食べてる天の川

堺市

井上 たかし

受話器置く計報静かに聞き終えて

和泉市

西岡 洛醉

積乱雲妻の笑顔が付いてくる

大阪市

島路 太郎

青春は遠く古びたハンモック

愛媛県

八塚 三五島

太陽を呑んで未婚の母となる

有田市

松井 かなめ

夫病み季節はずれの軸かかり

兵庫県

北川 とみ子

子には子の思いを残す風車

吹田市

栗谷 春子

女ひとり訓して月下美人枯れ

兵庫県

倉垣 恵美

割り切れぬことは片目で見ても過す

海南市

三宅 保

借金はせぬが煙草の火は借りる

枚方市

森本 節子

腹郁と部屋に香満たす月下美人

米子市

新 正子

赤い布振ってあなたの影になる

吹田市

井上 照子

白線が律し全力ふりしほる

川西市

松本 ただし

会社では偉くてうちでは眠る人

米子市

小西 雄々

飽食の海に浮いてるパンの耳

奈良県 横井 都姫子

お見舞の花の名前がわかりません

和泉市 中川 楓

もどれない自分を知ったゴム風船

羽曳野市 田中 隆二

モーニング低血圧の妻がいる

富田林市 片岡 智恵子

照明器具すてき妖怪出て来れず

和泉市 岡井 やすお

アウトセーフ脚の長さがわかれ目に

米子市 金山 夕子

夏祭り浮かれて小町帰らない

大阪府 榊本 落児

山でさえ二つ三つの顔を持つ

弘前市 波多野 五楽庵

風九月駄馬になろうかなるまいか

和歌山市 山田 高夫

砂を噛む貝を棲わす自閉症

宝塚市 丸山 よし津

電算機あるのに珠算塾へ行く

大阪市 西森 花村

しとやかにしてられませんが敬老会

町田市 竹内 紫靖

老年のアイドル宵の女性アナ

鳥取県 乾 喜与志

一等星の光を仰ぐ終戦日

寝屋川市 宮尾 あいき

片恋なら宇野千代女史にも負けませぬ

伊丹市 樫谷 寿馬

母の忌や浴衣の糊を堅く着る

岡山県 灰原 泰子

お訣れをななめに書いてさようなら

岡山県 池田 半仙

十も咲く向日葵好きな方に向き

仙台市 川村 映輝

敬老バス年はとりたいたいものである

豊中市 上田 登志実

昼寝したあとにシャワーを浴びる贅

岸和田市 古野 ひで

非を悟る涙はとても美しい

香川県 上藤 多織

藍木綿夫婦洗った歳月よ

笠岡市 松本 忠三

新盆に柳師どうしているだろう

唐津市 田口 虹汀

伝令の蟻が忙しい梅雨晴れ間

唐津市 野田 旭恒

晴耕雨読私の夢は遠く去り

米子市 沢田 千春

眠ってた僕を太鼓が呼びおこす

和歌山市 山川 克子

嫉妬心ぐっぐつ煮え湯滾ること

島根県 松本文子

あの世まで憎みたくないから許す

守口市 結城 君子

引き返す事も知ってる波の音

吹田市 西岡 豊

霊峰に逆さつりして身を清め

米子市 青戸 田鶴

雑踏に負けない声で友を呼ぶ

黒石市 相馬 一花

博覧会足を鍛えるためにあり

岡山県 萩野 鮫虎狼

節くれた指倅せな指紋持ち

倉吉市 奥谷 弘朗

野放図の上にあなたは無責任

唐津市 浜本 治幸

婦唱夫随惚けたか鍋がこげ臭い

奈良市 井上 大

アジサイもシルバー色に染まる国

富田林市 田形 美緒

会いたくもなき人に会う慕り

徳島市 宮武 まつ女

編笠を深くどの娘も絵に染まる

西宮市 松本 一郎

自然体余生演技などいらぬ

豊中市中桜塚三丁目13-15

投句先 下560 橘高薫風宛(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題「洗う」 選者 森中恵美子

締切 10月10日

(ハガキに三句以内)

投句先 大阪市東区馬場町3-43

NHK大阪放送局「ふれあいラ

ジオセンター」川柳係

発表 10月30日(日)ラジオ第一放送

午前11時5分から

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 前月号から

吐田公一

敵すべきか否かに乳房戸惑えり

田中好啓

まさに母性本能をくすぐる句。男性が詠んだ句にしては、その心理的描写を「戸惑えり」で実感が浮き彫りされている。

腹癒せに割った茶碗が惜しくなる

宇野昭代

やるせない腹立たしさに、思わず手にした茶碗を投げつけたが冷静になると——。女ならずともカッとした一瞬が悔まれる。ペテラの句。

子の城へ小石ひとつを積みに行く

高杉千歩

さすが毎回秀句抄に登場なさる千歩さんの句。いつも読ませていただいて、私の励みにしております。「小石」の意味深さ。

方便の嘘ほとぼりのさめるまで

笠嶋恵美子

お釈迦さまも人を見て法を説いたとか。ど

のような方便かは知らないが、善意から出た嘘であれば許されるのではないだろうか。

嘘一つかくすくぼに宿る露

金村青湖

別れたくはないが、別れなければならぬ立場でついた嘘。笑顔で別れるはずだったのが涙は正直。「えくぼに宿る」がいい。

自分にもある欠点をこきおろし

黒田緑

はげしい気性の方とお見受けする。自分の欠点は自分が一番よく知っている。その欠点が他人から出ると実はいやなもの。しかし通常、人はそれを口にしないものだが。

青春を飾らなかつた彩を恋う

金森知恵子

最近の老女(?)は派手になった。これも青春時代が戦時であつたための郷愁だろう。

不意の客あわてた顔を覗かれる

片平静代

今日ぐらいいは一日ゆつくりしたいと思つていた矢先へ不意の客。とり散らかしたままの座敷が羞かしい。下五が言い得て妙。

この先を考えている万歩計

久保きぬ

今日までは万歩計で行けたが、果して明日も無事に万歩計のお世話になれるかどうか、人生は一寸先が闇。

その内に長寿の税金とられそう

木下英葉

前句と対象。売上税然り。財政につまれば政府はあの手この手で税金を取ろうとする。

これは名(迷)案といえるかも。限界を堪えておんなのしたたかに

吉川寿美

これは古い女の型なのだろうか。最近の若い人は一見したたかさうに見えて、いざとなれば弱いのが実態(?)。

子に大きく越され屁理屈こねはじめ

山口三千子

子供は現代の情報時代をすばやくキャッチしている。だから何かと言えば母親の意見は古いと一蹴される。

種袋の大輪のはずヒソと咲き

安田志津

仲人口では大器晩成型とのふれ込みだったのだが。

味噌汁の冷めぬ距離にいて平和

三浦つね

最近はまだ同居が増えていそう。若い夫婦の生活力のなさ、世の中の「遊び」の風潮に打算が働いたせいだろう。つねさんのように一定の距離をおけるくらは、恵まれているといえる。

子を叱る言葉を選ぶ親となり

今西静子

これくらい的心づかいがあれば、事件は起きないのだが。

古里を捨てたか目高の群れ見えす

富坂志重

今の若い人は簡単に古里を捨てて行く。最近Uターン現象も見られるということだが。

尚香のむ

八木千代選

種の命をあずかつている種を蒔く

尼崎 春城 年代

おろそかに扱えばその種は育たないことにも。小さい種の中の限らない可能性と種を掌にしている作者の心の位置に私はのめりこみました。種にとっては一期一会の念なのです。それに気がついて詩こうとしている年代さんの心の穢りが伝わってきます。ここで自戒になるのですが、大切な花々の種ともいえる皆さまの句。今まで以上にいとしんで適切な置きかたをしなればと。心をまっさらに私なりの愛をそそぎこむつもりでいます。その姿勢を決して忘れまいとあらためて誓わずにいられます。

夕立に深い憎みはなさそうだ

大阪 鈴木 節子

ときには雷さんを連れてきて目のくらむほどの激しい雨。そのまた切り上げのいいこと。「深い憎みは無い」などと、すらすらと詠んでくださった爽やかに感謝します。空の機嫌なきげんをこんなに軽く言つてのけられる作者の心のおおらかさが好ましくて涼やかですね。雨を鬱に見えない眼が見事という外はなく、夕立の向う側はもう明るい景色だと見通している眼に拍手です。

若者は笑う わたしは笑えない

大阪 板東 倫子

山の名をひとつ刻んでから越える

和歌山 後藤 正子

三つある時計が合わぬ日の微熱

米子 小村てい子

自己満足のひとつポットにお湯が満つ

大阪 西出 楓楽

抱きしめた鳩 透明になる不安

大阪 田中 弘子

その背まで下りても母を越えられず

鳥取 広本 文子

黄昏を楽しむ本を持っている

乗り換えた舟で沖まで流される

神が決められた振り幅だと思ふ

泣いて歎いて思い直して日が終る

あいうえお学びたりないことばかり

目覚しが鳴り止んだので跳び起きる

わたくしの中にも女対おんな

ハードルを下げて自分と妥協する

ニコニコとやつと大人になりはった

昔ばなしに牛がのつては来てくれぬ

目が覚めてクツキーを買う花を買う

すぐに躓くかあさんの若い声

叱る人だアレも居なくなつて秋

まだ残る日数に甘えてはならぬ

少し狂うて少し大人になりました

深々と猿は拍手へお辞儀する

幕あいに夜明けの番茶飲んでいる

身のほどを知っているから走るのです

尻拭いきちんと出来て一人前

イエスマンそんな芝居も演じきる

飄々と酸素の補給して来ねば

ともだちを探しに行った鬼やんま

曼陀羅のロビーへひとり異邦人

糸電話プツンと切れて喪がつづく

海鳴りをきき山鳴りをきき旅終る

西宮 奥田みつ子

富田林 藤田 泰子

和歌山 福本 英子

米子 石垣 花子

松原 佐藤 藤子

大阪 本間満津子

和歌山 山川 克子

藤井寺 楠 昭子

松原 北野 久子

米子 政岡日枝子

和歌山 西山 幸

寝屋川 稲葉 冬葉

名古屋 藤井 高子

堺 山本 半銭

藤井寺 高田美代子

茨木 堀 良江

米子 新 正子

高槻 河瀬 芳子

和歌山 桜井 千秀

和歌山 森 茜

米子 林 瑞枝

大阪 堀 いくの

西宮 林 はつ絵

松江 竹内寿美子

大原 山本 玉恵

最終は天国という受験です

波うちぎわに帽子ひとつが暮れ残る

胡蝶蘭舞わせて独りナルシスト

哀しいと花屋の前に立ちすくむ

占いの本に時々ぐちを言う

堪忍袋 紐の強さを問うてみる

人生暮色茜の絵の具新にする

おろかさへ色鉛筆を削りすぎ

泣くも人生 笑える明日へ努力する

風の吹くままに動いた砂のあと

黄昏に案山子が待っている微風

月の雫あびていよいよ薫る花

トゲのあるバラを大事に育てて

人生の謎は未完としておこ

一つずつ秘密が消える棚の中

荒波を越えてきた帆は男の背

生き方が変わって眉をひきかえる

絹糸のもつれは解けぬ 妻 夫

芝居するわたしの影に酔いしれる

亡母に似た羅漢がいてと聞いてゆく

雑学の帽子をしなやかにかぶる

どう言えは見舞うたことになるのやら

幸の玉がまるすぎ転げそう

ついたちだよ神の許しが下りました

縁あって私を変えたのもあなた

寢屋川 宮崎 菜月
和歌山 木本 朱夏

高槻 笠嶋恵美子

米子 茂理 高代

西宮 西口いわゑ

米子 大塚 恵子

出雲 園山多賀子

富田林 片岡智恵子

米子 金山 夕子

守口 結城 君子

米子 川上より子

枚方 森本 節子

大阪 鍛原 千里

島根 松本 文子

米子 光井 玲子

和泉 中川 楓

岡山 灰原 泰子

和歌山 松井かなめ

兵庫 東浦 砥代

佐賀 寺中三枝子

鳥取 さえきやえ

吹田 栗谷 春子

和歌山 古久保和子

和歌山 田中 輝子

徳島 宮武まつ女

万華鏡 裏も表も見えてしまふ

ヒマワリのファイトに蜂の含み針

古傷と生きる平和のどまん中

置き薬母の呪文がよく効いて

息抜きがほしい赤い靴を履く

整形をされた金魚の悲しい眼

よぎる蝶見るゆとりなく山登る

あきらめてプランコきつくきつく漕ぐ

やんわりと母の十指にある話題

ひまわりよ貴女ほどには強くない

子育ての母の視野には広い海

戻り梅雨 心閉ざした紫陽花よ

一人芝居飽いてピエロと肩を組む

蹴落してやろう足から上る老い

理屈の差埋めるシャベルがみつからぬ

むくげ咲く夢のひと日をつつましく

雨女やっとの思いの旅にさえ

倅せな人 代役を選ばれる

苦勞掛けたと一言欲しいあの世から

平均寿命たのしむつもり夢芝居

ハガキに雑詠3句

投句先 10月10日〆切(12月号発表)

投句先 1630 米子市花園町14 八木千代

◇1月号から選者交代

投句先 1544

大阪市生野区勝山南1-18-10

小出智子

米子 沢田 千春

大阪 津守 柳伸

岡山 矢内寿恵子

羽曳野 吉川 寿美

大阪 宮西 弥生

竹原 信本 博子

米子 青戸 田鶴

鹿野 伊吹 富恵

大阪 古川美津枝

和歌山 細川 稚代

和歌山 内芝登志代

鳥取 小谷美つ千

八尾 高杉 千歩

寢屋川 平松かすみ

八尾 向井しづ子

岡山 清水悠貴女

米子 小塩智加恵

貝塚 池田寿美子

青森 福士 トキ

姫路 丁坪サワ子

句評リレー

八月号から

濱野 奇童

江原とみお

高田 博泉

高杉 鬼遊

において文学であれば、それはそれで結構だ。

エンゼルが時計の裏にきついている

林 はつ絵

奇童 時計は時間である。いつかはきつと幸せがあらうと、天使の存在を肯定した作者のひたむきな姿勢が下五に見える。賛意を送りたい。

とみお どんな立場に居る時計だろうか、仕合せに酔っている時計だろうか、苦しみに堪えている時計だろうか、時計の位置が気にかかる。エンゼルという言葉が奇麗なだけに余計戸惑う。奇童さんの評に反するが、仕合せなデパートの待ち合せともとれる。

博泉 奇童さんの評は的を得たようです。単純な私にはここまで解し難いが、少し句が動きそうに思う。

鬼遊 「エンゼル」の理解度によって、句意はどのようにでもとれる。自由な句であるがそれだけ訴求力に乏しい。時計の裏は未来に対する作者の祈りである。

奇童 エンゼルを期待しなければならぬ現在の立場。『きつ』というは、ただ祈りだけではない、それを求めて進む作者の足音が聞えてくる。

とみお 私には諸兄ほどの理解力はない。博泉 ……………。

鬼遊 十七音字の詩形においての一字はお

蟻の列機動隊など出て来ない

吉岡 美房

奇童 蟻の列は労働者の列であり、弱者の列である。機動隊は権力者であらう。税制問題で大きくゆらく国会であるが、決して蟻の列を権力でおかすようなことがあつてはならない。作者のそんな願いが下五に秘められているような気がする。社会批判の句と受け止めるが「蟻の列」と「機動隊」の組み合わせが面白いようでもあるし、少し無理かなとも思えるが……。

とみお 諷刺の利いた句が少なくなった昨今、その意味で実感のこもった表現だ。特に「出て来ない」の力強い断定に、忿懣やる方ない勤労層の声が聞こえるようだ。「機動隊」の名詞もつごかせない。

博泉 秩序正しい蟻の世界に機動隊が出て

治める必要もない。現代に於ける諷刺か。

鬼遊 労働者の集まるところで、戦間服を着た黒い機動隊の姿をよく見かける。彼らは蟻の列が呼んだのではない。勿論、仲間や味方ではない。体制を見る作者の目は鋭い。

奇童 「蟻の列」であるから「出て来ない」のである。やはり「機動隊」が重みを持つ。私の鑑賞に甘さがあつた。

とみお 集団に対する権力の目は何時も特殊なメガネをかける。蟻の列にも機動隊さんよ出勤なさつては、……そんな意味の揶揄がこの句の芯になっていると思う。

博泉 「集団に対する権力の目」という見方は出来なかつたが、確かにそう言うところえ方も出来ると思います。

鬼遊 最近すくない社会派川柳の存在をよろこぶ。この種の作品を低俗視するのは、川柳は俳句より劣っている見方と相通じる。川柳を無理にまで文学にすることはない。結果

ろそかにできない。ことは勿論のことである。カタカナ用語、つまり外来語は高々百年の歴史である。それだけに、ことは自体に重み、深みがない。作者の折角の深い思いがエンゼルによって滅殺されている。

赤いボールペンでXYZ

柳 楽 鶴 丸

奇童 こじつけて考えれば、赤い色は家計簿の赤字などマイナス要素が考えられる。ボールペンはペンなどと違って軽い感じがする。XYZは終章か？ マイナス要素をこく軽い意味でしめくつたとしても解するか。私にはどうも理解しにくい作品である。

とみお 一年生がアルファベットのお勉強そんな単純な句を作る鶴丸さんではない。だとすれば奇童さんの評が当たっているかもしれないが、川柳の普遍性の点でXYZは問題がありそう。

博泉 想定範囲を広げてみても難解な句に思える。

鬼遊 ずいぶんなげやりの句作りである。具体的内容は、ご自由に想像して下さいと鶴丸君の顔が笑っている。奇童さんの解釈でよいと思います。結局を暗示したXYZから退廃的な匂いが漂う。

奇童 ………。

とみお いろいろ想定してみたが判らない。奇童さんの句評がもしそうだとすると、随分無理な話だ。

博泉 やはり難解な句だ。

鬼遊 答の出た句は、読み手の連想や思考を拒絶されたようで面白くないが、反面、作者の視点がさだかでないのも困ったものである。作句も自由、鑑賞も自由ではあるが、対話のないのは寂しいことである。

恍惚の姑が唄うは赤トンボ

丁 坪 サワ子

奇童 恍惚の姑の郷愁であろう。ドラマを見ているようである。姑に対する作者の温かい気持も伝わってくるが「唄うは」が少し気になる。

とみお 「齢い重ねて童心に還る」と言う古くからの言葉がある。だからどうのと言う訳ではないが、着想の古さだけ目立って特別の感動がない。

博泉 恍惚と呼ばれるようになって昔の思い出は強烈。赤トンボを唄った頃が一番いい時期だったのかも知れない。確かに古いようにも思うが、上手にまとめておられる。

鬼遊 確かに郷愁である。それだけに力が弱い。母でなく姑なのがこの句の救いであり屈折した愛情を見ることができ。姑を詠い

ながら自分の未来を重ね合わせているようだ。
奇童 「赤トンボ」は代表的な童謡である。赤トンボをただの童謡として受け止めるのではなく、三木露風の心とも重ね合わせてみたい。
とみお 百花繚乱の川柳のジャンル、郷愁も結構でしょう。

博泉 ちよつと淋しい句ですが、やはり上手にまとめられた句だと思ふ。

鬼遊 川柳の底を流れるものは愛であつても、何もかも砂糖すくめでは溺れてしまふ他ないだろう。時には辛口の句を作つて下さるよう作者にお願いしたい。

指定席みにくい羽根は折りたたむ

山 本 玉 恵

奇童 列車の指定席、球場や観劇の指定席招待されている指定席等々、指定席にもいろいろあるが、大なり小なり一般席とは異った気持ちにさせられる場所である。飾るのでなく、また切り捨てるのでもなく、みにくい羽根を折りたたむのが面白い表現だった。いずれ一般席に戻ると広がるであろう羽根を。

とみお なるべく自分のみにくい一面を晒したくない、客観的なものも主観も含めて隠すという本能が働く。人間の本性を突いた佳句だと思ふ。「羽根は」を「羽根を」にすると、もつと現実的になると考えるのだが、

好みの問題か。

博泉 周囲への気配りがよく表現されている。又は自尊心が働くためのものか。中七下五の表現はうまいと思う。

鬼遊 奇童さんの親切な現実的解釈、またとみおさんの内面描写と好意ある助詞に対するご意見など同じ思いです。「指定席」からうけるコンプレックスが、この句のいのちだと思えます。

奇童 羽根はでなく羽根をに賛成します。

とみお 作者の居る位置つまり作者の思いがこちら側によく判る。

博泉 皆さん同様、「羽根は」を「羽根を」にされた方が良いと思います。

鬼遊 川柳における感情表現は、この「羽根を折りたたむ」比喻によって効果を發揮したと言える。それも上句の「指定席」との取り合わせによることを知るべきである。

泣いたから今美しいものが見え

さえき や え

奇童 「泣いたから」に凝縮された暗い過去。その体験の中からこそ見える美しいもの。

とみお よく判る句のようであるが判らない。理論的には肯定できても、心にすんなり落ちてこない。何に泣いたかは問わぬにしても、何を美しいと見たのか、具象化に今ひとつ工

夫が欲しい。諸兄の評を待とう。

博泉 泣いた体験があるからこそ、美しいものは美しいものとして見られるようになった。あるいは又、今までは素直な気持ちで見られなかったものが素直に美しいものとして見られるようになってきたと言った意味合いだと思いが、あつさりともまとめられてリズムも良いと思う。

鬼遊 博泉さんの解釈で当を得ている。欲を言えば、とみおさんの具象化となりますが精神形成の一つのプロセスと解する程度でよろしいのではありませんか。

奇童 そのとおりだと思います。

とみお 以下同文では句評にならないから一言、苦勞しなきや人情の機微は判らない、と言ったような教示めいたものが伺えて、素直に共感できない。

博泉 当事者の実感句が第三者の想定かはわからないが、作者の句意はよくわかる。

鬼遊 川柳は、標語とも違ふし、教訓でもない。とみおさんの言われる教示めいた句がないではないが、自己反省の一句として、こんなかたちがあってもよいと思う。

敗戦忌カンナひまわり夾竹桃

田 中正 坊

奇童 カンナの朱、ひまわりの黄、夾竹桃

のピンク。夏を代表する三つの花に暑さが強調される。焼土の中で迎えた八月十五日。敗戦の日が胸にうずくが、現代の若者にこれらの夏の花は何を語りかけてくれるのだろうか。名詞を四つ並べた技法が効果的である。

とみお 終戦への回顧の句、いろいろお目にかかって来た。向日葵と結んだ句が一番多かったと思う。送り仮名を使わないで主観を表現できる正坊さん、流石だと思いが迫るものが残らない。

博泉 敗戦の日が来るたびに生々しい想いに胸を打たれる人々。しかし、世間の大半は皆忘れてしまっている現代、悲しみも何もない。華々しい夏の花は見事に咲きはこつて

いる。哀愴が句の中から感じられる。

鬼遊 名詞を四つつないで何とも技巧のない句のようだが、これもレトリックである。

終戦忌といわず敗戦忌と言うところに作者の気骨がある。カンナ、ひまわり、夾竹桃は単なる花だけにとどまらない。

奇童 敗戦を体験した者には、名詞ばかりを並べた技法が効果的に迫ってくる。花に秘められた様々な想いを連れて。

とみお その通りだと思います。

博泉 名詞ばかり並んだ句でも音調がまとまっているから不自然に感じない。

鬼遊 ご意見は一通り出つくした感じに別異論はありません。ことばには深い歴史のあることを改めて知りました。

第3回 川柳塔勉強会

■ 63年8月21日・22日

■ 大井川SL鉄道と寸又峽温泉

第1日

堀端三男

8月21日午前8時24分「こだま」408号は新大阪駅23番ホームを定刻に発車した。川柳塔第3回勉強会の出発である。
西尾某主幹を先頭に、総勢40余名、京都駅で規不風さん乗車、一路浜松駅へと向う。浜



SLお座敷列車

松駅で在来線に乗り換え金谷へ。金谷駅では静岡川柳会の皆様方のお出迎えを受け、待望の大井川鉄道のスLお座敷列車に乗り込む。夏休みも終りに近い日曜日で列車は満員。車輻増結とのこと。11時45分発車。直ちにSLを型どったユニークな幕の内弁当で昼食。列車は、ときどき大きな揺れをとめないながら大井川に沿って上ってゆく。左右に茶畑が広がったと思うとトンネル、トンネルを出ると鉄橋と、専務車掌の園田摸杏さんの説明を聞きながら1時間余りで千頭駅着。それよりミニ列車に乗り継ぎ奥泉駅着。今度はバスに乗

り換え寸又峽温泉に着いたのが3時前である。今朝6時に和歌山を出て丁度七回乗り継いで到着したことになる。

大井川鉄道は、当初から私鉄として開通、ミニ列車は、昭和27年中部電力の電源開発の資材運搬用に敷設され、ダムの完成とともに昭和34年大井川鉄道が買い取ったとのこと。

旅館に着くと、今朝からの疲れを取るため温泉に入り小憩。午後4時より、当旅行のメインである勉強会を開始。会場は、旧小学校の校舎を利用した地区公民館を借用する。司会進行は武庫坊さん。出句締切4時30分のこと、会員は湯上がり姿ながら当日雑詠の作句に真剣である。柳話は、黒川紫香さん。「旅の句」について。川柳塔の先生方の例句を引きながらのお話で一同感銘を深くする。その一例を記すると

遠く来て信濃に山の無い日なり 路郎

一歩出すれば我旅人となる心 栗

おらんだ坂観光の群れにすりつづれ 生々庵
砂丘有情お前と月の出を待とう 薫風

梓川焼岳穂高陽を競う 水客

最後にご自分の「旅の句」は、しんぐう吟社の「みかん」に、北から南まで連載されているが、今回は北海道だけに

利尻富士裾野は海へ突き抜ける

スコトン峠トドも日本の先で住む

宗谷峠ここが日本の北の北

等を披露され、時間の都合で披露に入る。

当日雑誌は西出楓葉さん、兼題「茶」は永倉僕川さん、「鉄道」は田中正坊さん、と順調に進み、六時前喝采裡に終了する。

公民館から旅館へ帰り、第二部の懇親会に移る。司会は天笑さんがバトンタッチ。葉さんの挨拶、太茂津さんの乾盃の音頭で宴に入る。暫く喉を湿してから司会者の紹介により順次自己PR。流石川柳人の集い、要領よくスムーズに進む。一巡後、静岡川柳会の僕川さんが、歓迎の意を込め、玄人はだしの手品で余興の幕が開く。カラオケ、ダンスと時間を忘れ盛り上がり、最後は、薫風さんの音頭で川柳塔、静岡川柳会の万歳三唱をして一日目の幕となる。

2日目

春城年代

早起きが苦にならず、足に自信のある人は午前六時から「夢のつり橋」へ出かけることになった（私はとてもとても）

さすが紫香さんは娘さんと孫さん二人共々涼しい顔でお帰りの湯として聞こえた又峽温泉

美女づくりの湯として聞こえた又峽温泉

（さてきれいになったやら）をあとにして路線バスに乗ること約三十分ほどで奥泉駅に着く。

昨日のミニ列車に乗り込んだが、夏休みのことで一般の客と子供連れが多く、やっと座れた。おもちゃのような列車井川線は窓からの風だけが頼りである。しかし奥大井の溪谷美は素晴らしい。窓外に見る接岨峡は二、三年あとのダム建設と共に水没する運命にあるそう。すでに溪谷のなかに路線変更の橋桁が建っていた。

トンネルまたトンネルを抜けて、井川発電所の豪快なダムの水流に目を見張る。

井川駅で下車して昼食をとる。駅の周辺で思いおもいに座る場所を求めて、汽車弁当を開く。

まもなく大井川鉄道のバスに乗る。

バスガイドさんの手慣れた案内と、さすが川柳家の集まり、なかなかやりとりが面白い。バスは井川林道を一路静岡に向う。と言ってもこの井川も静岡市に入るそう、その広さにおどろく。

先日来の雨で山崩れが処々にあり、一方の路肩も崩れているので思わず悲鳴をあげる。

復旧現場はせまい路を更に狭くして対向車と道を分け合っている。急カーブの林道を縫う

岸和田市文化祭参加

第38回市民川柳大会

日時 昭和63年10月23日（日）正午開場

会場 岸和田市自泉会館

（市民会館東へ五〇米）

おはなし

兼題 図 星

すいすい 西田 柳宏子

親 切 河内 天笑選

許 切 谷垣 史好選

看 板 小出 智子選

贈 板 梶川雄次郎選

席題 当日一題 阿萬 萬的選

兼、席題共各一句（出句は出席者に限る） 野村太茂津選

限る） 板尾 岳人選

会費 五〇〇円（大会誌呈）

賞 文化祭賞、文化奨励賞、文化協

会賞、操子賞、きしせん賞

主催 岸和田川柳会

連絡先 岸和田市土生町一九八九

高橋 操子

電話 〇七二四（二）〇〇四九

ように走るバスに気分が悪くなる人も数人出る。期待を裏切って富士見峠の富士山は見えず、西河内川の溪流を右に左に見てバスは静岡に向ってくだってゆく。

安倍川の本流に沿って市街地に入り、お茶の製造工場を見学して、やっと一息ついてから車に酔った人達を静岡駅へ見送り、再びバスは日本平を目指す。展望台も視界が悪くて

ふれ合いの記

渥 美 弧 秀

「静岡の人びと」との文章が掲載されている川柳塔（七十一号）に「あつあの方だ」と気付くのと同時に先方も手を上げられた。紫香師との出会いが始まる。

「薫風さん一べん静岡の弧秀さんここへ行きまひよか」と、ずい分前から誘われているとの絵葉書をいただいたのは、二年前の「子供の日」。

金谷駅で勉強会の一行をお迎えした折、先に「弧秀さん……」と言われた編集長

残念。帰路、海岸線に沿って登呂遺跡に立寄る。登呂公園の樹のかけに比翼の句碑があり、

月とある窓のひと時 真人間 竹林
おもいでのとこにもそばにうちの人の人

柳葉女

大正から昭和にかけて活躍した夫妻で、少し離れて佐々木信綱の歌碑もあった。

静岡駅で、小半日を案内して下さったベテ

の人の柄に初めて接する。

私が音楽と生活していることを知ってか、寸又峡の宿で、未完成交響曲（川上

三太郎氏）十句を有難くいただく。

SL車と井川での昼食は、鬼遊氏と同席になる。地酒を酌み交しながら雑談の中で、氏の反骨精神を知る。はじめて聞く脇取の声のすばらしさ。私も率直にものが言える鬼遊氏である。

和歌山の太茂津氏は、昨年、紫香師等九名で寸又峡を下見に来られた折、静岡川柳会で「茂」の選評をされた。図らずも天位に僕川氏が選ばれた。会員も、いただいた「川柳はまゆう」を活用している。

ランガイドさんと別れ、駅構内で参加者一同夕食を共にした。

二日間私達とご一緒して下さった僕香さん静岡川柳同好会の僕川さん、弧秀さんその他の方々のお心尽しに厚くお礼申し上げます。

涼しさを期待した寸又峡は思ったよりも暑かったが、帰りついた大阪の晩夏はもっときびしかった。

第三回川柳塔勉強会が本県、寸又峡で行なわれたことは、静岡塔の会員として

誠に光栄であり、得たものも大きい。

お別れのバスの中で、栗主幹の心をこめたご挨拶に感動し、私は「シャローム（さらば）」を歌い出した。又の日に皆さんと歌い合いたい。

この勉強会ではじめて大井川鉄道の猿杵氏と会う。ガイドさんの巧みな案内に安心する。

塔旗を掲げる世話人のご苦労。紫香先生のお孫さんを含めての川柳塔の皆さん。明るく温かい心情にふれあうことが出来た。この尊い絆を大切にペンを擱く。

袈裟と盛遠

布施 幸子

「ワタナベさんのルーツが消える」と話題になった「渡辺町」は、また「エンドウさん」のルーツでもある。

中世大阪武士の典型としての「渡辺党」には二つの流れがあった。一つは渡辺氏、十世紀後期から十一世紀はじめにかけて、摂津源氏の頼光に仕えた渡辺綱に始まるもの。他の一つは、ほぼ同じ時代の遠藤為方^{とほふかた}に始まった遠藤氏である。

両氏は渡辺党として団結し、大渡辺とか窪津とよばれた淀川口辺を本拠地として、摂津や河内の行政を支える軍勢力となった。また、中央政府や貴族が必要とする馬の牧場を管理したり、瀬戸内海の物資輸送にかかわったりして、近畿一円はもとより、遠く九州方面にまで勢力を誇った。

渡辺党の本拠地には、渡辺、遠藤両氏のシンボルともいえる「渡辺橋」があった。昔の渡辺橋は、天神橋から八軒家のあたりにかかっていて、熊野詣での陸路の起点ともなった重要な場所である。

渡辺橋の安泰をねがうての橋供養は、一族にとって大切な行事で盛大におこなわれた。袈裟御前と遠藤盛遠の悲劇は、その橋供養の日にはじまっている。

その日、盛遠は奉行として参加した。

紺濃淡の直垂に、黒色おどしの腹巻、折烏帽子をかぶり、太刀のさやや銀で巻いてある。十八歳のりりしい若武者ぶりで兵士の指揮にあたっていたが、ふと参列者の方をみると、十六、七の美しい女性が目についた。それが渡辺渡夫人の袈裟御前だった。

袈裟御前は、早く父をなくし、母の衣川とともに京都へのはつて、鳥羽の小枝^{こえだ}という所で暮らしていた。

盛遠とは、いとこ同士の間柄で幼いころはよく遊んだ。「まあ、仲よしだこと。袈裟は盛遠さまのお嫁さんになるといいわね」衣川が言っていた言葉が、昨日のことのように盛遠の頭によみがえった。

これが不美人だったなら、たとえ結婚を望まれたとしても「あんな昔の口約束、冗談だと思って忘れてましたよ」とかなんとか、うまく逃げるにちがいないが、幸か不幸か、袈裟御前は花と見まがう美しさである。そうして、すでに人妻というではないか。

盛遠はつくづく恨めしく、「固い約束はもうなかったのですか」と衣川につめ寄った。そうして「なにがなんでも袈裟御前を私の妻にしてみせます。でなかったら衣川どのの命を

文化祭

吹田市民川柳大会

日時 昭和63年10月30日(日)午後1時
場所 市民会館1階集会室
吹田市出口町4-1

電話06(388)7351

宿題

「素顔」 神前 阿字選

「油断」 黒川 紫香選

「仕草」 西川 景子選

「しぶちゃん」 中尾 藻介選

「余裕」 亀山 恭太選

席題 当日一題 竹森 雀舎選

各題2句 締切2時 投句拝辞

会費 一、〇〇〇円(粗品呈)

◎お食事会 当日11時より同会場。希望者は10月10日迄に事務局へ。

会費二千円

〈事務局〉吹田市清和園3-8

電話06(388)1437

園田 文字

頂きます」と母娘をおどした。

この盛遠は、「心しぶとく声高にして、親の教訓をも聞かず、人の制止事をも用いず」

思いこんだら命がけという荒々しい気性の持ち主だった。

それを知っている袈裟御前は、「いたしか

たありません。私を妻にしたければ夫を殺してください。今夜、夫にお酒をのませ、髪を洗わせて寝かせますゆえ、ぬれた髪をさぐって、首を討ってくださいませ」と言った。

盛遠は喜んで、夜になるのを待って袈裟御前の屋敷へしのびこんだ。そうして、闇の中にぬれた髪をさぐりあて首を討ち落とすと、着物の袖にくるんで家に持ち帰った。

ところが、持ち帰った首をあらためてみて、へなへなとその場に坐りこんでしまった。ショックだった。首は渡のものではなく、悪いこがれた袈裟御前のものだったから、悔いと失意と恥ずかしさに身をさいなまれ、盛遠は渡の屋敷に出かけて事の次第を話した。そして袈裟の貞節を物語り、自分を討てと覚悟を示したが、渡は盛遠の心のうちを察すると斬ることもできず、出家をすすめ、渡自身も仏門に入ることをきめた。ともに袈裟御前の菩提をとむらいたいと思ったのである。

出家した盛遠は、袈裟の墓を守って、三年の忌を終えるまで、傍らの草庵で念仏を怠らなかつた。

その後は、大峯、葛城、高野、白山、富士、戸隠、羽黒など『日本国中のことごとくなく』霊場をめぐる修行し、文覚上人という傑僧となった。

高雄の神護寺は、扉は風にたおれて落葉の下に朽ち、いらかは雨露におかされて、仏壇さらにあわれなり」と住持の僧もないほど

のありきまだったのに、文覚上人によって立派に再興されている。

だが、「三つ子の魂百まで」とか、おとなしいお坊さまに甘んじることではできなかったようだ。思い立ったら命がけ、でたびたび事を起こしては、老年になって遠島となつていく。

文覚上人が袈裟のために建てたという『恋塚』は、鳥羽の恋塚寺にある。袈裟母娘が住んだ『小枝』がなまって『コイツカ』になったとか、池に鯉がいて『コイツカ』になったとかいわれているが、私にはやはり『恋塚』が好ましく思われる。

『秋澄』

河津武俊著

漂泊の芥川賞候補作家・岡田徳次郎(柳号・某人)の波乱の生涯を関係者の証言で綴る感動のノンフィクション・ノベル

定価 一、三〇〇円

発行所 講談社

書店でお求め下さい。

第15回堺まつり協賛

堺市民川柳の会

とき 昭和63年10月16日(日)

午前11時開場

ところ 堺総合福祉会館 4階大広間

おはなし 「祇園と祇園精舎」

題

「夜」 藤井一二三

「器」 河内 天笑選

「砂」 重谷 峰彩選

「男」 高橋 幸代選

「鳥」 半井 甘平選

「船」 西川 景子選

「山」 墨作 一郎選

「西尾」 栗選

昼食呈・各題二句・出句締切午後一時

秀句呈賞・投句拝辞

主催 堺川柳会

連絡先 堺市堀上緑町二丁九一

河内 天笑

電話 〇七三二一七八四七〇六

初歩教室

題 — 方 角

阿 萬 萬 的

方角という課題に対して、どなたも思ひ浮ぶことは同じようで、地下鉄や地下街を出て方角を見失った句が大変沢山ありました、その内二、三を

地下街を出て方角に迷う母

光 子

地下道の迷路抜け出てきてどちら

晏 児

地下鉄を出たら南が北になり

照 子

四つ辻に出て方角を見定める

しんじ

この外沢山ありましたが、結局のところ

しんじ

馴れてこそ方角もある地下の街

しんじ

次に多かったのは縁談で……

三津江

方角もよし相性もよい話

遊 光

方角が良いと縁談せかされる

サワ子

(方角もよいと仲人如才なく)

しづ子

縁談へ方角などと言う明治

登 代

方角が悪いと縁談断わられ

登 代

方角は縁談断る口実に

登 代

(方角を口実にして断る気)

登 代

方角についてこたわって迷い出し

太一郎

方角を気にして老いのおせっかい

静 子

(老婆心乍らと方角気にしてい)

竜 児

方角が悪いと姑のかつきぶり

志 重

(方角が悪いと姑は譲らない)

志 重

何につけ方角言う祖母言わぬ母

志 重

(方角を気にする祖母と気にせぬ娘)

志 重

だがね新人類には通じにくいもので……

遊 峰

方角の良くない釣書娘が選ぶ

遊 峰

(新人類その方角は気にしてす)

遊 峰

方角は凶でも恋はノンストップ

菊 枝

(恋は盲目方角などは気にしない)

菊 枝

巽よしお江戸時代じやあるまいに

香 子

鬼門には納得しない子の疑問

時 弘

とは言ってもお年寄はそう簡単に割切れず

喜代子

病み上りよい方角へ転宅し

喜代子

転宅の方角気に病む老夫婦

喜代子

方角のよしあして決めた祖母の旅

正 之

下五亡母の旅でなく祖母の旅にしたら

正 之

方角の意見が合わぬフルムーン

章 久

我が家を建てるときは、とも角方違神社や

章 久

城南宮にお参りをして……

章 久

迷信はどうあれ方除けして貰う

結 美

方角の神のお告げが家を建て

結 美

(方角もよし棟上げの日を決める)

結 美

方角最高美築な住まい出来ました

ミツエ

羨ましいですね。私ならさしすめ

ミツエ

(方角はよしささやかなマイホーム)

ミツエ

豪邸は鬼門にちゃんと門があり

遊 峰

(豪邸の鬼門にちゃんとある祠)

遊 峰

手付金その気にさせた南向き

三 倉

南向きの居間でくつろぐ老夫婦

芳 水

(南向きのはなれを息子が建ててくれ)

芳 水

だが都会生活ではねえ

志 洋

方角はとやかく言えぬ土地事情

志 洋

方角は気にせぬ繁華街ど真ん中

保 夫

地価高く方角などは言つとれず

好 笑

方角など言つておれない団地族

露 芳

(恵方鬼門言つてはおれない町に住み)

露 芳

サラーマン生活にもちと悪い方角が

しんじ

方角が悪い戻りの飲み屋街

しんじ

我が家への方角怪し千鳥足

志 洋

掃果力だけは確かに千鳥足

隆 雄

人生航路の方角にも色々ありまして

隆 雄

家継がず方角違ひに行く息子

義 男

七光り出世街道の方角へ

義 男

(出世街道の方角決める七光り)

義 男

一人だけ方角違う道を選ぶ

美 子

奔放に生きて方角見失ない

美 子

そして人間、欲につられるとかく……

美 子

財テクに明けくれば方角見失ない

美 子

とんだ方角欲に迷つてリクルート

美 子

方角を違え踏み込むものの道

美 子

獣や鳥にも掃果性があつて方向違わす

美 子

渡り鳥方角違えず又おいで

和 多

(方角違えず今年も燕来てくれる)

和 多

渡り鳥決して方角誤たまぬ

和 多

北南どつして知るのか渡り鳥

和 多

北斗星などにかまわず雁渡る

和 多

(帰巢性とは言へ見事な鳥の勘)

子を産みに方角探す母の川

(母川回帰蛙ふる里の川へ向き)

働き蜂一直線に花の園

仲間から外れて小鳩帰る巢は

(仲間外れの小鳩も忘れず巢へ戻る)

だのに人間様には方向音痴な人も居て

手放しの方角音痴は親譲り

(親譲りの方向音痴でつつがなく)

出不精は方向音痴のままで老い

夫婦共音痴で行先解らない

(夫婦共方向音痴で雨に逢い)

旅の句がありました。

駅員に滝の方角聞いて出る

朝焼けに方角を知る旅の宿

塩風に海の方角教えられ

霧晴れて方角を知る御来迎

方角を知らせる灯台はつとさせ

(霧笛あやしく竜飛岬はあのあたり)

ガイドの手自在に客の首振らせ

(ガイド指さす方へお客の首が向き)

だが秋の独り旅ともなると感傷的で:

流れ星流れた方へ明日の旅

方角を定めぬ落葉について行く

織姫の輝く星に明日を聞く

方角音痴困った時は星に聞く

雲が行くあの方角に好きな人

憧れはあの方角と鳥育ち

文字盤の汚れた磁石で旅に出る

遊光

勝美

美子

章久

美恵子

圭坊

繁男

金吾

小鹿

金吾

美恵子

和子

信義

好笑

明吉

喜与志

保夫

章久

信義

方角に目線を遣れば仁王門

(仁王門その方角に夏の雲)

そして故郷の方角はとかく気になるもので

ふる里はこの方角と指をさす

矢印の方角にある亡母の海

方向を揃えて流る盆灯籠

(精霊流しみんな同んなじ方へ行く)

人生いたる所青山あり、そして少年の眼は

少年の方角海へ向いている

太陽の方角へ矢を向けて見る

だがお年寄の見た方角は淋しいですね

方向音痴の亡母にあの世の地図がない

方角は弥陀に任せて迷いなし

方角も知らぬところへまだ逝けぬ

逃げ道を羅針盤から貰い受け

方角が悪い浮浪者場所を変え

(方角が悪い浮浪者をさへ移動)

ここでベットや虫達をじつと眺めてみると

獲物とする方角へ猫鼬を立て

方角を選んで猫を婿に出す

蝸牛知らないままで西東

方角と言えは恵方とか鬼門が気になるが

方角などにこだわらねえん好きな人

方角が悪かろうとも戻れない

東から良き来客が当らない

(恵方から良き来客とは限らない)

八方塞がり鬼門の方に見た光り

方角はよいのに運がつかめない

(方角はよい筈なのに運がなく)

太一郎

三倉

多織

晏

多織

小鹿

多織

喜与志

富恵

喜与志

トキ

小鹿

都姫子

三津江

正子

照子

みね

香子

菊枝

すみれ

つえ子

方角も易者によつてずれがある

鬼門にはあれこれ言われ塩を撒き

地方にはそれぞれ風習があつて

北を向き食べるコンニャク庚申さん

(庚申さんのコンニャク北を向いて食へ)

ここだけは上り下りの京言葉

四方拝昭和一桁しか知らぬ

では最後にもろもろの方角を。

方角を示すホームを杖が撫で

(方角示すホームを白い杖が撫で)

全方位外交笑顔を示すだけ

(全方位外交笑顔の眼が動く)

三十年靴は方角忘れない

東西南北別れて嫁ぐ四姉妹

留守番の子が指をさす鉄の音

方角はともあれライバル走つて

面舵に変わる祖国へ気が重い

口車に負けて方角見失ない

赤い線たれば怖い検査室

類想の句はとかく新鮮味がうすく句会など

では没になり易いものですから氣をつけて斬

新着想を選んで頂きたい。では又来月号を

期待しています。

題「結ぶ」 10月10日締切(12月号発表)

ハガキに5句以内

「雪」 11月10日締切(1月号発表)

宛先 千598 泉佐野市中庄一〇八一九九

阿萬 萬的

計算

松高秀峰選

万引きも計算に入れ大バーゲン
 損得の計算早い現代っ子
 大声で計算抜きとバナナ売り
 手の指がもつと欲しいと孫は言う
 計算の下手な夫婦で丸く生き
 カロリーも計算妻の料理メモ
 計算に弱い女の軽い口
 算盤は下手な子でした立志伝
 コンパスで計算している通勤路
 計算にも強い三児の母なれば
 年金の計算ぬるい仕舞風呂
 計算をしながら食べる味気なさ
 計算はない故里の宅急便
 倅せの答えが出ない計算機
 血と汗の量が計算できますか
 計算の狂った稲を刈っている
 おごられたつもりの方に計算書
 また桁が間違いました計算機
 紅一点はずし計算して集め
 計算で白黒つけて溝が出来
 暗算ですむのに電卓出して来る
 計算の読み甘かった一票差

現代っ子計算ずくのおつき合い
 半分は計算ぬきの稲の花
 式典へ計算通りのご到着
 ストレスへ計算ずみの安い皿
 計算はまずいががちり貯めている
 お天気はとても苦手な計算機
 計算が親子で違う未来像
 計算の高い女でまだひとり
 いい娘だが計算高いが玉に疵
 犬だつて計算ずくで尻尾振る
 目分量計算のない母の味
 計算を度外視男の心意気
 縄電車計算通りに走らない
 あまりにも計算好きで嫌になり
 計算は抜きで手を貸す友がいる
 佳
 計算機が苦手年汗をふく
 計算になかった涙が出て困る
 議事進行計算ずくめの進め方
 計算は秘書に任せていた脱税
 計算と大分違った八合目
 人
 計算は苦手結構儲けてる
 遺産まで勝手に計算する他人
 地
 計算のない友情の温かさ
 軸
 計算がすぎて財テク罠に落ち

七光り働き易い職に就く
 上座には働き少ない人が着き
 プライドが働く場所を狭くする
 働いた金は銀行から貰い
 啄木の働いた手を見てみたい
 お茶飲んでいても実働八時間
 働きの悪い奴程文句言い
 尻理屈は後でとにかく働こう
 母ちゃんが働きだしてからグレる
 働いて生きるになんの付けばくろ
 厚化粧これも働くためのもの
 働き過ぎですと言うては呉れぬ妻
 退職金半分妻の働きよ
 働きの妻でわが家は保っている
 働ける五体が俺の宝物
 働いた天秤棒をば家宝にし
 働きを止めると匂う怠け癖
 働いて辞めたら次々出る病氣
 病む友に働く姿うらやまれ
 過労死が働きすぎに鈴つける
 割り切つて働く決意を買ってやり
 労働を質にローンの家を建て

働

井上柳五郎選

遠

い

斉藤 嘉選

薬束も視野におさめて遠泳中
千秀
耳も目も老兵いつしか遠くなり
雄々
遠くまで使いに出した紙の舟
荒介
財テクの夢ほど遠い日銭追う
朴竜
思い出は遠いほどよい空の青
枯梢
遠縁の男が仕切る通夜の席
一花
こんなに遠い道を背負ってくれた母
素身郎
糸電話遠のく耳にある響き
文平
遠い日の母の私語聞くつげの櫛
静子
サーカスの象の瞳にある遠い空
兼治郎
タンポポの命は遠く飛んで生き
あやめ
この膝を子ら競いしも遠い日々
玉恵
遠まわり今宵もさせる青い月
重人
写経千回まだ遠い無の心
虹汀
遠雷も嫌いな父の露天風呂

片べりの靴が知ってる棒グラフ
純子
アルバイト別の私にも気がついた
四郎
よくもまあ働き通した足の萎え
荒介
働いた手がしゃべり出す泣き笑い
和子
働いた先祖に済まない田が売れる
鮫虎狼
札服は汗の香滲みる野良着です
枯梢
農を継ぐ働き盛りに嫁不足
進
働けるうちとはと老父の銀光る
美代子
地下足袋を履けば働く詩になる
テル
働いたあかし写真の鮎八等
鉄治
忠節へ働くかされた青春譜
繁男
団欒へ働く父の溶ける笑み
文平
働いたあとで呑むから美酒となり
三和
厚化粧これも働くためのもの
兼治郎
働いています何処でもいいでしょう
忠三

佳

働いた色を着ているペンキ職
正敏
働くが趣味とあつさりぬかしたり
弘朗
キヤッシュカードが働きもので困る
富恵
健康のため働く齢になり
典子
働いている顔にならほれて見る
不二

人

定退の父の背中にある誇り
公一

地

農政に怒りながらも鋤ふるう
正坊

天

働いた汗で男の顔を彫る
砥代

軸

天職と働き過ぎがすこし呆け

遠い夢たぐり無人の駅に立つ
遊峰
遠ざかる人追いかける雲一つ
太郎
ある日ふと夫が遠い人に見え
倫子
旧姓はかすみの彼方姑で居る
高田
我慢する拳は遠いとこへ置く
佳雲
風鈴の音が遠くなる昼下り
どんたく
白足袋のよごれ遠くからの母
早苗
戦友の屍を焼いた遠い日よ
新造
矢印を行けば無難な遠廻り
美代子
ほほ笑んで遠い昔を語らない
緑良
遠い国の飢えを知らないグルメ皿
正敏
冷凍魚が夢見る遠い北の国
京子
レ・ミゼラブル遠い昔のパンの味
照子
免状を重ねて縁に遠くいる
鉄治
振り返る信濃路遠く野火を焼く
落児
容疑者は遠い故郷へ足が向く
白漢子
時どきは遠出もしたい車椅子
通彦
水子仏遠い記憶も風化せず
多賀子
遠来の友へ逆算する月日
寿美
遠く住む小さな母の背に詫げる
森脇和子
遠景の視野に子を見て黄昏れる
奈美子
夫婦箸 均等法に程遠い
進

人

腕白の思い出遠い水鉄砲
清芳

地

ひまわりにふと覗かれた遠い思慕
可住

天

遠き良き時代に酔うている寮歌
正坊

軸

青りんご遠くに想う友ひとり

柳界展覧

集録一敏・武庫坊

ところ 陵南の森公民館

宿題 歯・引く・野・市

場・眠る・川・柳

貝・十・年

(選者交渉中)

★地域レディーがつくる情

報紙「フアサード」大阪

市北区に編集室に、川柳

藤井寺の作品を掲載。

★第30回倉吉文芸賞

淡路ゆり子・山本善政

の両氏に。

★「川柳いずも」誌No.202は

堀江正朗・中川幸一・園山

多賀子の三氏(本社同人)

の喜寿祝賀川柳大会特集号

として発刊。

★「川柳新京都」九月号は

創立十周年記念号として特

集号を発行。

▽同人・誌友消息△

★「川柳宮城野」誌八月号

「川柳アラカルト」欄に次

の五人の句を紹介。

石捨てにゆくなら水のある

川へ

花束と一人娘を引き替えに

与根一

りんごの皮一里も剥いて津

軽春 一人旅解放感と孤独感

登志美

水裏の底に沈んでいる余裕

重人

★正本水客氏(大阪市・本

社相談役)は「きたぐち」

誌No.165の「西北の風」欄に

執筆。

★第40回西日本川柳大会で

水粉千翁氏(倉敷市・本社

同人)は、多年の表紙画制

作に尽力した功績により、

弓削川柳社から表彰された。

また、江原とみお氏(鳥取

県・同人)は、同大会で第

二部一位の岡山県知事賞、

林荒介氏(鳥取県・同人)

は、久米南町商工会長賞を

それぞれ受賞された。

★辻文平氏(兵庫県・同人)

は、「路」誌九月号の課題吟

の選と選評を担当。

★本田恵二郎氏(倉敷市・

本社参事は、「ますかつ」と

誌九月号の「川柳女心と男

心」欄に執筆。

★二宗吟平氏(岡山県久世

町・本社理事)、山本玉恵氏

第2回 堺市民芸術祭川柳大会

とき 昭和63年10月2日(日)13時開場

ところ 堺市立樫文化会館3F

堺市桃山台2丁2番1号

(東北高速鉄道「とが美木多駅」下車、改札を出て左へ3分)

おはなし

宿題 「柳」

「寺」

「丘」

「鉄」

「ガラス」

「風車」

各題2句

参加費 千円(作品集、参加賞呈)

主催 堺市文化団体連絡協議会

堺市文化団体連絡協議会

堺市文化団体連絡協議会

堺市文化団体連絡協議会

堺市文化団体連絡協議会

堺市文化団体連絡協議会

堺市文化団体連絡協議会

堺市文化団体連絡協議会

堺市文化団体連絡協議会

堺市文化団体連絡協議会

堺市文化団体連絡協議会

堺市文化団体連絡協議会

堺市文化団体連絡協議会

堺市文化団体連絡協議会

堺市文化団体連絡協議会

堺市文化団体連絡協議会

「駅」は、病床で選をされた由。地元篠山町の柳友多数が告別式に参列。

▽お便り△

■本田恵二朗氏（倉敷市）

瀬戸大橋博の郵政館の片隅に在るミニ郵便局内の片隅に、写真の通りの川柳ポストが設置されています。私の提案が採用されたわけです。ハガキに「橋」という

題吟三句を書き投函します。博覧会の終期に私が選評などとしてご本人に返送。佳吟

には郵政館から賞が贈られます。

■橋高薫風氏（副主幹）

上高地に来て穂高連峰を仰ぎ、梓川の流れを心ゆくまで眺めています。

■山内静水氏（竹原市・参事）昨年夏以来元の元氣は



ありませんが、それなりに頑張っています。

■森井善居氏（竹原市・同人）九月十七、十八日に横浜で開催の第30回全国郵政

川柳大会の選者として出席予定。小島蘭幸君も中国ブロックの理事として活躍中です。

▽新刊△

★大野風柳講演集「五・七・

新同人紹介

吉 川 寿 美

— 薫風・智子・白水・吐来・敏推薦 —

五のこころ」

B6判・二三〇頁

定価千二百円 千二百五十円

申込所〒956新津市美幸町3

14-16 柳都川柳社

▽訂正△

★本誌九月号87頁一路集

「隙」の天位の句の作者は

矢内寿恵子さんです。謹んで訂正致します。

大会川柳畿近記念80年創立傘番

日時 昭和63年11月27日（日）午前11時開場
会場 太閤園（大阪市都島区網島町9-10）

地下鉄谷町線「天満橋」下車東へ
JR環状線又は京阪電鉄「京橋」下車西へ

◎記念式典 同人歴45年以上の同人を表彰

◎講演 「話上手で心をつかめ」 浜村 淳氏

◎句会

席題 「道」 古川 一高選
志水浩一郎選

「戦（いくさ）」 田頭 良子選

「トップ」 玉野可川人選

「弾む」 去来川巨城選

「客」 西尾 栞選

「漫画」 奥田 白虎選

（事前投句）「傘」 磯野いさむ選

※事前投句は所定用紙に記入、10月31日必着、番傘川柳本社へ。

※各題2句締切12時30分 欠席投句拝辞

◎会費 一、五〇〇円（昼食・記念品呈）

◎懇親パーティー 八、〇〇〇円（予約制）

主催 番傘川柳本社

嗚呼!! 脇田米朝さん

遠山 可住



8月24日夕6時30分、米朝さん逝去の報が入る。

大正4年生れ享年74歳、少し

急ぎ過ぎた浄土への旅路である。

柳歴はまだ浅くて、七、八年。ささやまの大先輩河原みのる氏に誘われて入門、以来めきめき頭角を現し、薫風、紫香、武庫坊先生らの推せんを得て川柳塔同人となったのはつい最近のことである。

“川柳”こんな人生があるなんて知らなんだ少し遅かったけど、おかげですばらしい余生をおくらせてもらった。これが米朝さんの口ぐせであった。

氏の青春は軍国時代、幹部候補生として兵籍を志し、満洲ノモンハン事件にも銃を執った陸軍大尉の勇士である。戦後は家業の農業を継ぎ、2 ha余の当地方では大経営者として

専心土に生きた人生は、おそらく横をふり向く暇とてなかったと想像される。

子供さんらの成長と共に漸くホッと心安らぐ時、そこに川柳との出会いがあった。以来丹波の特産である山の芋と黒豆作りを担当する傍ら、川柳の道へ足を入れ、今までのおくれを取り戻すかのように、その足どりは速くドンドン先人を追い抜いて行つた。

子供がプレセントしてくれたという新築の閑居。床の間には恩師、無鬼先生の達筆で、“衝突なとしやがれと思う程飛ばし”の掛軸が静寂を誘い、入口には葉先生から贈られた“人恋し人わずらわし波のおと”を染め抜いたのれんが掛かる。庭に目を向ければ塩満敏先生の紹介があった句碑「潤いが心に滲みる故郷の味 米朝」が小じんまりと坐っている。縁側のガラス箱には鈴虫が茄子に群がって秋の風を待っている。——これが米朝さんの充実した余生の部屋である。

30年このかた私がまだ夢に描いていることをみんなやってしまった。それは氏の川柳との出会いの喜びであり情熱であつたと思われる。

句会の帰りに決って一パイのコップ酒に友を誘い、人とのふれあいを喜び、本社句会への出席、西宮句会への交流など、その実直

な人柄と温か味は多くの柳友、先輩と心で結ばれていられたのだと思う。

紅葉の天ぷらこよなく秋に酔い充電をします炬燵の雪見酒お人好しの毯でいつでも弾んでる約束の好きな小指で苦勞する倅せを盛るのは小さい皿でよいそしてよく人に贈る短冊には、

大らかな笑顔に胃ぐすりなど要らぬの、人間・米朝の句があつた。そして、

逃げてゆく若さを冷凍出来たなら癌さらりお別れしてから八年目

喋らないカルテに神経尖らせる愛情の機微へ涙がどつと出る

病窓の句帳に並ぶ整然とした文字の中に整理されないいまの次の一句がある。辞世の句だろうか。

子離れをしてから無限の海が待つ

大きな大きな柱を失つた悲しみは痛烈に私を直撃した。そして今、寝顔のような安らかな大往生のお顔が私の胸を春風のように軟かく吹き撫でて行く。

嗚呼 瑞徳院米朝良道居士

還らない主へ鈴虫鳴きははじめ 可住

合掌

本社 九月句会

九月五日(月) 午後六時

メンズファッションセンター

前日の四日早朝亡くなられた本社相談役、川村好郎氏を偲び黙禱。

おはなしは野村太茂津氏。昔は「勤勉」が我々の目指す価値観であったが、今は「働きすぎ」が国際的に非難される。価値観がすっかり変わってしまった。仲間意識によって発展してきた川柳だが、マンネリを打破するためには、どういう価値を目指せばいいのか、と問題を提起、選者の重要性を強調された。今月の月間賞は本間満津子さんが獲得。

(進行―天笑) (受付―月子・芳子)

(記録―射月芳・月子)

出席者―笛生・凡九郎・浩一郎・恭昌・紫香・太茂津・鬼遊・幸・武庫坊・年代・萬的佳秋・悦郎・寿美子・薫風・アキラ・英子・芳子・狸村・柳影・眉水・敏・白溪子・作二郎・颯云児・東雲・重人・勝美・勝晴・天笑月子・美幸・規不風・外吉・庸佑・千秀・み

ね・三千子・満津子・達子・射月芳・典子・愛論・章久・章・季柳子・正坊・いわゑ・みつ子・度・亜成・文秋・あいさ・冬葉・柳仲柳右子・憲太郎・英王子・朱夏・すすむ・寿子・史好・美代子・昭子・柳宏子・美房・藤子・吸江・楓楽・美智子・頂留子・文子・雀踊子・寿美・岳人

席題「制服」

大 路 美 幸 選

制服の鼓笛隊から秋になる
制服が押さえつけてる腹の虫
カラフルな制服社風ぬりかえる
制服の是非に揺れてるボブラの木
制服を着るとあの娘もいかめしい
制服を脱げば主婦です市場籠
憧れて着た制服が身につかず
いけすかん奴で制服が身似合い
制服組に渡してならぬ青い空
制服の父が座敷に似合う家
定年はあす制服を撫でている
制服を見れば軍靴の音がする
制服を脱げば乳房にくる子供
悪いことする制服がいて困る
制服のボタンいつかは思い出に
制服のなかに美辞麗句を溜める
制服をぬいで私をとりもどす
ロッカーで制服が泣く戎ばし
制服に辛い涙の跡がある
あこがれた七ツ釦も粗大ゴミ

いわゑ 正坊 憲太郎 みつ子 柳影 愛論 満津子 天笑 みつ子 アキラ 外吉 恭昌 典子 鬼遊 作二郎 浩一郎 重人 柳影 颯云児 東雲

菅公ではないが軍服たまに出し
制服が素顔の裏を赦さない
制服を脱いでも目付きはまだ刑事
制服を着ると整列早くなる
制服を着ると本音が喋れない
セーラー服の下に眠っている女
制服を着た自画像は笑わない
制服を着て忠実な犬になる
制服組少しあまはなかつたか
優越感持つ制服にある驕り
お揃いのスモック今日は栗拾い
制服で通した父の時刻表
制服に旅のついでを頼まれる
制服の枠をはみ出す子がひとり
生き方が下手で制服まだ脱げず
制服の昔語りを土用干
制服はアンタの心に着せなはれ
制服を脱ぐと詩人になる男
制服が似合うととても悪い奴
まだ青い制服乳房を離さない

席題「迷う」

墨 作二郎選

女は迷う子育てが済んだ頃
迷うた末に選んだ人と添っている
鬼灯を鳴らすと猫の瞳が迷う
脱いで着てまだ迷ってる試着室
迷いから醒めると空が突き抜ける
棧橋のおんなにカモメまだ迷う
桟山で迷うと戻る道がない

度 寿子 美代子 武庫坊 颯云児 芳子 幸 藤子 藤子 千秀 みつ子 雀踊子 作二郎 寿美 太茂津 章 凡九郎 岳人 天笑 美幸 外吉 英子 章 正坊 射月芳 外吉 颯云児

駄菓子屋で子が百円を迷い抜く
迷う心へ男は筆を嚙んでいる
始めての旅に持たせる迷子札
巨大迷路へ忘れてきたのは赤い靴
こぼれ萩迷いはとうに捨てました
背のびに気付くと何でもない迷い
地下街で出口をさがす紙バッグ
この辺も変ったなあと迷うてる
村はずれで迷うて赤トンボに出逢う
抜け出した迷路でちよつとぬぼれる
迷うて来た犬をこどもが飼うつもり
三面鏡の一面だけがまだ迷う
迷うのは炎が胸に溜るから
迷路から出て来た半分死んだ顔
待ち呆け恋を迷わす味がする
花言葉なまじ知っていて迷う
屋上で飛び降りようか止めとこか
帰るとこ忘れた犬がついてくる
少し迷ってから善人の列に入る
ワンクッション置いてすこし迷うてる
知りすぎたために迷うてばかりいる
迷いから醒めて濃いめの墨をする
決断を渋ると森に迷いこむ
遮断機が降りて迷いがふつ切れる
迷いから覚めて身長伸びてきた
結び目の多い話に迷うなり
ペンギンに見惚れたおばあちゃんが迷子
カラフルな蓋が並んでいて迷う
迷いをかくすしばらく笑つとく

芳子 萬的 満津子 朱夏 寿美 天笑 正坊 笛生 萬的 年代 紫香 幸 美幸 勝晴 悦郎 いわゑ 英子 笛生 アキラ 美智子 三千子 月子 諷云児 芳子 冬葉 悦郎 あいき いわゑ 天笑

迷うてる鏡に最低のわたし
今日の迷いはチェックの服が原因だ
迷うたび唄つてみよう母のうた
迷い続けて進む遅れる古時計
森に迷った硝子の馬は帰らない
兼題「やさしい」 津守柳伸選
ワンカップ優しい父にしてくれる
やさしさは黙って出してくれはった
京おんなやんわりきつい釘をさす
狼が羊の皮で寄ってくる
やさしい人の横で優しくなってくる
やさしさの裏にひそんで居た邪心
やさしさも夜叉にも貴男しだいです
見えすいたウソもやさしい思いやり
そこがあなたのやさしさですが物足りず
お隣りはいいなあやさしい嫁がいる
本当のやさしさ知っているベツト
差別などせず飛んて来る青い鳥
ライバルがとてもやさしいので困る
そんな時下手にやさしゅうしなはんナ
やさしさの中で育ったやさしい眼
やさしさが支えとなった浮き沈み
やさしさと美貌両方授からず
生々流転やさしい鬼と道連れに
やさしさのタツチで絵日記がおわる
故郷のやさしい風で羽づくろい
やさしさがすべて愛とは限らない
モノリザはやさしい瞳もっている

天笑 史好 外吉 幸 作二郎 津守柳伸選 耕花 花村 荒介 千代 喜風 昭子 頂留子 年代 諷云児 昭子 浩一郎 射月芳 凡九郎 典子 愛論 文秋 芳子 冬葉 憲太郎 楓楽 狸村

近畿文字放送作品募集 題「散歩」 森中恵美子 選

3句 締切 10月15日

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい

〒540 大阪市東区谷町2丁目36

大手前ウサミビル3階

近畿文字放送 川柳係

どん底でとてもやさしい鬼に遇う
伎芸天女のやさしい影にもある孤独
退院の日に婦長さん泣いてくれ
やさしさが男の骨を抜きにくる
誰にでもやさしい人で気がもめる
傷心へ友のやさしい竹とんぼ
励ましてくれるやさしい聴診器
補聴器の役目を妻がしてくれる
母性愛やさしいだけが能じやない
やさしさに溺れてみたじんファイズ
やさしさにいっぱい出会う風の盆
思いやりワイフが履いたローヒール
やさしさが一杯母のお針箱
鈴虫の籠やさしさはもう居ない
男勝りの女将がボタンつけてくれ
やさしい顔で鋭い口をもっている
誰も居ない海でやさしさ考える
落日有情まっすぐ亡母が逃げてくる
やさしさに馴れぬ車が軋みだす

射月芳 萬的 外吉 藤子 浩一郎 美幸 憲太郎 芳子 勝晴 吸江 楓楽 恭昌 萬的 作一郎 外吉 柳宏子 作二郎 美幸 柳伸

兼題「不足」

宮口笛生選

何一つ不足無いのに子が出来ぬ
何一つ不足なくて子供が授からず
もつ少し足りないしあわせつなく糸
体重が不足で負けることもある
写経する筆に不足が消えはじめ
平凡に生きて不足など言わぬ
不足ない家庭で芽ぶく非行の子
わからんが何が不足か考へる
少々の不足妥協をして夫婦
ご主人の真面目をボヤくバチ当たり
よう出来た嫁へも不足の二つ三つ
不足言う間は企みなどは無い
このわたしのどこが不足で吞んで来る
何不足ないだろうとは他人の目
王様の不足は髪が薄くなる
割り勘の不足に幹事腹を切り
しあわせな人の不足を聞いてあげ
不足いう人はきらいな青い鳥
はつとと不足出て来た倦怠期
舟頭がひとり足らない船着場
何不足ないけど少々便秘きみ
何が不足で絵馬の乳房は人嫌い
平凡な暮らし不足など言えぬ
何不足あるのか家を出る話
戦争を知らぬ息子が不足言つ
あんみつの甘さが少し足りません
額縁の隅に溜まっている不足

規不風 三千子 千代 敏 重人 悦郎 紫香 太茂津 文秋 外吉 柳宏子 白溪子 外吉 柳宏子 美幸 射月芳 いわゑ 楓楽 昭子 荒介 萬的 作二郎 満津子 冬葉 あいき 岳人 幸

不足など言わずに明日の米を研ぐ
ホルモンの不足を妻に攻めてみる
口髪を生やして不足ばかり言つ
スタイルも顔も不足で生きてます
輝いて月は不足を抱いてくれ
ひとつまみ足したら亡母の味になる
鏡台の底に封じておく不足
ひとつふたつ不足があつてよい暮し
何不足無いのに心満たされぬ
不足が多くて九月の蟬は啼き過ぎる
母だから不足の金を出してくれ
振り向けば不足も言わず妻がいた
不足ない妻で息抜きしたくなる
不足ない齡にしている野辺送り

兼題「保険」

塩満

敏選

強制保険何やらあはらしくも感じ
任意保険いつもスピード出しすぎる
傷害保険は掛けてあります脚線美
ユートピア養老保険でまにあわず
飛行機に保険を掛けて乗ってます
火災保険落雷騒ぎは知らぬ顔
掛け捨ての保険今年も無事満期
生命保険役立つ時に悲しみが
酒タバコ止めて入ったがん保険
釣り舟に乗るにも保険掛けて出る
ロボットに労災のない深夜業
失恋にかける保険はないものか
地球滅亡そんな保険が出来そうな

浩一郎 耕花 藤子 英子 美幸 章 瑞枝 美智子 芳子 作二郎 紫香 いわゑ みね 笛生 萬的 白溪子 文秋 武庫坊 荒介 あいき 射月芳 度 柳伸 千代 章 史好 緑良

こつこつと溜めた満期に土地は逃げ
一寸先は闇だよ健康保険証
税金も保険も大きな車乗る
火薬師の指が狂った保険証
保険証旅の景色を見て帰る
脚に保険自己宣伝のネタにする
一病へ身に沁む健保のありがたさ
ハネムーンで新婦ホケンの話する
保険屋に僕の命を値ぶみされ
保険屋が十年知己の顔でくる
保険屋と妻が臭いと思わぬか
保険屋の殺し文句は万が一
定款も見ないで入っている保険
保険屋で子育て終えた寡婦の意地

文 射月芳 笛生 悦郎 千代 萬的 寿美 外吉 重人 典子 耕花 章久 瑞枝 達子

63年本社句会皆出席者（9月まで）

楠昭子・宮園射月芳・福本英子・飯田悦郎・柴田英子・山本規不風・高杉鬼遊笠原吸江・橘高薫風・墨作二郎・玉置重人・黒川紫香・岩本雀踊子・川原章久・田中正坊・吉川寿美・池田寿美子・桜井千秀・板尾岳人・野村太茂津・河内月子・藤田頂留子・稲葉冬葉・辻白溪子・松原寿子・吉岡美房・塩満敏・佐藤藤子・金井文秋・阿萬萬の・神夏磯典子・奥山美智子・高田美代子・河井庸佑・津守柳伸・西田柳宏子・江口度

（37名）

暴食をたしなめられた保険証

そのときは義理で入った保険金

肩書に見合う保険をかけておく

火事見舞保険の額も聞いてくる

悠々自適妻が保険を掛けている

冥土まで持つて行きたい保険金

月掛けも終えてめがねを買い替える

保険入っているがなと他人の火事

掛金の元とれる程医者通い

三途の川渡ると保険効いてくる

三十年掛けた保険でこれだけか

生きている生命保険かけている

生きている証しに保険かけてます

兼題「洗う」

黒川紫香選

執念に燃えて先生手を洗う

ご機嫌が悪いぞ茶碗洗う音

洗うてもどう洗うても手の不倫

負けた日の心を洗うシューベルト

逢いにゆく両手を光るまで洗う

満たされた顔で写経の筆洗う

握手した奴が帰って手を洗う

たった今洗ったらしい朝の髪

ストレスを洗う月夜の露天風呂

あしたは遠足されいにズック靴洗う

いさぎよく負けて真白く旗洗う

洗つてもとれぬ汚点を胸に秘め

五日分纏めて洗う共稼ぎ

足袋洗う汚れた今日をよく洗う

頂留子

年 代

風云児

典 子

美智子

楓 楽

芳 子

重 人

英 子

狸 村

愛 論

い わ る

敏

市 雄

早 苗

耕 花

瑞 枝

千 代

柳宏子

規不風

敏

みつ子

萬 的

幸

武庫坊

勝 美

幸

一匹狼首はいつでも洗うてある

因習を洗い流したくくの嫁

手を洗う癖保育園つけてくれ

洗うても消えない罪に責められる

ゆつたりと洗車相手を待ち乍ら

一日を無事に過ごした手を洗う

妻の風呂よく洗うとこありまんな

ひとり住む老婆ひっそり干している

時の人となつて前歴洗われる

もう一度顔を洗うて反省す

朝市に出す大根を洗う川

落ちこぼれいつも仲間の背を洗う

立志伝序章はいつも皿洗い

鍋底を洗うことなく食文化

好きだったお酒で洗う父の墓

髪洗うやつと思いをうちあけて

心洗いたくて写経の筆をとる

洗い場の母の背中丸くなる

蚊を殺し僧念入りに手を洗う

せめてもの償い亡父の墓洗う

手を洗う短かい夏を思いつつ

大根を洗う北の早い冬

真白に乾いた夏の洗い物

海女の墓波が何度も洗いくる

コンタクトレンズを洗うむし暑さ

食べ残し一切れもない皿洗う

洗うものみんな出せとは母の声

眉 水

芳 子

白漢子

風云児

達 子

みつ子

重 人

芳 子

寿美子

萬 的

美 幸

度

勝 美

狸 村

楓 楽

美智子

狸 村

美 幸

佳 秋

作 郎

雀踊子

笛 生

作 郎

英 子

満津子

紫 香

（清記・楓楽）

第23回東大阪市文化祭参加

第16回市民川柳大会

日時 昭和63年10月30日(日)正午開場

会場 東大阪市立社会教育センター3

3階(電話06-789-4100)

近鉄布施駅北へ5分

おはなし

宿題

響く

捨てる

群れ

風

情け

ヒーロー

力

席題

当日一題

各題2句

締切1時半

賞

各題秀吟賞

会費 千円(発表誌呈)

主催

東大阪市文化連盟
東大阪市川柳同好会

老地樹壇

締切毎月25日。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。

担当・玉置重人

三幸川柳教室

桜井 千秀報

激安の卵で誘う主婦の足

誘いにも乗って見なけりや智恵も出ず

幽玄の世界へ誘う薙能

ねんごろな誘いへ万障くり合わせ

捨て石を打って誘いをかけてみる

セールスに見込まれてからの自閉症

夕雲に誘われ泣きに出る小道

自転車倒しザリガニのぞきこみ

カルガモの親子に車止められる

花嫁の車に夢を乗せきれず

歯車の惰性信じることにする

横車ブレーキかけた跡がない

車から降りて動けぬ鳩を抱く

弥次馬が弥次馬に聞く事故現場

車間距離おいて世渡りする女

タクシーを捨てて地下鉄に乗り換える

かんたんにももって嫁くと言っ

これからは各駅停車で行くふたり

扇面に墨痕冴える水府の句

守 敬子 幸子 可笑 貞子 まさお

鶯童は扇子で文左の船を漕ぎ
やつがれは頭叩いて座をもたせ

揮毫入り扇子選挙の匂いする

扇車たてて男の責め果たす

容赦せず決心迫る扇腹

もつひとつの顔で舞い切る扇子持つ

愛された日々をまさぐる秋扇

洋傘のまん中つたい雨が漏れ

じわじわと押されて中に詰めこまれ

父に似て子もまん中が薄くなり

まん中において頂上に憧れる

まん中で主役になれぬ黄信号

かごめかごめ鬼の背中に長い影

姉二人下が二人で嫁きおくれ

まん中へピアニシモがよく響く

シャッターのまん中はげが並ばされ

川柳後楽

井上柳五郎報

気象庁が頭かかえる戻り梅雨

狭うても背伸びのできる隠居部屋

背伸びする男を待ってる敵の罠

禁酒禁煙麦茶がうまい回復期

十字架を背負って啖呵切れがよい

小男が大きな啖呵で浮かばれず

図に乗ると啖呵が豆腐から返る

腹話術可愛い啖呵で世相切る

ご先祖に感謝の気持経をあげ

商い上手一見客へ毎度あり

ありがとう妻に感謝の目で答え

ありがとう古稀にロマンの艶があり

ありがとう言った後から牙を磨き

空海もあの世でなげく高野山

重次 宏 忠昭 鉄治 三千子 孝子 朱夏 美子 利子 定子 桂香 保 和子 千枝子 茜 智水庵 哲郎 吟平 進 秋月 照路 玉水 草風 浄美 文平 柳五郎 番茶 鮫虎狼 博友 佐加恵

値下げにもやっぱり八十八の手をかける
鼻唄でサラダができる流し台

川柳をすこし盗んでサラダ万智

いつまでも長生きしてとサラダ盛る

雑魚は雑魚啖呵を切ると火傷する

明日からはビールをやめて麦茶です

熊本川柳会

有働 芳仙報

じわじわと面面相になるお灸

人生を鈍行で行き無位無冠

精魂のつきたポーズで蓮が枯れ

ゼスチャーム手話も愉快な滝にぬれ

掌の中の小さな歴史温める

我が家になって掃除に念が入り

足跡のない砂浜へ犯すこと

税金のお釣り小銭の軽い音

お喋りへ油断出来ない生返事

朝掘りの竹の子土の香ももらい

岸和田川柳会

植山 武助報

雷門のみやげの鈴が涼を呼ぶ

線香花火消え一人の僕に星が降る

病室でテレビ相手の泣き笑い

寿命延び嫁に気兼ねがまた増える

気を抜けば草がうながすようにのび

生命線長い花道みぞれ雨

鳴らし方知らないけれど鬼灯市

磨りガラスの向うで約束した女

約束へ男の口の真一文字

家元の約束事に馴染めない

美しい顔ですらすら嘘を言う

一言に尽きる感謝のありがとう

大正がまだこれからと明治いう

美智子 金吾 義親 青銅 桃風 拓治 昭代 俊子 芳仙 緑 幸子 一進 宵草 市雄 康一 喜久子 ダン吉 狸村 通彦 こう 加代子 みのる 一弥 白光子 寿美子 ひで 春栄 希久志

輕蔑をしたい或る日の私ごと
 車座がうねるデカンシヨ同窓会
 入れてやる三途の川の渡し銭
 参道で鶏が案内してくれる
 極楽はシルクロードの果てにある
 一点を見るから失敗ばかりする
 もう逢わぬ約束母に似た女と
 ふろしきで母来てくれる柿の出来
 城一瞬ヌードのピラを握らされ
 友人の投句に勇氣倍加され
 單身赴任家族に入る隙間風
 欲望がまだ消えやらぬデスマスク
 宿題と塾のすきまをピアノひき
 欲だけは他人になれる遺産分け
 大都会油断も隙もない暮し
 自己暗示かけて放射の椅子に乗る
 隙のない男に添うて殻をとじ
 母と子の愛のきすなでつむ積木
 隙多いわたし支え止める無口
 目立たない奴が射止めた美女の愛
 初生りのトマトに惚ぶ父母の顔
 園児等の夢を上げる人形劇
 一瞬の隙へ風切りとぶ竹刀
 歳月の重味人柄丸くなり
 親の画く地図を走らぬ子の車

武助 浪速子 ゆづる さよ子 甘平 富志子 初太郎 操子

母となる夢へ一途な毛糸針
 夢を織る少女に弾む箴の音
 夢二の絵うつとり蛇の目の半開き
 少し隙見せて繁盛ママの店
 皆健康隙間だらけの家に住み
 天然のクラー夏の間風
 みくびつた力にいつか助けられ
 民衆の力は暴力はじき出し
 遍路みち無欲の仏に過去を言う

純子 満津子 達子 右近 午郎 笑み子 秀風 秀夫 八重子

ほがらかな祖母のお守りで皆育ち
 ほがらかな家庭で育った子の素直
 ほがらかな性に恵まれ愛される
 お遍路もレクリエーションのほがらかさ
 ほがらかな人生趣味の風に乗せ
 抵抗もなく下駄箱に靴を入れ
 快活な子とゴムまりと太陽に
 倉吉川柳会 渡辺 碧水

千代女 秀香 藤江 半仙 山人 贊平 女

敏子 輝子 綾珠 テルミ 寿美礼 新一郎 正子 文子 公一 登美子 倫子 ふみ 佐津乃 温子 典子 静子 トキワ 登志代 市郎 静歩 だし

久世川柳クラブ

二宗

吟平報

光水

昔ほど帽子かぶらぬ若い人
 丸木橋渡ると自信わいてくる
 イ・イ戦争丸い世界の話し合い
 丸かれと折って触れる撫で仏
 あの人眼鏡の中の目が素敵
 丸く生くことに専念老いの夏
 未来図に無明の森が横たわる
 自問自答未来の地球暗すぎる
 未来像神様だけが知っている
 未来像野球選手がタレントか
 人柄が丸くなるころ背も丸み
 未来より明日の俸せ願います
 二重橋あれも眼鏡の橋ですよ
 未来にもきつというならこんな悪
 還暦を越すと未来がそこに見え
 きらりと光る眼鏡をいつも持ち歩く
 笑い袋に丸い言葉をつめておく
 ミス天女美しい娘が多すぎる
 スッポンボンになって未来を考える
 イランでは鳥も案山子もヘルメット
 丸い瞳でおとなの嘘を突いてくる
 言うだけは無料未来は平和なり

碧水 とめ子 小生 車楽 ひろ子 壽満湖 松雀 天雀 秋人 さつき 柳風 満春 かつみ 京子 康志 亜弥 御前 秋女 はるお 次男 独歩 苦句

川柳化粧櫓 植村客遊子報

芸のない話ボスター美女を入れ
電線をわたる真珠も春の雨
はしたなくすぐ値打ちをきく下賤
菖蒲園雨に素敵な絵をもらう

川柳塔からつ佐志教室 浜本 義美報

集中砲火浴びても君を信じろさ
片目ダルマに泣き癖をつけないように
妻子待つ港をさして大漁旗
バラ銭を数え追加の生ビール
ぐつすり妻のいびきの羨まし
うしみつに熱をもつ手の置きどころ
放心の境地に福の神宿り
約束のエレクトーンを孫が弾き
紅うすくつけて農婦の盂蘭盆会
甚平の爽涼 清貧に叶い

川柳藤井寺

赤木

金魚にも女王もいればボスもいる
風そよぐ小川の畔影二つ
梅雨あけを膝の痛みが知っている
淋しさに堪えているのに花が咲き
山道を行けばとんぼが案内し
まつり笛遠い記憶をつれて来る
どん底にいても祭はやってくる
ややこしい話は嫌い大花火
待ち侘びて蛇の目につらい雨の音
祭好き心浮き浮き早仕舞
出目金が出目金見ると金魚鉢
鯉のぼり降ろせば緑の息を吐き
蛙から見た人間の不格好
金魚の歎き私は大空泳げない
秋に嫁く娘と寄り添って夏祭り

柳宏子 滋啓 慶三 松山 義美報 百万両 三枝子 紫泉 喜久夫 治幸 ちよ 百恵 冬子 順子 義美 和子報 志洋 ときお 三郎 きよし スミ 治子 吸江 美代子 かな女 繁男 作秀 昭子 美房 雅美 婦美枝

わたくしが折れて四方が丸く済み
いつもやでの不機嫌芝観音で直り
逆境に弱い歩巾を持て余し
病んで知る人の心の奥にふれ
青い目もハッピー着てます天神さん
宮入りで酔けさきもどる吊り忍
もつもんなどのかと夜店仕舞かけ
街にきてトンボ落着くところなし
傷口が少うし乾いて喪が明ける
孫みやげ金魚袋が二つゆれ
祭囃子リズムに合わせ胡瓜噛む
好奇心道連れにして一人旅
潮風を背に受け瀬戸の旅業し
よく熟れたバストビキニが包みかね
梅雨晴れる掘ったじゃが薯蓣り出す
セールスに金魚だけが愛想よい
忍術を使って逃げた日のトンボ
紫陽花の影で雨呼ぶ青蛙
つゆの夜に砂漠に渴く人想う
水着などいらぬハワイへ老い二人
ハイキングせせせ清く河鹿なく
ボタンはずして見せてあげよう心意氣
打吹川柳会 江原とみお報

本蔭棒 枯二 与呂志 つかこ 敦子 美佐 喜道 正枝 末一 和美 初枝 彩 政代 伴子 松亭 清心 よう女 秀伸 好太郎 和子 巡歩 紫映 寿美子 雄々 紫泉 早苗 柳風 宗光

川柳塔鹿野みか月

結成満8周年記念大会

日時 昭和63年10月16日(日)9時半
会場 鹿野町農業者トレーニングセン
ター(JR浜村駅下車バス15分)
鳥取県気高郡鹿野町鹿野

電話 0857(84)2131

お話 兼題

「天」 高杉 鬼遊
「巻く」 西田柳宏子選
「奥」 土居 耕花選
「似る」 岩本雀踊子選
「紋」 寺尾百合子選
「半端」 塩満 敏選
「粒」 両川 洋々選
「太い」 林 荒介選
各題2句・締切11時

会費 一、五〇〇円(軽食・発表誌呈)
懇親宴 一、五〇〇円(10月8日までに投
句先へ予約のこと)

◇投句 一、〇〇〇円(10月3日消印まで
小為替希望)

宛先 〒689-04 鳥取県気高郡
鹿野町鹿野1279 中原颯人方

川柳塔鹿野みか月事務局
電話 0857(84)2100

水着きて私の胸がなくなつた
 メンバーの一人を強く抱かない
 胸張つてみても指紋の広さはど
 食卓のメロンは甘く誘いかけ
 ベランダのトマトでわかる旬の味
 国鉄をこよなく愛した父の貨車
 大海を泳げるようになり油断
 ジゲ起し民芸品に夢をかけ
 親の顔うつすと脆い涙壺
 嫁いびりされた姑の歳となり
 一戸建高嶺の花とあきらめる
 七夕に無理な願いが下けてある
 悪妻に育て上げたは僕だった
 人生のリズム乱れて下り坂
 赤い色着ると朋輩小づるさい
 六法を広げないまま三十年
 政治屋が上手に泳ぐ法の裏
 虹の橋に通せん棒がしてあつた

西宮北口川柳会 松本

水着見せ海岸ばかり歩いてる
 そら豆がふやけた頂の碧い海
 お話上手な尼僧が嵯峨の奥に住む
 無駄な尾を振って出世に遠く居る
 子沢山一束にして母叱る
 美しい尼さんがいた隠れ寺
 海の香を海女乳房から子に伝え
 お茶入れる間に済んでいた阿弥陀経
 砂浜の小亀知つて母の海
 バイク駆りお盆は僧の稼ぎ時
 別れると決めた昨日のバラの棘
 橋が出来ても海を渡つたことがない

童
 日枝子
 正朗
 芳子
 善政
 雀踊子
 典朗
 梅朗
 妻朗
 喬水
 吉朗
 仏岳
 八太朗
 佳女
 菊枝
 日出子
 弘朗
 とみお
 一郎報
 保蔵
 伊三郎
 萬秋
 佳影
 眉水
 武庫坊
 芳子
 英子
 圭坊
 三男

朝顔のつる巻く自由奔放に
 蟬の声まじめな僧の般若経
 ファツシヨンを海でみつける多彩な日
 均等法酒も煙草も飲む尼僧
 蟬時雨読経流れるけさ衣
 権力にしつばは振られぬ尾髭骨
 愛されて棘ある言葉何処へやら
 胸の棘聖書と向い合っている
 気がつけば妻がタクトを振つてた
 振りほどく手にも少しはある未練
 バラの棘抜いたらバラは死んでいた
 振り上げた手が悔しさに耐えている
 老僧のなお八月の鐘を撞く
 軽く振るグラスの中で氷鳴る
 ざこ寝しよう母が言い出す里帰り
 日本海父を奪つたけれど好き
 ざあますの言葉に棘が見えかくれ
 失礼な質問だけど棘がない
 棘を持つ花は仏と縁が無い
 どん底に落ちて覚えた酒の味
 ひとりでは惜しいメロンの味が落ち
 花の名をひとつ覚えて旅終る
 まだ魅力ありますわたとし踊ります
 虚無僧の顔を覗いてみたい日も
 ロボットがもてあまして夏期休暇
 好きだった酒をせめても流す海
 楽屋見舞の薔薇にけけしい棘がある
 捜してまで洗濯をする上天気
 さくら貝海には海の恋がある
 漁火の中から父の灯を探す
 クーラーが良く効く席を譲られる

年代
 しげお
 よ志子
 みち子
 香子
 正坊
 千世
 いわゑ
 恵美子
 園英子
 よし津
 江美
 はつ絵
 静子
 房子
 宣子
 紀雄
 園歩
 白溪子
 風云児
 春子
 美智子
 光代
 青珠
 一郎
 三笑子
 作二郎
 正一
 定人
 東角

カミソリの青さそれぞれの恐怖
 夏休み朝のピアノは乱調子
 粗大ゴミクーラーつけてねてばかり
 振込みが滞納を呼ぶ授業料
 棘みんな抜けば仏になれますか
 役職が棘の一つも言ってみる
 振り出しに戻ると見える突破口
 彼も暇電話をすればすぐに来る
 健気にも苦境を生きた姉思ふ
 善人に言葉の棘は刺さらない
 旗振りが得意で返り血を浴びる
 政治家の身体に棘は刺さらない
 虫干しに母のおいがまだ残り
 おかわりのジョッキで雷鳴遠く鳴り
 振り付けは貴方好みで踊ります
 返ってくる筈はいつても馬鹿という
 人により電話のトーンを愛する奴
 包丁のつかれを知らぬ台所
 胸襟を開いて酒を呑みほさず
 プリズムで覗けば我が家も別世界
 頑硬な智恵にも孫のしなり顔
 棘のある女と話して肩が凝り
 新顔のドライも味な京の川床
 秘密のないのカナリアよく唄う
 夕焼ける橋で女と別れて来

サークル檸檬 片岡智恵子報

あと味の苦さお世辞がうまく言え
 盆三日あの世は馬車が混むでしょう
 スパイが効きすぎもち味殺される
 うす味になれて文句も出なくなり
 若者のファーストフードの味に負け

伊升
 みつ子
 修水
 文夫
 荒介
 一進
 千秀
 猊香
 みね
 信義
 保
 ただし
 善太郎
 曲手
 芳仙
 枯梢
 六郎太
 市雄
 俊子
 勝美
 ノブ
 杜的
 森生
 紫春
 紫香
 美緒
 三四子
 泰子
 千代女
 雅子

せめて世を丸く生きたし丸い盆
七転びころんで知った酒の味

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

葱坊主うしろは見えないエゴイスト
冷や汗の出たハンドルに深呼吸
淡水化ブレイキかけてシジミ舟
深呼吸空の青さよ鳥も啼き
ボウフラの深呼吸やがて修羅となる
半分ほど渡ると向うが見えてくる
ブレイキに命托している夜道
生きるといつこの難さよ老いの日よ
ブレイキを忘れたお喋り日が暮れる
葱坊主泣く青空だつてある
叱られた肚をおさえる深呼吸

静岡市川柳同好会

永倉 僕川報

勉強が嫌いで親を困らせる
表彰状内助の妻とフルムーン
好きなのに他人行儀がじれったい
君ならと肩を叩いて太鼓判
断りに愛妻を又風邪引かせ
我儘な親父達で留守がよい
八十八爺や言うても気にしない
保険金ほしさに罪がまたも増え
雨上り植木にもある息遣い
年金があるから同居考えず
セールスに騙されてる欲の皮
六十路まだ夢は道草したくなり
幸せな蝶は花から花に逢う
健康で金はないけど耳達者
新築を褒めて保険を勧められ
古稀過ぎた父母をねぎらう敬老日

今日子
智恵子

恵美子

智恵子

ヒデ子

聖子

はるみ

かつ子

鈴江

天痴人

民子

清泉

白汀

僕川報

孤秀

金吾

紀代志

芳男

孝平

庚子郎

喜平

やす

たま

たき

千代

志げ

つね

きん

きぬ

敬老の二字に負けないように生き
敬老日姑は化粧に念を入れ
田圃売り御殿のような家が建ち
せつからでいつも小股で急ぎ足
孝行の真似が芝居に連れて行き
揉み消しの手も鮮か他人様
古日記寂しい時には読んでみる

川柳塔唐津支部

久保 正敏報

山へ来た安らぎ見た御来光
公園の小使小僧虹を立て
定退後亭主もまめな家計帳
終始一貫額には書いてみたけれど
二次会の席ナツメロで分けられる
水を撒くそこに居たのか雨蛙
見馴れたる景色の中に夢を追う
珈琲をいっきに飲んで事件記者

川柳塔きやらぼく

政岡日枝子報

野をかける親子の絆深み行く
野辺送り天寿と人は言うけれど
野良着なら素直に土と五月晴れ
手鏡の裏に茫野広がつて
歩いたらかならず逢える野の花に
転った稔も花野で遊びたい
しばらくは野の中に待つ結婚記念日
野に咲いた花を大事に育てて
野の露は一つ一つが宝石だ
人の裏ようやく見えてきた風野
荷物重くて野原の風にあてに出る
野の果ての土になるのは難かしい
陽をまとも明るく生きる野の一樹
野の花でひっそり野辺に眠りたい

まつあ
三津子

静代

久子

房江

み次

みつ

旭恒

高明

朴竜

虹汀

四郎

幸夫

タミ

正敏

時子

八重子

富枝

田鶴

夕子

千春

てい子

とも子

朗子

玲子

恵子

日枝子

瑞枝

なみ

第3回国民文化祭

ひょうご88文芸大会

川柳部門発表大会

日時 昭和63年10月23日(日)10時開場
会場 神戸国際会議場(メインホール)
神戸市中央区港島中町6-9-1

大会内容 入賞作品の講評と授賞式ほか
記念講演 園田学園女子大学助教授
坪内 稔典氏

当日句会(各題2句・締切12時)

「灯」	卜部 晴美選
「皿」	久保田寿界選
「草」	遠山 可住選
「街」	平山 繁夫選
「笛」	藤本静港子選
「文」	山本 哲郎選

広い野にみんな行きつく白い道
摘まないで野では女王で咲いている
血脈もここいらあたり野火消える
野を抜ける足手まといを引き連れて
野から出た風はかならず野に戻る

大原川柳社

小林 妻子報

水道の零ポトポト無人駅

泣けもせず独りと言う子書いてみる

梅雨上り久々に逢う丸い月

もう逢わぬ決意の筈が揺れている

経机無理な願いをきいて居る

素晴らしい笑顔に出会う花の庭

川人も清く流れていった記憶

捨て切れぬ古里があり盆踊り

許す気になろうとなろうと数珠をくる

孫まこと孫に責められ夏休み

真つ当に生きねば借りが返せない

一と筋のどこまで続く茨道

孫巢立ち七夕様に無心神

真つ直ぐに生きた証の日記帖

コバルトに輝く海に娘と泳ぐ

ふくらんだ噂と戻るプーメラン

むくわれぬままに凭れるだまし舟

突き放す事も出来ずに貝となる

水中花ブラックジョークわかるかな

禿げている父をそれから写さない

豊中もくせい川柳会 田中

夕闇に胡弓の調べ風の盆

逆縁の初盆母の小さい膝

風のように来て去って行く盆の僧

都会から人が出ていく盆休み

甲子園母校来たので休暇とる

赤字でも休暇がとれるサラリーマン

夏休暇あつてよいこと悪いこと

夏休暇ローマの休日などいかが

ガスレンジせつせと磨いている休暇

苛立ちを静めるために鍋磨く

みづえ

玉恵

辰子

宮子

智泉

元江

理恵

妻よ

たけよ

巴子

正己

敏子

こふゆ

睦子

みさえ

寿恵子

ひでの

正子

あすなろ

耕花

正坊報

明吉

武庫坊

正坊

英子

紫香

明光

登志実

圭坊

慶子

磨き上げた芸には辛い過去がある

人間も磨いていますかフーム落ち

勲章を磨いて逝った父傭ぶ

定年が近い男の靴磨く

コップ磨く母に疲れがあるらしい

もやもやを雷さちへ行った虹の橋

かみなががあつた虹の橋

大津絵の雷愛嬌ある仕草

遠雷に虫干しの母慌て出し

遠雷を聞いて西瓜の種子を吐く

絵日記書くためどこかつれていく

郊外に店出しタレントよく儲け

会議室灰皿出そうか出すまいか

飽食の愚痴聞いている箸枕

ふたりして阿々大笑の忘れもの

自惚れも一緒に捨てる夏帽子

もう五歳河内音頭を教えよう

嬉しいね孫より祖母がよく笑い

孫の土産の一つに長寿著

むらくも川柳会 藤井

海澄んで水着の妻も美しい

祭り笛あの音色だけ忘れない

あの人にもまた逢える日の盆踊り

汗出して木かげで憩う夏が好き

夏の宿浴衣に郷愁誘われる

夏空へも一度燃える老いの欲

夕映えの海はきれいと指差して

草笛を上手に吹いた孫をほめ

遅い夏待つてましたと海の客

祭り笛吹えた音色に魅せられる

夜が更けて神楽の笛も吹えてくる

眉水

洋子

とく子

きく子

俊子

富子

しげお

落児

隆

作二郎

典子

白溪子

晴治

曲ん手

楠曠

つえ子

博史

花村

杜的

明朗報

正朗

秀子

文子

はる代

福子

義良

武衛

千里

竹乃

吉野

カツ子

ほろほろと夜風の誘う笛の音

万緑に日々新しき日の祈り

趣味の道登り切れない坂だけど

取り消しの記事は小さく書く新聞

新聞のネタに不足のない世相

新聞のインキが匂う一頁

いつまでも美人でいたい化粧品

口先がうまい女将で店栄え

心地よい風満身にくつろぐ日

話すうち大阪弁もすべり出す

新聞が大衆心理より起す

嫁がせて二人になった夜の膳

盆踊りくどき上手が輪に誘う

盆帛省母を誘って踊りの輪

川柳ねやがわ 高田

石仏の指から人間くさくなる

四つ辻は銀行が建つ街になり

銀行のカメラに僕も撮られてた

はずむ声妻もかくせず子の帛省

銀行マン手品のように札数え

許せないことを他人が許したれ

駅弁で女三人姦しい

銀行で夜のおかずを考える

他人ではないと知ってた白い壁

えらいとこで出会って汗がとまらない

熱帯夜水を欲しがると飾り壺

最高の演技素顔を見せたとき

身内より他人に頼れる人がある

出稼ぎの汗が都会を組み立てる

弁解をするように咲く残り花

ヤス子

ふさえ

保子

峰雪

ゆき子

三津江

幸子

一葉

梅園

節江

八重子

巡歩

昭子

芳朗

明朗

博泉報

篤子

英明

イワオ

佐和子

頼坊

菜月

千鶴子

時子

静江

まさお

勝美

創吾

白水

雅文

節子

弁解を考えながら午前さま

紫陽花をいっぱい切つて呉れた女

弁解が下手で今度も又シッポ

他人から他人へ渡る金ばかり

年金の暮し募金をちよつと出し

銀行に余生を全部握られる

弁解をせずに監督胃を痛め

ぜいたくな汗をかくてのタイエツト

弁解が上手で一生秘書のまま

汗出せと玉ねぎ夏を吊らされる

若返りへ絶えず汗する万歩計

父にないヒゲが息子に似合つて

痛いほどわかつた顔をする他人

幽霊の名で銀行に貯めてます

笑顔まで割引セールのしたお店

汗ひとつかかぬ女がする指図

弁解はまわりの人がやつてくれ

働いた汗の押売りなどしない

銀行に勤めて金が溜らない

野心家の汗はサウナで溜めている

縄電車時々駅を忘れてる

今朝の妻他人の顔で責めて来る

夫より頼りと思つて預金帳

遺産など無いがきれいな血を遺す

汗かい証ビールがのどで鳴る

為になるはなし他人の耳で聞く

弁解もあやまりもせぬすきま風

銀行へ明日を預けて老夫婦

バラが咲く弁解がましいこと言わず

平凡に恋平凡に結ばれる

弁解をするからよけい怪しまれ

時弘

紀代

増造

三峰

なつめ

権太

勇太

藍子

一芳

一鬼

波留吉

君子

春子

章子

かすみ

あやめ

一笑

シマ子

光子

冬葉

てまり

一途

速水

良三

博泉

英壬子

度

おさむ

美智子

庸佑

頂留子

どなる前弁解されてひょうし抜け

フランスパンの長さ恋のもどかしさ

三面鏡のなかへ弁解しています

汗の価値始めて知つた子のバイト

汗散らすために団扇の風をとる

汗流す幸せ語り合うジョッキ

宵山の私は何処の渦の中

親の知らんことまで他人知っている

銀行の奥へ通れる顔になり

腹の立つ政治忘れて祭好き

富柳会

賞状が自慢で未だ平社員

自慢するほどではないができた妻

年金に使う実印なら押せる

実印を押して人生狂いだす

びつたりの言葉辞書から見つけた

エリートに平財テクで差をつける

呆けてない呆けている広辞苑開く

窓際で日向ぼっこをしてる辞書

息はつとかけて実印押しなれる

ネクタイをはずし私財をととのえる

いささかの私財余生を花と生き

実印が欠けております母達者

蝶々が自慢気に翔ぶので不安

川柳高知

香水をつけて記念の日を迎え

耳朶に香水つけて誰と会う

紙風船ころけて一つ雨にぬれ

紙風船思ふ富山のくすり売り

肺活も減り風船のふくらまず

少年の乗る風船は破れない

亜也子

吉之助

磯

敬山

亜純

小路

静歩

柳宏子

紫香

薫風

森子報

富久一

昭水

静枝

花子

田中勇

伊庭勇

曲手

莊次

文次

維久子

花梢

岳人

森子

松風報

有佳

一求

幸泉

竹萌

かず子

玲

招待の宴へ重たいのし袋

招かざる客が一番先に来る

客筋の好みは言わぬ招き猫

献体の柩を偉いなど送る

好きだよと酒が言わねえ軽い嘘

赤札が買わぬと損な気にさせる

盃を交す言葉が故郷を知り

足跡を残して消えたカタツムリ

カレーなら今日は休肝日にしよう

七夕を飾るナースへ梅雨があけ

湯上りのビールの味は汗がくれ

ふるさととは日本ツバメの子が巣立ち

尼崎いくしま川柳会

あつけない思いを抱いて火花散る

寝たきりの母を花火の見える部屋

肩を寄せあててくれた無人駅

浜風が迎えてくれた無人駅

ゆきずりの恋にとまどう浜の砂

地曳網レジャーも汗をかいだ浜

なんとなく砂浜裸足で駆けてみる

落日を拝み静かに浜を去る

出嫁ぎの地声がでかい浜育ち

補聴器が聞いてなかった忘れ物

小遣いを呉れる話を忘れてる

お見忘れでつかとおんなから呼ばれ

鼻の差のスリルにかけの甘い読み

盆だけのお経覚えるアルバイト

クジ付きのバガキが届く思いやり

届かない愛へ手を振る旅日記

鉄橋渡る電車に雨がふってくる

受皿は何時でも出せる母でいる

功

菊野

節子

佳風

俊子

幸

和興

淳枝

和広

秋翠

朱坊

松風

年代報

美智子

梨枝

諷云児

静夢

白溪子

女

武庫坊

曲手

しげお

紫香

眉水

文夫

正一

定人

歌子

作二郎

久美代

ふるさとの夜店はたるが飛んでいる
八十一の師に「いくしま」は育まれ
ボケ封じにカルチャー通いもしています
落日の海をみているハーモニカ
落書のようにタレントサインする

萬の的
伊三郎

兄嫁がつぎからつぎへ頭下げ
ひとしきりガンの話でクラス会
諦めたヘソクリが出る大掃除
急ぐのに電車延着アナウンス

美代子
美代子

孫迫えは孫の歩幅で逃げる鳩
忘れやすくて背なが少うし丸くなる

年 代

春城武庫坊報

ちよっとだけ遅れた顔の鬼瓦
一寸だけ肩にさわって誤解され

弘 治

ちよっとした優しい言葉に救われる
手をちよっと加える師匠が絵を生かす

江 美

ちよっとずつ我慢し合っている茶碗
古井戸がこわい話を伝えている

紫 香

叱られても伝わって来る温かみ
退屈の窓からもれるのど自慢

保 蔵

朝顔が退屈老母に話しかけ
盆の雨ころもの僧を走らせる

義 嗣

違い棚鐘と達磨にらめっこ
良き目覚め今日一日の飯を炊く

向 西

幸せなゆとり四つ葉をさがしてる
地図もない渡り鳥の勘の良さ

昌 子

言いにくいと言っただけ言てかえる姉
名人の一言で鯛つれだした

美智子

賢者とは有難くもあり又淋し
蟬がなく生命を削る声でなく

敏 之

美代子

武庫坊

形見分け電話をすれば飛んで来る
螢光灯あるうちとりかえて
栄転の勢い一羽の鳥落す
節くれた太い指こそ頼もしい

指切りで泣いたあの子もおない年
きのうほどとべぬバツタに早い暮れ
誇らしき羽は孔雀に重過ぎる

いささかの誇り病をくつがえし
姑の立場すっかり忘れてた
指切りの出来る友達一人はし

親の立場世間氣に於て塾にやる
指切りは遠い日誌の一ページ
立場ある相手に合わす四捨五入

誇りすてたあの夏草を忘れまい
売買の立場で違ふ欲の皮
ブライドが許さぬ金とつき返し

立場上情実人事はできません
葉がいとうの嫁の立場で口を閉じ
結構なお立場秘書になすりつけ

指人形思い通りによく喋り

八尾市民川柳会

飯田

三人が寄って文珠にまだ足らず
病みつきのパズルで買つてる週刊誌
腹の虫押えつつけているパズル

幸せを追ってパズルの中でのい
初恋の女と出逢う老人会
初恋の記憶はれんげの花の中

初恋の君は歌劇の男役
初恋の人も一人でいる噂
初恋の一直線がしおらしい

初恋の人と笑える年で逢い

兼治郎

組 子

恭 昌

英 一

さと美

春 子

君 子

東 雲

照 子

為 子

良 江

宏 子

綾 子

光 子

登志実

みつ子

いつを

鬼 遊

悦郎報

しんじ

勝 美

柳 伸

甘 平

三 男

泰 子

クラス会お互い年を意識する
クラスみなインテリの顔に塗り
クラス一あんな美人がまだ嫁かず

先生は九十というクラス会
お互いにミソクの目で追うハイクラス
クラスの一人が許してもらう車椅子

ご予算の範囲ビールが切れている
削られぬ予算待っているお姉様
冷蔵庫夏の予算になっている

子算は実家へ泣きに行く予算
時どきは実家へ泣きに行く予算
子算案可決いねむりから覚める

無一物人の心がよく読める
肩ぐるま父の無い子が夢を見る
宿題の無い夏休み考える

無になることしとこと二人の胸に秘め
無になることしとこと二人の胸に秘め
無になることしとこと二人の胸に秘め

無になることしとこと二人の胸に秘め
無になることしとこと二人の胸に秘め
無になることしとこと二人の胸に秘め

無になることしとこと二人の胸に秘め
無になることしとこと二人の胸に秘め
無になることしとこと二人の胸に秘め

無になることしとこと二人の胸に秘め
無になることしとこと二人の胸に秘め
無になることしとこと二人の胸に秘め

無になることしとこと二人の胸に秘め
無になることしとこと二人の胸に秘め
無になることしとこと二人の胸に秘め

無になることしとこと二人の胸に秘め
無になることしとこと二人の胸に秘め
無になることしとこと二人の胸に秘め

宏 子

晋 吾

曲ん手

しづ子

憲太郎

悦 郎

鯛 子

市 雄

智 士

重 人

一 高

シマ子

夕 花

度

頂留子

美 幸

柳 宏

喜 風

章

度

楓 楽

柳 伸

慶 三

アキラ

綾 珠

雀 踊

文 秋

庸 佑

頂留子

丁重な言葉で釘をさしている
言葉尻とられ難癖つけられる
つきはなす言葉に愛をこめている
国なまり故郷の駅が近くなる
言葉では言えぬ気持を目で語り
方言でドラマの味を盛り上げる
花活けて花の言葉を聞きながら
底割った話へあとが怖くなる
裏も表も一緒に歩いた靴の底
シベリヤの根雪の底の鎮魂歌
誉め過ぎの祝辞の底にある皮肉
釜の底焦げの旨さを知っている
広辞苑に底の深さをためされる
底光りする算盤の儲け高
井戸の底前に習って覗く旅
まな板の鯛を横目に出入を研ぐ
わたしが研ぐと切れなくなる包丁
トマト切る為に包丁研いでいる
居職の父カンナは背に研いでいる
やさしさが欲しくて心研いでいる
かがり火に修羅能続く夕涼み
夕涼みだけれども外に出ていない
間接税熱くなった夕涼み
納涼の苦が哲学聞かされる

川柳わかやま

牛尾

緑良報

折ること母におそわり母になる
浮雲は無宿流れても流れても
世の中を鬼も仏も喘いでる
祈ってもアンタがやらなあきまへん
波越えて越えて越えて素顔に戻ってる

波風が立たねばこの世味気なし
祈るほど厳しく見える飛鳥仏
終いかげの会議に波風呼ぶ男
青田波農の自信はゆるがない
世の中を見たくて井戸を出た蛙
世の中にある時勇み時
銭勘定しに来たようなこの世です
底辺に住む世の中も面白し
魚莫運ぶ風も港の木賃宿
宿の下駄むかし別れたことがある
水の美味しい宿を捜そう夏の虫
宿ひとつ持てず人生ひた走る
死ぬまでは祈る心と徳をつみ
無意無欲祈りの背なが真ん丸い
嫁った娘も互いに幸せ祈り合い
長生きも楽しいのにまだ祈り
百度石に籠める祈りをくり返す
裕福になって忘れていた祈り
無事祈る妻へ電話の宿浴衣
宿六の重病妻が本気だし
美しい神話を波が抱いている
自由化の波にのまれたみかん農
精霊を波にあずけてふりむかぬ
時代の波に乗りそこなつた失語症
世の中へ飛び出す毬を蹴ってやる
みな恥を旨く丸めて冥土まで
世の中は緋色おことおんな居て
騒乱の世の中寒き原爆忌
世の中がわかり始めて脱皮する
生きにくい世の中へでも曲げさうか
宇宙から見れば世の中遊園地

太茂津 妙峰 正知 恩 千代美 直子 紫香 作二郎 狂虎 光代 好笑 照子 静代 忠雄 信秋 輝子 正博 瑞穂 栄美子 守 結実 英子 寿子 豊太 幸 政一 三男 忠 桂香

脳死すでに祈りの域を越えている
高槻川柳サークル卯の花 河瀬芳子報
一日に果たすノルマへ重い靴
重いのに安いと言われ買っている
一途さが入り空気が重くなる
敗北の帰り首輪が重くなる
遮断機より重いつづらは今もある
桃太郎のその後は重い税に哭き
団欒の温みを抱う貝杓子
だんまりの貝貯えている力
犯行の現場にあった貝ボタン
梅雨あけて貝のおすまし袖子香る
貝柱頑固な主張持っている
夏風邪へしじみひっそりものを言い
気分転換機的位置を変えてみる
かたくなに位置を変えない北斗星
窓際的位置で西日がよくあたる
石の位置びたりと決めた龍安寺
守備位置がはつきり打者の癖を知り
小津安二郎の位置から描く父の愛
いつもの昼いつもの椅子に他人がいる
俺はもう窓際なんだ黙ってる
来賓の位置に代理がみな並ぶ
病む母へテレビの位置を変えてやる
進め進めと弾の当らぬ位置で言う
冷蔵庫の中にメロンの位置がある
愛されてすこしずれた帯の位置
うどんなら食べられそうな風邪の床
手打ちうどんなの奥に座っている機械
縄のれんうどんなで小さく恋を告げ
一泊二日駅のうどんなで解散す

緑良 百合子 栄子 勝一 みえ子 百万両 俊生 森子 豊子 稲子 正志 けいお 庸佑 正坊 白溪子 越子 暢子 房子 紫香 杜野 八重野 佐代子 晴生 ふみ 景治 俊美 行平

鍋うどん女の愚痴が煮えてくる
 はるばると海を渡つてうどん食ひ
 ご馳走に飽いてうどんを食べに出る
 衣着た蝦がうどんに浮いている
 もんべいの給仕美々卯のうどんすき
 村芝居の楽屋へ素うどん運ばれる
 孫の指す方へ飛行機とんで行き
 紫陽花のきれいな私語に騙される
 父と子のじつくり話すコップ酒
 京の床クラスに酒もよく似合う
 鉾を見てうな重頼む椅子に掛け
 サルビアの咲く頃きつと出す答
 焼なすをむく指いたたる水を替へ
 丑の日はうなぎを亡夫に先ず供へ
 梅雨晴れ間チビサッカのよく走る
 氷切る氷屋の街一人行く
 養殖の蛍水面へ帰りたい
 嫁がせてカンナ華麗な一人の譜
 くしやみする時は美人もへちまもない
 薬包紙に坂あり山あり峰がある
 ボーナスの時期も無縁で生きている
 飄々と戯画の河童を踊らせる
 本心がくるくる変る藤のつる
 反戦へお前は何をしましたか
 善人の莫迦さ加減へ戻り梅雨

不意打ちに打ち明けられたしおとし
 風雪のしがらみに耐え自由得る
 馥郁と卯の花の咲く島に住み
 風媒花有情無情の島の四季
 鳴きたい理由あつて鳴いてる夕がらす

風云児
 幸枝
 スミ子
 陽露子
 圭坊
 萬的
 泰弘
 美智子
 文子
 英子
 春風
 冬葉
 花代子
 多賀子
 栄

京都塔の会
 松川 杜の報
 美智子
 京童
 京女
 求芽
 年代

人間の理由で森が荒らされる
 夫にも言えない理由が胃にたまる
 喝采に溺れて前途見失う
 土地売った金に溺れている酒乱
 酒に溺れ恋に溺れて詩人生き
 河童或る日波に溺れた夢を見る
 付いている食事手軽に粗末過ぎ
 自転車で坊さん手軽にやって来る
 スーパーで手軽に買える里の味
 舞台で手軽に済ます昼の膳
 雨続きコインランドリーはやってる
 晩酌に目刺し焼いてる妻の留守
 お彼岸は手軽におき作る母

駒つなぎ川柳会
 里
 芳子
 小路報
 律子
 勝美
 悟郎
 凡九郎
 冬葉
 真砂
 千代三
 翠公
 祥恵
 甘平
 柳宏子
 東雲
 国公
 眉水
 潔
 外吉
 章久

真相がこんなになんで記事となる
 見込みある弟子へ厳しい愛の鞭
 投げられた賽の厳しさ愚痴るまい
 真相を知れば傷口深くなる
 真相のひと足先をデマが行く
 優しさを背中に受けた日のやる気
 お名前はかねがねなどと煽てあげ
 商品名変えただけです売り切れる
 弁当屋膳の誤報に殺される
 氣象庁鉄砲水は予報せず
 真相を聞き出す酒を追加する
 かつむりきびしい批評聞いている
 そして朝妻の厳しい目に出逢う
 叱らずにおこうやる気の勇み足
 ほんとうにやる気になつて来た無口
 名優は芸名のまま逝かせたし
 表れにまだ生かされている亡夫
 呆け封じのお寺で名前乾かせる
 雨予報飯場は遅い灯にさわぐ
 裾冷える画廊あしたは雨だろう
 真相を灰色に塗り平和です
 真相は知らない方が良い蛙
 厳しさとやさしさがある父の傘
 大まかが父の厳しさ知っている
 厳格な父の涙で嫁さ行く
 夕焼けた予報嬉しい鬼瓦
 捨て去った名を地下足袋は振り向かぬ
 校則にやる気殺がれている生徒
 雅号持つちがう自分になりたくて
 愛染さん母の予報の通り雨
 真相は語らずラストエンペラー

庸佑
 文秋
 頂留子
 喜代治
 幸治
 あおい
 新造
 射月芳
 覺然坊
 月子
 素灯
 壯之助
 英一
 信治
 しんじ
 重人
 作二郎
 章
 萬的
 正一
 浩一郎
 美津枝
 凡子
 柳右子
 善信
 美幸
 俊夫
 楓楽
 天笑
 恭太

風上に立たされている磔

自己暗示かけてやる気を取り戻す

真相は知らない振りして酌み交し

川柳大阪

山下みつる報

一匹の蟬の虚勢が盛夏呼ぶ

思慕を断つ決断力にのぶる詩

フルムーン何年ぶりのかの妻の肌

雨続き靴はかせたい猫の足

逆境にあつても種火消してない

買いだめの洗剤棚にまだ残り

腹を据え飲んだ胃カメラ敵に見え

名脇役小さく載つて黄泉の国

寡困気を吸つて買わずの戎橋

強欲な伯父とつながる血が憎い

太陽も女もまぶしい夏の浜

ああ猛暑恐れ相次ぐ水の事故

米あまり食べなくなつた日本人

手を焼いた娘がもう臨月の腹がかえ

禁煙車連結あたりは喫煙所

なによりも父の無口が身にこたえ

ふる里で主を待つてる水車小屋

文明の残骸に怒る水の神

名水をバックで買つて飲む水都

作られた英雄だつてある世界

汗水の重さずしりと財となり

水くさい都会の中で水談義

空梅雨に賑わうプールも水不足

水汚す犯人は科学だ人間だ

英雄にされて自由がはしくなる

内視鏡墳墓の英雄ねむられず

大漁へ夫の無事を祈る妻

雀踊子

柳伸

小路

洛醉

我勝

柳弘

宙人

重人

与呂志

喜醉

雅果

比呂志

希久志

亮太

亮太

亮太

亮太

亮太

亮太

亮太

亮太

亮太

亮太

亮太

亮太

亮太

亮太

亮太

亮太

亮太

亮太

飛行機の離陸思わずナムアマタ

村祭りふと寅さんがいてるかも

英雄になりたがるから無理がくる

貝になり無口を通す宮仕え

堀江正朗・中川幸一・園山多賀子喜寿祝賀

吉岡きみえ報

糸口が見つからぬ子に折れてやる

一生を芸にまかせせる糸人形

手伝つた糸巻き高いものにつき

見直され絹糸へ農婦意欲出す

娘が夢を猫いて晴着の糸を抜く

高砂で結んだ糸もいつか伸び

糸屑を払いわたしの今日が暮れ

義理の娘へ繋いだ母の温い糸

農々の糸針一本で子を育て

農拓の背中で余裕生きている

余裕の出た生活しゴミ箱からこぼれ

余裕ある暮しがみせる身づくろい

生か死か別れに能を舞う余裕

切り札を持った男の目が笑う

余裕も出来て妻に西陣買つてやる

妻伊川が余裕なくすと村が泣く

靴ひもを結ぶ余裕のかずら橋

七本の釘は余裕がほしい小商人

旅に出る余裕がほしい小商人

農繁期妻にたつぷり乳がある

喜寿の座へ浮世ぐつたまめな顔

想い出は妻と温めた喜寿の旅

喜寿を越え米寿へ締める靴の紐

人生の経験みごとに喜寿の華

出な精を出好きな喜寿がなぐさめる

醉舟

敏

金太

みつる

久栄

篤子

軒太

房子

きよし

春雄

秀子

久代

舞吉

舞吉

舞吉

舞吉

舞吉

舞吉

舞吉

舞吉

舞吉

舞吉

舞吉

舞吉

舞吉

舞吉

舞吉

舞吉

舞吉

舞吉

舞吉

喜寿夫婦無口の中にある対話

さあ米寿目指して喜寿の祝い舟

喜寿迎え妻の支えを信じきる

お目出度う妻から受ける喜寿の酌

もう喜寿か夫んだ喜寿かと励まされ

幸せを蜜の夫婦は五分にわけ

ほどほどの幸せ朝の焼なすび

めめつこ愛し合つて今日の幸

幸いに息災同土茶がうまい

東の間の幸い僕のコップ酒

プロポーズからの幸せ知る指輪

幸いにまだ惚けもせず文字も読め

ほどほどの幸せでよい南瓜煮る

幸せの結び目少しずつ解ける

幸福の絶頂という恐ろしさ

幸いに神も仏も酒が好き

赤紙を三度も貰い生きていく

同じ道父の樹多い実をつける

布施多く包み安らぐ仏の灯

没の句よ泣くな仲間は多くいる

船頭が多くて会議進まない

心電図あなたは苦勞が多すぎる

多岐も所詮裸でゆくところ

多く決を知つていたのは風の道

多い方へついて流れた白い道

名水と多くの村が競いあい

止り木が多情な女で定まらず

老いてから多くは言わぬ啞になる

億という桁でも私の五つ玉

友達の数に負けていないボク

晩酌のすこし多いと妻の鞭

重昭

ちかし

水煙

代仕男

正朗

裕

しま子

慎枝

久道

為一郎

芳子

ノブ

クニ子

英佐子

元之介

肇

幸一

河南

孝太郎

紋次郎

萬吉

和子

江雲

智恵

功

フミ子

吉枝

雪子

早苗

美樹子

勝平

幸多い余生に点す灯を探す
母病めば多く語らぬ父の眉
多情多恨傘寿の部屋にある歴史
多謝多謝と師は満天の星となる
褒め言葉あとの小骨が多かった
わたくしへ多めに塩を振る亡母で
疑問符が老いの生活に多過ぎる
宝にも危険物にもなる子供
正直という宝だけ持つ父で
ラムネ壘じつと宝を抱えている
長生きを祝い子宝寄つて来る
僕を差し置いて宝を探す妻
寶石に母の歴史が刻まれる
宝刀を投げて綴つたやり直し
ライバルの宝石箱が重く見え
盛りの良い方へ子供等寄つて来る
女盛り聖子は五輪へ疾走す
盛り場の遊び上手に寄る女
子供の夢盛った広場の青い空
盛りだくさんな話にみんな酔っている
盛大な拍手へ舌が回りがね
盛り場へ酒の情を買いに行く
祝い唄いずも詠りて盛りあがる
わたしの地図へ大きな夢を盛つてみる
盛大な拍手この日のために鳴り
老いてなお盛ん真赤なシャツを着る
人生の盛り夫婦の夕ガを締め
山盛りにもれば幸せこぼれ出す
夢を盛る皿はきれいにみがいくとく
人生の慶事へ愛の花を盛る
幸せになろうとなつと船を漕ぐ

竹 夫 律 子 壽 美 好 美 千 代 多 賀 子 禮 次 弁 次 郎 荒 介 愚 童 佐 治 重 吉 良 行 鐘 童 嘉 壽 恵 美 磯 妙 子 馨 子 芳 風 勝 子 正 朗 操 子 ま さ え 由 紀 子 三 代 昭 二 文 子 町 紅 雨 学

健康が宝百まで生きなはれ
川柳たけはら 森井 青居 朗
ファミコンをいっばいやつておこられた
がっこうのあきがおふたつききました
まじつはいつかかけなくなっている
じいちゃんが出来てくれ空手入賞す
きもだめし一回やってみたいもの
夏休み待ち遠しいと思う朝
学校のプール25メートル泳げたよ
月山のなつのスキ一のすばらしさ
土曜市金魚すくいがない
土曜日金魚すくいがない
夏らしいけしきが似合うお父さん
むしむしといらいらさそう不快指数
本曜日だけ僕はじゅくへ行く
当たは心配してはからおこり
したたかに生きよアルバイトを許す
政治屋がまた日の丸に泥をぬり
通知表やさしい言葉かけておく
後遺症耐えねばならぬ夏の陣
するめいか焼かれて修羅の顔を見せ
思い出が孤独をいやす今宵かな
虫干しへ褪せたロマンがぶら下が
心にゆとりが出来て花を買い
旅装とに惹かれて佇てばテーブなり
琴の音に惹かれて佇てばテーブなり
幸福よ笑ひ袋の孫と住む
老眼鏡どこへ行くにも手離せず
家計簿の子算これならいけるだらう
衣食住たりた昨今病む人よ
明日を見る眼鏡がほしい夢を持つ

明 朗 幼 典 之 小 一 歩 美 枝 小 二 孝 永 小 三 史 弘 小 四 裕 次 郎 小 五 規 幸 小 五 晶 美 小 五 晴 美 小 五 慶 子 小 六 由 博 中 三 純 平 中 三 里 貴 子 青 居 政 己 蘭 幸 静 水 俊 夫 君 枝 静 佳 光 子 千 恵 栄 恵 愛 子 清 水 ヤ ス エ ト シ 江 喜 久 恵

派手を着て笑われていて長寿なり
人生の余白を埋める裁ち鋏
同姓同名こちらが兄で気にならぬ
安定刺つかわず今夜般若経
背な向けて気楽に寝れる歳になり
難題を出され私は解けぬまま
夫婦して笹とりにいく七夕よ
ごきげんよう花と笑顔を保つ朝
笛吹いた過去をピエロとなつかしむ
ブラトニックの有夫恋なら二つ三つ
白衣着た昔も在った友見舞う
好転のきざし易者を信じよう
変化球投げねば孫は喜ばず
盃を干して夫婦が出来上がる
先頭が怖く二番手キープする
八分咲き保つていたい胸の花
どこかで何かが鮮烈な飛行雲
途中下車させてはくれぬ旅続く
参観日和の中にいる子を見つめ
ジャンケンポンはさみばかりで又負ける
振り込みでよし給料のありがたさ
灯りばんやり灯りばんやり迎え酒ひとり
人様の幸わが幸とするしあわせや
ペアルック妻のおしゃれに馴らされる
退任の札を妻にはまだ言えず
疎障川柳 稲田 豊作 報

浪 子 喜 美 子 雪 子 麻 代 比 呂 子 淑 子 静 風 貞 子 美 佐 雄 笑 子 節 夫 康 子 房 子 一 路 令 子 博 子 静 火 杏 観 シゲヨ 新 造 笹 舟 豊 作 報 柳 香 文 古 進 一 八 重 子

長兄を庇うて次男は泥かぶる

次男坊分家さすほど金はなし

天国の父よ次男は分家した

次男にも健てやりたい親心

強がりを言つて負けない次男坊

次男の拾う小石に角がありすぎる

川柳塔まつえ八月例会 恒松

ロボットが主役人間ふり回す

よく揺れる小舟主役が欠けている

金離れよいから主役に祭り上げ

団樂の主役にされる赤ん坊

スクラムの平和のドラマみな主役

ハムレットを演じている僕がいる

芸の道主役も泣いた舞台裏

辨慶が主役観席息を吞む

危機一発主役はいつも生き残り

わが家には主役がない老夫婦

流れ星別れ話は聞かぬふり

明星を見上げて妥協するつもり

繁榮の裏に星降る過疎の里

子の熱がやと下った明けの星

満天の星へ祈りが届きそう

いちばん星と少うし長い話する

宇宙人地球の星を狙つて

北斗星思い出遠くなる広野

入院してから星が奇麗すぎ

星に目を凝らす逢いたい顔になる

眉きりり妥協をしない若さです

六階へ若さ一気にかける

若いカップル母の港を船出する

若い日の恋が生きてる古日記

一 眺 健太郎 行江 三香

若き日の過ち悔いて藤の花
盃を持つと若い血疼きだす
吊橋は若い二人の通い道
補聴器も眼鏡の話もしていない
若い者の世話にならぬと拗ねている
黒髪の端まで若さが炎えている
笑い声家中に撒く娘が帰る
ひと声で母は安堵の胸をさげ
笑い声消して喪の家通るすぎ
その声が泣かせたこともある
声かぎり子と呼ぶ万燈の灯がゆれる
泣き声に言い分がある反抗期
何となく心に沁みる母の味
何となくその気にさせたお人柄
何となく恋仲に見える二人連れ
何となく父に似ている好きな人
何となくそんな気がした梅田駅
なんとなく話が合った瓜楊枝
なんとなく話合った瓜楊枝

みえ 正朗 米子 妻子 静翁 著流 多賀子 文子 巡歩 ミツコ 与根一 長三 まさし 幸子 静江 鶴丸 町紅

運のいい車窓より見る大惨事
良し悪しも運と思えば気が軽い
自我捨てて運にまかせて寝ています
地獄迄落ちたら運も手を出さず
大吉のみくじしばらくお守りに
運命論者のわりにはくちが多すぎる
週刊誌星占いを先に読む
顔かたち男運とは無関係
大病が治つて夫円くなら
瀬戸大橋百万人目の当り運
運のない男に添うた妻の意地
貧しさの中に子が居り孫が居り
運だめしまたははずれたジャンボくじ
自販機のオマケ当つただけの運
折角の二重帳簿を見つけれ
下手ですが運が頼りのパイ握る
そのうちに運が向きます手内職

トシエ 市子 初子 百子 道子 春子 幸枝 恵以子 江君 弘直 知佐子 信一 久美子 雅子 登美子 三四子 千代女 今日子 美緒 泰子 智恵子 鶴丸 月子 天笑 薫風

八尾市公民館川柳教室 高杉

鬼遊報

自販機の売り切れ一度叩かれる
運が良い運が悪いと生きてます
世の中は悪いやつほど運がよい
雑草が踏まれて運の花が咲き
運鈍根どこかへ置いて来たらしい
悪運の強いものには神も負け
キャンセルが生死を分ける空の旅
子の出世親の名が出る運のよき
運だめし妻も夫もくじを買い
花言葉明日のさだめのめじるしに
落石注意運を信じて走り抜け

サークル檸檬(前月分) 片岡智恵子報

サークル檸檬(前月分) 片岡智恵子報

10月各地句会案内

	日 / 時 及 び 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	7日(金) 午後1時より 影・怒る・自由吟	サンシビック尼崎 阪神電車尼崎下車南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号 田淵定人 句会費 300円 投句料 60円切手 3枚
川 柳 塔 まつえ	8日(土) 午後1時半より 秘密・小銭・踊る	慈雲寺 松江市和多見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
西宮北口	10日(月) 午後1時より 移る・鐘・自由吟	西宮市中央公民館 阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料 60円切手 4枚
八尾市民 川 柳 会	12日(水) 夕6時より すし・曇る・ホテル・踏む	八尾市立労働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市弓削町南2-141 飯田悦郎
川 柳 わかやま	16日(日) 午後1時より 着物・哀・下手	和歌山県民文化会館4F中集会場 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料60円切手 3枚
川 柳 ねやがわ	16日(日) 正午より 盲点・髪・誘惑・自由吟	寝屋川市立総合センター4階 寝屋川市駅下車京阪バス総合センター前下車 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 60円切手 3枚
もくせい 川 柳 会	17日(月) 午後1時より 祭・苦勞・静か・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急宝塚線曾根下車東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
南 大 阪 川 柳 会	19日(水) 夕6時より 背後・まとめる・厄介・乱雑	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 180円(郵券可)
南海電鉄 川 柳 部	20日(木) 夕6時より 旅情・養子・粘り	南海会館ビル内南海電鉄本社地下食堂 南海・近鉄・地下鉄各難波駅下車高島屋東南角 〒545 大阪市南区難波5丁目1番60号 南海電気鉄道(株) (川柳部) 用地管理部管理課 廣井李雄 句会費 無料 投句料 60円切手 1枚
高槻川柳 サークル 卯 の 花	20日(木) 午後1時より 相手・高い・事件・自由吟	高槻市民会館301号室 阪急電車高槻下車歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児 句会費 500円 投句料 200円(60円切手3枚と20円切手1枚) 各題2句
富 柳 会	20日(木) 午後1時より 妻・積み木・追伸	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴353 池 森子
駒つなぎ 川 柳 会	24日(月) 夕6時より 釘・用意・儀式・落ちる	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南口下車 南へ1丁3筋目左へ駅より歩3分 〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1-3-11 津守柳伸
※堺川柳会は16日(日)堺まつり協賛市民川柳の会、 川柳東大阪は30日(日)第16回市民川柳大会のため、今月の例会はお休みです。		

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円(郵券可)、各題3句以内

原稿送り先(〆切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)

〒597 貝塚市地藏堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

● 募 集 ●

十二月号発表 (10月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 葉選
水煙抄 (10句) 黒川 紫香選
愛染帖 (3句) 橘高 薫風選
茴香の花 (3句・女性) 八木千代選
吟 (5句) 「癖」 広井季柳子選
課題 (5句) 「岸」 園山多賀子選
「目標」 谷 信夫選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限りません。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

一月号発表 (11月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 葉選
水煙抄 (10句) 黒川 紫香選
愛染帖 (3句) 橘高 薫風選
茴香の花 (3句・女性) 小出智子選
吟 (5句) 「誓い」 恒松町紅選
課題 (5句) 「待つ」 榎谷寿馬選
「敵」 越智一水選

★愛染帖・茴香の花・課題吟は同人・誌友を限らず。

10月の常任理事会は1日(土)

定価 五百円 (送料50円)
半年分 三千二百円 (送料共)
一年分 六千三百円 (送料共)

昭和六十二年九月二十五日印刷
昭和六十二年十月一日発行

編集兼 西尾 巖
印刷所 藤原 童心社
〒545 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所 川柳塔社
電話 〇六六九一六九一四番
振替口座大阪 8133368番

本社10月句会

日時 十月二日(日) 午後五時三十分
会場 大阪市立労働会館
JR環状線又は地下鉄中央線
「森ノ宮」下車すぐ

兼題 「幸い」 西田 柳宏選
「走る」 阿里山 小柳 幸子選
「眼鏡」 西尾 萬路 葉選
「話」 西尾 萬路 葉選

席題 二題 当日発表 各題三句以内厳守
会費 五百円

★投句は柳箋(4cm×19cm)に一葉一句。
各葉毎に裏面に必ず氏名明記。
投句料 300円(60円切手5枚)同封のこと。

川 柳 塔 社

11月の兼題 「蓋」 「煉瓦」
「葺う」 「紅」

11月の本社句会は7日(月)

『夜市川柳』募集

第5回 「輪」 小島蘭幸選
3句・締切10月末日

第6回 「舟」 小出智子選
締切 11月末日

投句先 〒593 堺市堀上緑町二一九一二
河内天笑方
堺川柳会

編集後記

☆十月の同人総会、二賞発表句会の頃は、秋がぐんぐん深まりを見せ、虫の声にも一入張りを感じられる。

で朗巻アラレ。生みの親は則巻千兵衛、通称ドクター。スランプである。アラレは空を飛ぶことは出来ない。では、おなかからミサイルを発射出来るのかといえは、そうでもないで、どうして悪と戦うの。やっぱし女の色気」と、はかせに尋ねる所など秀逸だ。はかせと町に出て入った喫茶店のウェイトレスに「あなた顔、ハナのアナがない」と看破される。漫画もずい分と変って、私たちが「のらくろ」を愛読したと同じにアラレちゃんの前白さも理解出来る。いずれも時代を表現しているのて意義があり、作句の要領に通じる。

にも格別の爽やかさを覚えさせる厳しさがある。川柳は秋の詞華である(薫)。

し、安い料金で自然の花々を観賞できた植物園も今はとりこわされて見ることもできない。

封の大盤振舞いとなる。これを「カネで釣るのか」と顔をしかめる向きもあるが、フロの世界にカネはつきもの。目くらまら立てることもあるまい。

今年のお路郎賞は高橋操子さんに輝く。「アトリエのみかんころんだものでない」。

▼夏のお路郎賞を観に行つた。能は時たま観るが好きだと言えは、能そのものを知らない。その都度ハンドブックを手引きに閱わりを持とうと努力する。生国魂神社の闇を切りひらくかがり火は幽玄の世界へ観客を誘う。それはそれとしい。

▼美術館の前の石段下には、猫の額ほどの平地がある。これが公園を追われた人々に残された、たつた一つの憩いの広場なのだろう。一畳ほどのスペースにカラオケのセットが置かれ、マイクを握って次々と歌い出す。旅回りの役者気どりで曲に合せて踊る者もいる。木陰の石段が観客席になっている。この中に新空港を必要とする人がいるか。

き) 六カネは魔物というけれど、軽蔑していた男にいつしか惚れてゆく、そんな女の心情に似たところがカネにもあるようだ。

☆中学の同級生が死んで、真夏の昼下り葬式に行つた。一流企業の重役だったからそれなりに立派な葬式だった。いよいよ出棺というとき、二十数羽の鳩が一斉に放たれた。進行係の説明によると「放鳩の儀」と言い白い鳩は天国への案内役だそう。

「思いきり眠つてみたいね」。

▼今さら天王寺博でもあるまいしと思つていた通り、博覧会は駐車場建設の單なる布石だったのかも知れない。公園を憩いの場にして、いる人々を体よく追い出

は、どう考えてもおかしな話である。聴くところによれば、大阪新空港に対応するための自動車の駐車場にするつもりらしい。

☆フロ野球もいよいよ大詰め。本誌が出る頃は決着がついているだろうが、目下セ・パ両リーグともゴールめざし最後のデッドヒートの真つ最中。競馬でいうなら、四コーナーを回り直線あと百m、騎手がバレバシムチを入れるところ。でも野球選手は馬ではないからムチばかりでは動かない。アメも必要。そこで勝利に貢献した選手に監督賞金一

「思いきり眠つてみたいね」。

▼今さら天王寺博でもあるまいしと思つていた通り、博覧会は駐車場建設の單なる布石だったのかも知れない。公園を憩いの場にして、いる人々を体よく追い出

は、どう考えてもおかしな話である。聴くところによれば、大阪新空港に対応するための自動車の駐車場にするつもりらしい。

☆フロ野球もいよいよ大詰め。本誌が出る頃は決着がついているだろうが、目下セ・パ両リーグともゴールめざし最後のデッドヒートの真つ最中。競馬でいうなら、四コーナーを回り直線あと百m、騎手がバレバシムチを入れるところ。でも野球選手は馬ではないからムチばかりでは動かない。アメも必要。そこで勝利に貢献した選手に監督賞金一

「思いきり眠つてみたいね」。

▼今さら天王寺博でもあるまいしと思つていた通り、博覧会は駐車場建設の單なる布石だったのかも知れない。公園を憩いの場にして、いる人々を体よく追い出

は、どう考えてもおかしな話である。聴くところによれば、大阪新空港に対応するための自動車の駐車場にするつもりらしい。

☆フロ野球もいよいよ大詰め。本誌が出る頃は決着がついているだろうが、目下セ・パ両リーグともゴールめざし最後のデッドヒートの真つ最中。競馬でいうなら、四コーナーを回り直線あと百m、騎手がバレバシムチを入れるところ。でも野球選手は馬ではないからムチばかりでは動かない。アメも必要。そこで勝利に貢献した選手に監督賞金一

☆中学の同級生が死んで、真夏の昼下り葬式に行つた。一流企業の重役だったからそれなりに立派な葬式だった。いよいよ出棺というとき、二十数羽の鳩が一斉に放たれた。進行係の説明によると「放鳩の儀」と言い白い鳩は天国への案内役だそう。

「思いきり眠つてみたいね」。

▼今さら天王寺博でもあるまいしと思つていた通り、博覧会は駐車場建設の單なる布石だったのかも知れない。公園を憩いの場にして、いる人々を体よく追い出

は、どう考えてもおかしな話である。聴くところによれば、大阪新空港に対応するための自動車の駐車場にするつもりらしい。

☆フロ野球もいよいよ大詰め。本誌が出る頃は決着がついているだろうが、目下セ・パ両リーグともゴールめざし最後のデッドヒートの真つ最中。競馬でいうなら、四コーナーを回り直線あと百m、騎手がバレバシムチを入れるところ。でも野球選手は馬ではないからムチばかりでは動かない。アメも必要。そこで勝利に貢献した選手に監督賞金一

☆中学の同級生が死んで、真夏の昼下り葬式に行つた。一流企業の重役だったからそれなりに立派な葬式だった。いよいよ出棺というとき、二十数羽の鳩が一斉に放たれた。進行係の説明によると「放鳩の儀」と言い白い鳩は天国への案内役だそう。

NEW FORMAL COLLECTION



泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた。
男のロマンと
フオーマルと。

OSK JEFF
ORIGINAL DESIGN

株式会社 **大エスケ**

〒540 大阪市東区南新町1-13
☎ 06(941) 8 0 1 5

5つの個性・5つの色味!!

アイスクャンデー

ミルク・アズキ・パイン・チョコ・宇治金時



なんば戎橋筋本店
ななば高島屋百貨店
岸北高島屋百貨店
京都高島屋百貨店
阪神百貨店
松阪屋百貨店
そごう百貨店
京阪モール店

ササノア中之島店
ササノア淀屋橋店
アベノ近鉄百貨店
上本町近鉄百貨店
東大阪近鉄百貨店
奈良近鉄百貨店
京都近鉄百貨店

なんば新川店
北のまち店
トーチカ店
南海難波駅店
国鉄大阪駅店
梅田大丸百貨店
堺東店



大 阪 ・ な ン ば



TEL 641-0551